

阿武隈川上流河川改修事業

トロミ地区遺跡調査報告 1

トロミ遺跡（1次調査）

2012年

福島県教育委員会
財団 福島県文化振興財団
国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所

阿武隈川上流河川改修事業

トロミ地区遺跡調査報告 1

トロミ遺跡（1次調査）

序 文

文化財は、それぞれの地域の歴史に根ざした文化遺産であると同時に、我が国の歴史や文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎をなすものです。

国土交通省が実施する「阿武隈川上流河川改修事業(トロミ地区)」は、阿武隈川上流部のうち二本松市トロミ地区の堤防を整備する事業です。この工事の完成により、出水による冠水などの災害を防ぐことができます。

福島県教育委員会では、この計画地区内にある周知の埋蔵文化財包蔵地、いわゆる遺跡を含めた文化財を保存するため、関係機関と協議を重ねてきましたが、現状で保存が困難なものについては、詳細な記録を残すために発掘調査を実施することとしました。

本報告書は、平成23年度から発掘調査を開始した、二本松市北トロミ・南トロミに所在するトロミ遺跡の第1次調査結果をまとめたものです。

今回の調査では、鎌倉時代の掘立柱建物跡14棟を始め、奈良・平安時代の竪穴住居跡16軒、溝跡13条などを確認しました。また遺構の周辺では、鎌倉時代のかわらけや陶磁器、奈良・平安時代の土師器・須恵器や瓦、縄文時代の土器・石器など数多くの遺物が出土しました。

調査の結果により、トロミ地区には鎌倉時代の有力者の屋敷があったものと推定しています。また、時代を遡って古代には郡役所との関連が推測され、さらに、古くは縄文時代早期の人々が活動の痕跡を残していたことも明らかとなりました。これらの成果から窺われるのは、この地が各時代の人々にとって重要な地域であったということです。

今後、この報告書が、県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習等の資料として広く活用いただけることを切に願います。

最後に、発掘調査の実施に当たり、御協力いただいた二本松市教育委員会、国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所、財団法人福島県文化振興財団を始めとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成24年12月

福島県教育委員会

教育長 杉 昭 重

あいさつ

財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模な開発に先立ち、開発対象地内にある埋蔵文化財の調査を実施しています。

本報告書は、阿武隈川上流河川改修事業の実施に伴い、平成23年度に発掘調査を行った二本松市トロミ地区に所在するトロミ遺跡の調査成果をまとめたものです。

今回の1次調査では、縄文時代の竪穴住居跡や落し穴、奈良・平安時代の竪穴住居跡や溝跡などが確認され、当時の人々が使用した縄文土器や須恵器・土師器・石器などが多く出土しました。その中で、縄文時代前期後半の土器には、東北地方の土器に交じって、東関東を中心に分布した土器も出土していることから、当時の人々が東関東の人々と交流していたことを推測することができます。また、奈良・平安時代の墨書土器や円面硯は、当遺跡の性格を考える上で貴重な発見となりました。

今後、この報告書を郷土の歴史研究の基礎資料として、広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに、この調査に御協力いただきました二本松市並びに地域住民の皆様に、深く感謝申し上げますとともに、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成24年12月

財団法人 福島県文化振興財団


理事長 遠藤俊博

緒 言


- 1 本書は、平成23年度に実施した阿武隈川上流河川改修事業トロミ地区埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 本書は、福島県二本松市北トロミ・南トロミに所在するトロミ遺跡(埋蔵文化財番号：21000138)の1次調査の内、調査②・⑤上・⑦・⑧区の成果を取録したものである。
- 3 当遺跡発掘調査事業は、福島県教育委員会が国土交通省の委託を受けて実施し、調査にかかる費用は国土交通省が負担した。
- 4 福島県教育委員会は、発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団(現、財団法人福島県文化振興財団)に委託して実施した。
- 5 財団法人福島県文化振興事業団(現、財団法人福島県文化振興財団)では、遺跡調査部遺跡調査課の下記の職員を配置して調査にあたった。
副 主 幹 吉 田 功 専門文化財主査 能登谷宜康
文化財主査 大河原 勉 文化財副主査 三浦 武司
さらに、調査期間中には臨時的に以下の職員を配置した。
文化財主査 佐 藤 啓 文化財主査 阿部 知己 嘱 託 八木 博之
- 6 本書の執筆は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。
- 7 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図、並びに同省東北地方整備局福島河川国道事務所が製作した工事用地図を複製したものである。
- 8 本書に収録した調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 9 発掘調査および報告書の作成に際して、次の機関および個人から協力・助言を頂いた。
二本松市教育委員会
中山 雅弘 日下 政勝 高橋 博志 菅野 和博
木本 元治 小野 正敏 黒坂 雅人 高 桑 登 (順不同・敬称略)

用 例

1 本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 方 位 図中の方位は真北を示す。方位記号がないものは、図の真上を真北とする。
- (2) 縮 尺 各挿図中に縮小率を示した。
- (3) ケ バ 遺構内の傾斜部は「Ⅲ」, 相対的に緩傾斜の部分には「下」, 後世の擾乱部や人為的な削土部は「ア」の記号で表現した。
- (4) 土 層 遺構外堆積土は大文字のLとローマ数字で、遺構内堆積土は小文字のℓと算用数字で表記した。
(例) 遺構外自然堆積土…L I・L II 遺構内堆積土…ℓ 1・ℓ 2
- (5) 標 高 挿図中に示した標高は、海拔高度を示す。
- (6) 網 点  は被熱範囲を示す。それ以外の凡例は、同図中に表示した。
- (7) 遺 構 番 号 当該遺構は正式名称、その他の遺構は記号化した略称で記載した。
- (8) 土 色 土層注記に使用した土色は、「新版標準土色帖 22版」(小山正忠・竹原秀雄 1999)に基づいている。

2 本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 縮 尺 各挿図中に縮小率を示した。
- (2) 土器断面 須恵器の断面は黒塗りとした。粘土積み上げ痕を一点鎖線で表記し、胎土中に繊維が混和されたものには▲を付した。
- (3) 網 点  は黒色処理を示す。それ以外の凡例は同図中に示した。
- (4) 遺物番号 挿図ごとに通し番号を付し、本文中では下記のように省略した。
(例) 図1の2番の遺物…図1-2
遺物写真中で遺物に付した番号は、挿図中の遺物番号と一致する。
(例) 1-2…図1-2
- (5) 遺物計測値 () 内の数値は推定値, [] 内の数値は遺存値を示す。

3 本書で使用した略号は、次のとおりである。

二本松市…NM	トロミ遺跡…TRM	竪穴住居跡…S I	溝 跡…SD
土 坑…SK	土器埋設遺構…SM	柱穴・小穴…P	グリッド…G
遺構外堆積土…L	遺構内堆積土…ℓ		

4 引用・参考文献は、執筆者の敬称を省略し、巻末に収めた。

目 次

序 章

第1節 事業の概要と調査経過	1
第2節 地理的環境	6
第3節 歴史的環境	8
第4節 調査方法	14

第1章 調査②区の調査成果

第1節 調査経過と概要	16			
第2節 基本土層	19			
第3節 竪穴住居跡	22			
11号住居跡(22)	12号住居跡(24)	13号住居跡(27)	14号住居跡(29)	
第4節 土 坑	32			
8号土坑(32)	9号土坑(32)	10号土坑(33)	11号土坑(33)	12号土坑(33)
13号土坑(35)	14号土坑(35)	15号土坑(35)	16号土坑(37)	17号土坑(37)
18号土坑(37)	19号土坑(39)	20号土坑(39)		
第5節 溝 跡	39			
7号溝跡(39)	8号溝跡(41)			
第6節 小 穴	42			
K51グリッドP1～5(42)				
第7節 遺物包含層	43			
層序と分布(43)	土 器(44)	石器・石製品(54)	その 他(56)	

第2章 調査⑤上区の調査成果

第1節 調査経過と概要	57
第2節 基本土層	58
第3節 土 坑	60
21号土坑(60)	
第4節 溝 跡	60
12号溝跡(63)	13号溝跡(63)
第5節 遺物包含層	64
層序と分布(64)	土 器(64)

第3章 調査⑦区の調査成果

第1節 調査経過と概要	66
第2節 基本土層	66
第3節 溝 跡	68
1号溝跡(68)	
第4節 遺物包含層	69
層序と分布(69)	土 器(70) 石 器(73)

第4章 調査⑧区の調査成果

第1節 調査経過と概要	74			
第2節 基本土層	76			
第3節 竪穴住居跡	78			
1号住居跡(78)	2号住居跡(81)	7号住居跡(84)		
第4節 土 坑	86			
1号土坑(86)	2号土坑(87)	3号土坑(87)	4号土坑(88)	5号土坑(88)
6号土坑(88)	7号土坑(91)			
第5節 溝 跡	91			
2号溝跡(91)	3号溝跡(92)	4号溝跡(92)	5号溝跡(94)	6号溝跡(94)
第6節 土器埋設遺構	96			
1号土器埋設遺構(96)				
第7節 遺物包含層	97			
層序と分布(97)	土器・土製品(97)	石 器(107)		

第5章 ま と め110

挿図・表・写真目次

[挿図]

図1 阿武隈川上流河川改修事業位置図……………1	図33 調査②区遺物包含層出土遺物(10)……………56
図2 工事計画図……………2	図34 調査⑤上区遺構配置図・基本土層……………59
図3 調査区剖面図……………4	図35 21号土坑・出土遺物……………61
図4 トロミ遺跡周辺の地形分類図……………7	図36 12・13号溝跡……………62
図5 トロミ遺跡周辺の遺跡……………11	図37 遺物包含層出土遺物……………65
図6 グリッド配置図……………15	図38 調査⑦区遺構配置図・基本土層……………67
図7 調査②区遺構配置図(1)……………17	図39 1号溝跡・出土遺物……………68
図8 調査②区遺構配置図(2)……………18	図40 調査⑦区遺物包含層出土遺物(1)……………71
図9 調査②区基本土層……………21	図41 調査⑦区遺物包含層出土遺物(2)……………72
図10 11号住居跡……………23	図42 調査⑧区遺構配置図……………74
図11 11号住居跡カマド・出土遺物……………24	図43 調査⑧区地形図……………75
図12 12号住居跡……………25	図44 調査⑧区基本土層……………77
図13 12号住居跡カマド・出土遺物……………26	図45 1号住居跡……………79
図14 13号住居跡……………28	図46 1号住居跡カマド・出土遺物……………80
図15 13号住居跡カマド……………29	図47 2号住居跡……………82
図16 14号住居跡……………30	図48 2号住居跡出土遺物……………83
図17 14号住居跡出土遺物……………31	図49 7号住居跡・出土遺物……………84
図18 8～12号土坑……………34	図50 7号住居跡カマド……………85
図19 13～18号土坑……………36	図51 1～4号土坑……………89
図20 19・20号土坑、9・11号土坑出土遺物……………38	図52 5～7号土坑、2号土坑出土遺物……………90
図21 7号溝跡・出土遺物……………40	図53 2～6号溝跡……………92
図22 8号溝跡……………42	図54 2～4・6号溝跡……………93
図23 K51グリッドピット1～5……………43	図55 5号溝跡、4・5号溝跡出土遺物……………95
図24 調査②区遺物包含層出土遺物(1)……………46	図56 1号土器埋設遺構・出土遺物……………96
図25 調査②区遺物包含層出土遺物(2)……………47	図57 調査⑧区遺物包含層出土遺物(1)……………98
図26 調査②区遺物包含層出土遺物(3)……………48	図58 調査⑧区遺物包含層出土遺物(2)……………100
図27 調査②区遺物包含層出土遺物(4)……………49	図59 調査⑧区遺物包含層出土遺物(3)……………101
図28 調査②区遺物包含層出土遺物(5)……………50	図60 調査⑧区遺物包含層出土遺物(4)……………103
図29 調査②区遺物包含層出土遺物(6)……………51	図61 調査⑧区遺物包含層出土遺物(5)……………105
図30 調査②区遺物包含層出土遺物(7)……………52	図62 調査⑧区遺物包含層出土遺物(6)……………106
図31 調査②区遺物包含層出土遺物(8)……………54	図63 調査⑧区遺物包含層出土遺物(7)……………108
図32 調査②区遺物包含層出土遺物(9)……………55	図64 調査⑧区遺物包含層出土遺物(8)……………109

[表]

表1 周辺の遺跡一覧(1).....12	表2 周辺の遺跡一覧(2).....13
----------------------	----------------------

[写真]

1 遺跡全景.....115	31 1号溝跡細部・作業風景.....133
2 遺跡全景.....115	32 1号溝跡出土遺物.....134
3 調査②区全景.....116	33 調査⑦区遺物包含層出土遺物(1).....134
4 調査②区近景.....116	34 調査⑦区遺物包含層出土遺物(2).....135
5 調査②区基本土層A-A'.....117	35 調査⑦区遺物包含層出土遺物(3).....135
6 調査②区基本土層B-B'.....117	36 調査⑧区全景.....136
7 11号住居跡全景.....118	37 調査⑧区全景.....136
8 11号住居跡細部.....118	38 調査⑧区基本土層.....137
9 12号住居跡全景.....119	39 1号住居跡全景.....138
10 12号住居跡細部.....119	40 1号住居跡細部.....138
11 13号住居跡全景.....120	41 2号住居跡全景.....139
12 13号住居跡細部.....120	42 2号住居跡細部.....139
13 14号住居跡全景.....121	43 7号住居跡全景.....140
14 14号住居跡細部・遺物出土状況・ 遺物包含層.....121	44 7号住居跡細部.....140
15 8~12号土坑.....122	45 1~7号土坑.....141
16 13~20号土坑.....123	46 2~6号溝跡全景.....142
17 7号溝跡全景.....124	47 2・3号溝跡.....142
18 8号溝跡全景.....124	48 4・6号溝跡.....143
19 調査②区遺構内・遺物包含層出土遺物.....125	49 1号土器埋設遺構.....143
20 調査②区遺物包含層出土遺物(1).....126	50 1・2号住居跡・1号土器埋設遺構 出土遺物.....144
21 調査②区遺物包含層出土遺物(2).....127	51 2号住居跡出土遺物(1).....144
22 調査②区遺物包含層出土遺物(3).....128	52 2号住居跡出土遺物(2).....145
23 調査⑤上区全景.....129	53 調査⑧区遺物包含層出土遺物(1).....145
24 調査⑤上区基本土層.....129	54 調査⑧区遺物包含層出土遺物(2).....146
25 21号土坑全景.....130	55 調査⑧区遺物包含層出土遺物(3).....146
26 12・13号溝跡全景.....130	56 調査⑧区遺物包含層出土遺物(4).....147
27 21号土坑・調査⑤上区遺物包含層出土遺物 131	57 調査⑧区遺物包含層出土遺物(5).....147
28 調査⑦区全景.....132	58 調査⑧区遺物包含層出土遺物(6).....148
29 調査⑦区基本土層.....132	59 調査⑧区遺物包含層出土遺物(7).....148
30 1号溝跡全景.....133	

序 章

第1節 事業の概要と調査経過

阿武隈川上流河川改修事業の概要（図1）

阿武隈川では有史以来幾度となく大規模な洪水被害に見舞われてきた。特に明治43年8月や大正2年8月に発生した洪水では、甚大な被害が発生した記録が残っている。昭和に入ってから度も々大規模な洪水が発生しており、特に近年においては計画高水位を越える程の大規模な洪水が相次いで発生した。戦後最大の出水を記録した昭和61年8月の台風による洪水では、被災家屋20,216戸、浸水面積15,117haという甚大な被害を受けた。それを契機に支川広瀬川等では激甚災害対策特別緊急事業により引堤等の改修が行われたが、阿武隈川中上流部の完成堤防割合は、約3割程度であった。その後の平成10年8月の大雨では、被災家屋2,096戸、浸水面積3,631haに達する被害が生じ、社会および地域経済に大きな損害を与えた。中上流部ではこの洪水に対する改修事業を「平成の大改修」と称し、無堤部の築堤を中心とした治水対策が実施された。しかし、阿武隈渓谷などの狭窄部や集落が分散する地域など、連続堤による治水対策が困難な箇所や、暫定堤防までの整備であった本宮市では、平成14年7月の洪水においても浸水被害が発生した。

阿武隈川の二本松・安達地区は、阿武隈川が阿武隈山地と奥羽山脈の間を流下し、狭窄部「阿武隈峡」を抱えるという地形特性の中、区間に家屋が点在し、これまでの一般的河川改修手法である

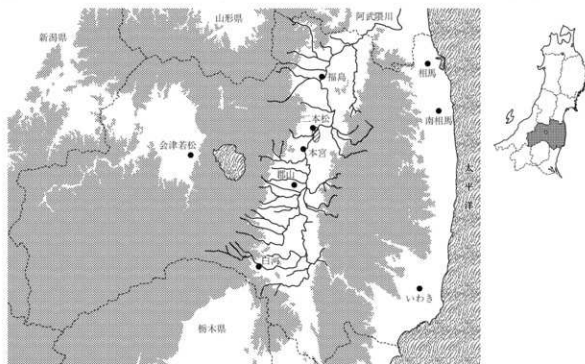


図1 阿武隈川上流河川改修事業位置図



図2 工事計画図

連続堤防では事業費が大きく、効果の発現にも長期間を要することから、これまで長年の間、治水対策手法が懸案になってきた。こうした状況の下、国土交通省では平成13年2月20日に「二本松・安達地区河川整備検討委員会」を設立し、従来の改修方式(連続堤)によらない治水対策(輪中堤や地上げ移転方式等)である「阿武隈川上流二本松・安達地区土地利用一体型水防災事業」を平成14年度より開始し、平成21年度には輪中堤整備による「二本松・安達地区水防災1期事業(油井・榎戸、安達ヶ原地区)」が完了した。

平成21年度より「土地利用一体型水防災事業」を実施するII期区間(高田、トロミ、平石高田、矢ノ戸、浅川、蓬田、上川崎地区)は、平成10年8月洪水、平成14年7月洪水において、度重なる家屋の浸水に加え、国道4号線の一時通行止めや、当該地区の生活道路でもある国道459号(旧主要地方道二本松・浪江線)、主要地方道二本松・金屋線、主要地方道原町・二本松線、二本松市道が冠水し、一時的に孤立する家屋が発生するなど、輪中堤や住家の地上げ移転等の治水対策を実施する上での課題を抱えている。(吉田)

調査に至る経緯(図2)

阿武隈川右岸に位置する二本松市トロミ地区では、総延長1.4kmの輪中堤方式による堤防建設が計画さ

れ、現在、国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所が事業を進めている。

トロミ地区に関わる埋蔵文化財の表面調査は、昭和45年度と平成5年度に二本松市教育委員会によって実施され、奈良時代～平安時代の遺物が採取されるトロミ遺跡として確認・登録されている。今回の築堤工事に伴う試掘調査に先立ち、トロミ遺跡周辺の地形観察と地形改変に関する聞き取り調査を実施したところ、遺跡の周知の範囲よりもさらに南北に広がる可能性が高いことが分かったため、北側と南側の隣接地を、それぞれ遺跡推定地として試掘調査の対象とすることとなった。

トロミ遺跡の試掘調査は平成22年6月から着手し、初年度は堤防工事予定地内の遺跡範囲と北側推定地(NH-B1)について実施した。その結果、奈良・平安時代の土師器・須恵器を中心に遺物が出土し、他にも縄文土器・弥生土器・陶磁器・石器・古代の平瓦等が出土した。また、古代の竪穴住居跡・溝跡・遺物包含層等を確認したが、試掘箇所が用地買収の済んだ畑等に限られたため、遺跡の広がりを把握するのに十分な情報が得られず、工事予定地内の要保存範囲を確定するには至らなかった。

なお、遺跡推定地(NH-B1)とした舟形橋北側の地区では明確な遺構や遺物包含層は確認されず、要保存範囲としては取り扱わないこととなった。

平成23年度には、前年に引き続き工事予定地内の遺跡範囲と、県道二本松・金屋線が横切る南側の遺跡推定地(NH-B2)について試掘調査を実施した。その結果、トロミ遺跡では平安時代の竪穴住居跡等を確認し、未試掘部分も含めて要保存範囲として取り扱うこととなった。また、南側の遺跡推定地(NH-B2)でも土坑が検出され、縄文土器等の遺物の出土も確認されたことから、要保存範囲としてトロミ遺跡に加えることとなった。

2カ年にわたる試掘調査は、用地買収と併行して実施せざるを得ない状況となった。そのため、買収手続きが終了した場所から調査に及ぶこととなり、試掘箇所も限られた。阿武隈川流域という立地条件にも影響され、地表下の状況が試掘地点によって大きく異なることから、地点ごとの堆積土の照合が困難で、遺構・遺物の確認できる文化層が、どれくらいの深さで幾層存在するのか十分に把握するには至らず、発掘調査を実施するにあたって課題として残ることとなった。(吉田)

平成23年度の調査経過(図3、写真1・2)

平成23年度の調査に先立ち、平成23年2月7日に福島県教育委員会・国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所・財団法人福島県文化振興事業団(現、財団法人福島県文化振興財団 以下省略)により調査面積および調査箇所等に関する事前協議が持たれ、その中で、国土交通省側から舟形橋北方の地区と遺跡南部の樋門部の発掘調査を優先してほしい旨の要望が出された。これを受けて、福島県教育委員会および福島県文化振興事業団では事前準備を進めてきたが、3月11日に東日本大震災が発生し、準備作業の中断を余儀なくされた。

大震災後の混乱が収まらない中ではあったが、福島県文化振興事業団では、平成23年4月1日付の福島県教育委員会との委託契約に基づき、遺跡調査部遺跡調査課の職員4名を配してトロミ遺跡の発掘調査に当たることにした。この時の委託契約に基づく調査箇所は舟形橋北方の地区(2,900

工区隣接地にそれらを設置することになった。さらに、国土交通省側で区割した①～⑧の地区に関して、「調査①区」などと呼称することにし、これに先立つ5月23日より調査⑧区の調査を開始し、同区の調査で発生する排土は調査と並行して国土交通省側で工区外へ搬出する予定で進めた。

6月に入ると、工区内の耕作物に関する問題が解決し、工区内にも排土置場を確保することが可能になり、6日には調査⑦区、7日には調査⑤上・⑤下・⑥区、13日には調査②区の調査を開始した。この内、調査②・⑤下・⑥区に関しては、重機による表土除去作業および住宅基礎の撤去作業を先行して行ったものである。なお、6日には近隣の作業員6名を雇用し、調査⑧・⑦・⑤上区の遺構検出を実施した。

7月に入り、調査は調査⑧区に集中することとし、4日からは作業員を約40名増員して調査に当たった。さらに、8月8日にも約20名の作業員の増員を図り、同月23日からは調査②区、29日からは調査⑤下・⑥・⑦区の調査を開始した。また、8月4・5日には福島県文化財センター白河館の「教職員発掘体験研修」が調査⑧区で行われた。

9月に入り、9日にラジコンヘリコプター搭載カメラによって、調査②・⑤下・⑥・⑦・⑧区の空中写真撮影を実施した。調査は順調に推移していたが、調査区を横切る市道や排土運搬路の付け替えの問題、各調査区とも文化層が複数存在することから、調査に多大な時間を要することが懸念された。さらに、21日には台風15号の影響により増水した阿武隈川が氾濫し、調査②区と調査⑥区は水没した。特に、調査⑥区に関しては被害が甚大で、排水および流入した泥の除去に約1週間を費やすこととなった。

10月に入ると、調査⑦・⑧区の調査終了の目途が立ち、28日に調査⑦区(上層400㎡+下層200㎡)と調査⑧区(上層2900㎡+下層1,100㎡)を国土交通省へ引き渡した。

11月に入り、調査②区の調査終了の目途が立ち、25日に同区の調査を終了するとともに、調査⑤上区の調査に移行した。また、同日、ラジコンヘリコプター搭載カメラによって、調査②・⑤下・⑥区の空中写真撮影を実施した。なお、調査⑤下・⑥区に関しては、上層の中世面・古代面の遺構調査の段階であり、両面とも遺構・遺物が充実していることから、当年度は上層の調査を終了させることを目指した。

12月に入り、6日には調査⑤上区の調査を終了し、7日に調査②区(上層1,800㎡+下層1,200㎡)を国土交通省へ引き渡した。中旬には調査⑤下・⑥区の上層(中世面2,500㎡+古代面2,500㎡)の調査が終了し、下層の縄文時代の遺物包含層の調査に着手した。20日、福島県教育委員会・国土交通省・福島県文化振興事業団による調査⑤下・⑥区の上層の調査終了確認、国土交通省への調査⑤上区(500㎡)の引き渡しを行い、今年度の調査を終了した。これにより、当年度の調査面積は合計13,100㎡となり、調査⑤下・⑥区に関しては次年度当初に行う同区の調査が終了した後に引き渡すこととなった。

(能登谷)

第2節 地理的環境

位置 トロミ遺跡は福島県二本松市北トロミ・南トロミ地区に所在する遺跡である。福島県は本州の北東部、東北地方の南端に位置する。面積の約8割を山地が占め、南北に走る阿武隈高地・奥羽山脈・越後山脈に隔てられた「浜通り地方」、「中通り地方」、「会津地方」の3区域に区分される。二本松市は、中通り地方中央部やや北寄りに所在する。二本松市は北を福島市、東を伊達郡川俣町と双葉郡浪江町・葛尾村、南を田村市・本宮市・田村郡三春町・安達郡大玉村、西を郡山市・耶麻郡猪苗代町と接している。

二本松市は安達郡安達町・東和町・岩代町と合併したことで、東西約35km、南北約17kmの東西に長い市域となった。市のほぼ中央を北流する阿武隈川を挟み、西に標高1,700m程の安達太良連峰、東に標高800m程の阿武隈高地を望む立地である。市内は二本松藩の城下町として街道が整備され、それらを礎とした現代交通網が広がる。主要な道路としては国道4号・東北自動車道が南北に縦走り、福島市土湯から浪江町津島に抜ける国道459号が東西を貫いている。鉄道はJR東北本線が国道4号に沿うように敷設されている。市内には南から杉田駅・二本松駅・安達駅の3駅が存在する。

本遺跡が位置する北トロミ・南トロミ地区は、阿武隈川東岸に位置する。遺跡範囲は南トロミから北トロミにかけて、阿武隈川に沿うように南北に延びる。遺跡範囲は東西約2km、南北約6kmの範囲である。本遺跡は二本松駅から南へ約2.5km、国道4号・東北自動車道の位置から西に約2kmを測る。北緯37°34'58"、東経140°26'28"に位置する。本調査区は、トロミ遺跡を南北に貫く範囲である。調査区の現況は、宅地・畑・荒地であった。

気候 二本松市の気候区分は準裏日本型気候区分に属すが、奥羽山脈の東麓であるため降雪量は比較的少ない。山がちな市域であることから気候状況は一様でなく、丘陵地の斜面の向きに応じて、日照・風向き・気温などが異なる。

トロミ遺跡が位置する二本松中心部では、年間平均気温は11.0℃前後を測る。風は冬季から春先にかけて、「安達太良おろし」と言われる東へ向かって吹き下ろす寒風がみられる。

年間降水量は1,100mm程度で、月平均で100mm前後と多くはない。しかし、台風の接近・通過に伴う降雨によって、阿武隈川の洪水被害は散見される。台風の北上による雨量の増加と阿武隈川の北流による流出量の増加が重なることや、さらには蛇行箇所や狭窄部、他河川との合流部での洪水被害が発生しやすい河川である。過去、二本松市を含む安達地方では、幾度も洪水被害を経験している。そのため護岸改修や堤防設置工事が行われている。平成23年度発掘調査時においても、台風により、遺跡内が水没する被害にあっている。

地形 福島県中通り地方は阿武隈川が流域である中通り低地帯を挟んで、西に奥羽山脈、東に阿武隈高地が位置する。二本松市は、西には標高1,000m以上の安達太良山(1,700m)・東吾妻山

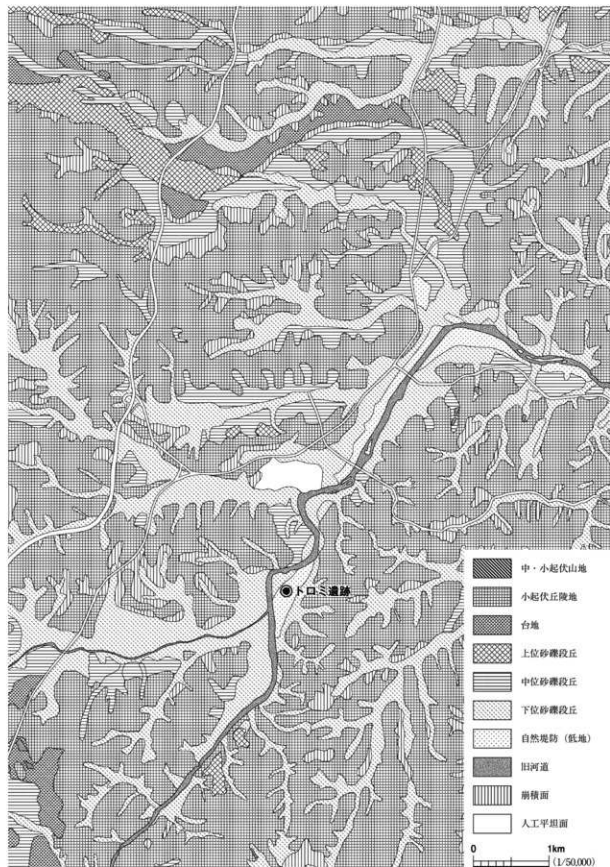


図4 トロミ遺跡周辺の地形分類図

(1,974 m)などが連なる奥羽山脈、東の標高800m級の阿武隈山地、その間を阿武隈川が流れる中央低地の3地帯に分類できる。急峻な地形である奥羽山脈を東流する河川が樹枝状に開析し、阿武隈川流域に扇状地を形成している。阿武隈山地は比較的緩やかな山形で、緩やかな勾配で小河川が阿武隈川と合流する。中央低地の阿武隈川流域は、標高は200～300m程度である。二本松市域は他の中通り地方の市町村よりも、より安達太良連峰が東へ、阿武隈高地が西へ、それぞれ張り出すように丘陵地が迫る。そのため、地区ごとに異なる複雑な地形構成となっている。このような地形から市域には平坦地は少なく、地形の多くは丘陵地で占められる。

阿武隈川は福島県西白河郡西郷村の旭岳(標高1,835m)に源を發し、福島県中通り地方を北流して、宮城県岩沼市・亙理町境で太平洋に注ぐ一級河川である。二本松市域では、主に奥羽山脈から東流する杉田川・油井川や、阿武隈高地から流れる小河川が阿武隈川に合流して、扇状地や谷底平地を形成している。阿武隈川の東岸には、これらの河川の浸食や堆積作用によって、自然堤防の發達が觀察できる。本遺跡は、杉田川が阿武隈川に合流する対岸に形成された自然堤防上に立地している。この自然堤防は南北約8kmにわたって形成され、南トロミ集落や工場が立地している。南トロミ集落は、阿武隈川が氾濫した昭和61(1986)年の「8.5水害」時にも浸水の被害が少なかった地区である。自然堤防東側の後背湿地は、主に田として利用されている。

地質 奥羽山脈は中新世に形成された固結堆積物や火山性堆積物などを基盤として、第四紀の安達太良山起源の火山性堆積物が広く認められる。この火山堆積物を河川が開析し、阿武隈川沿いに扇状地を形成することにより、洪積層や沖積層が發達している。また、急峻な地形や火山性堆積物であることから、山腹斜面などでは崩壊地が多く觀察できる。阿武隈山地は、中新世から鮮新世の時期に形成された花崗岩を母岩とする砂壤土が主体となり分布する。中央低地は、第四紀の砂礫土を主体とした未固結堆積物で構成される。トロミ遺跡は阿武隈川流域の第四紀に形成された、低位段丘上に位置する。(三 浦)

第3節 歴史的環境

二本松市は、二本松藩丹羽氏11代が居城とした二本松城の城下町として發展してきた。現在でも、至るところに城下町としての町並みや文化が色濃く残る。図5を参照に二本松市の遺跡分布を簡約すると、中央部を流れる阿武隈川およびその支流においては、古代～中世の集落跡を中心とした遺跡が多く認められる。安達太良山麓や阿武隈高地には、縄文時代の集落跡や中世の山城が点在する様相が見て取れる。

二本松市の旧石器時代を記載するにあたり、旧石器捏造事件については言及せざるを得ない。捏造に関係した遺跡として、市内には原七笠張遺跡・一斗内松葉山遺跡が存在する。しかし、両遺跡ともに、事件により遺跡登録から除外されている。平成13(2001)年には、一斗内松葉山遺跡において、全国で初めて旧石器捏造事件の検証発掘を当時の安達町教育委員会が主体となり実施した。

地層に埋め込まれたように石器が出土した石器の産状や地層状況から、捏造された石器とされている。二本松市内では、旧石器時代の遺跡は少ない。上竹遺跡(12)では石刃、下田遺跡では尖頭器や石刃が採集されている。油王田遺跡では発掘調査により尖頭器や搔器などが出土している。いずれも後期旧石器時代後半頃と推察される。阿武隈山地や奥羽山脈から延びる丘陵地では、古い地層が認められることから、旧石器時代の遺跡が発見される可能性は高い。

縄文時代の遺跡は安達太良山麓や阿武隈川の河岸に中期以降の大集落が形成され、阿武隈高地内の台地上には小規模な集落が点在する。トロミ遺跡の対岸に位置する八万館遺跡(25)では、古いものでは早期の燃糸文系土器や押型文土器片が出土している。前期前半の遺構・遺物が主となる遺跡である。中期では中期末葉に安達太良山東麓を中心に、複式炉を伴う竪穴住居跡が造られた。この時期の集落は大規模となり、原瀬上原遺跡や塩沢上原遺跡・田地ヶ岡遺跡などが著名である。本遺跡の立地と同様に阿武隈川右岸に立地する遺跡としては、本宮市の山王川原遺跡(155)・高木遺跡(157)・北ノ脇遺跡(156)がある。これらの遺跡は中期末葉～後期前葉の大集落である。また、阿武隈川左岸には、頭部を穿孔した土偶が出土した下川崎の堂平遺跡がある。

二本松市内で弥生時代の遺跡は、山がちな地形によるものであろうか、あまり認められていない。隣接する大玉村には中期後半の下高野遺跡や後期後半の諸田遺跡がある。また、本宮市にも陣場遺跡などがあり、これらの遺跡は安達太良山麓の同扇状地上に位置していることが特筆される。扇状地を利用した稲作などが行われていた可能性が考えられている。

古墳時代の二本松市域は、古墳の確認例が少ない地域である。郡山市・本宮市・大玉村などでは多く分布している。大玉扇状地を見下ろす丘陵上には、4世紀前半の前方後円墳である傾城壇古墳(146)や4世紀後半～6世紀の築造とされる向山古墳群(149)が存在する。市内で発掘調査が行われた古墳としては、塚ノ腰古墳群(63)があげられる。当初、3基以上の群集墳であったが破壊され、わずかに残った1基の発掘調査を行っている。調査により、礎敷きの横穴式石室を有していたことが確認された。また、黒塚古墳(14)は安達ヶ原の鬼婆の伝説の地で、首塚と伝えられている。直径10m程度の円墳であり、本来は群集墳であったものが、唯一残存した古墳と推測される。

律令時代の集落遺跡では、借宿遺跡(54)と矢ノ戸遺跡(13)などにおいて発掘調査が行われた。借宿遺跡は阿武隈川を挟んだトロミ遺跡の対岸の台地上に立地する。8世紀頃の集落跡である。矢ノ戸遺跡は阿武隈川の自然堤防上に立地している。7世紀前半～11世紀にかけての集落跡である。トロミ遺跡や矢ノ戸遺跡と同様に阿武隈川右岸の自然堤防上には、大規模な集落が形成されるようである。同時期の自然堤防上にある遺跡としては、本宮市の百目木・高木・北ノ脇・山王川原遺跡、郡山市の徳定A・B遺跡などがある。当該地域は安積郡に属していたが、延喜6(906)年に安積郡北部の入野・佐戸・安達三郡を割いて、安達郡が分置された。安達太良川の支流杉田川南の河岸段丘上に位置する郡山台遺跡(58)が、安達郡衙の推定地とされている。掘立柱建物跡や竪穴住居跡などが多数検出され、規格的に配置された様相が明らかとなった。出土遺物は瓦・土師器・須恵器・硯とともに、焼米が多量に出土している。このことから、掘立柱建物は穀物を貯蔵していた正倉で

あったと考えられている。また、隣接する郡山台廃寺からは、単弁の軒丸瓦が出土している。この寺は奈良時代には私寺で、平安時代には官寺にされたと推測されている。本遺跡においても、石帯や円面視など郡山台遺跡との関連性をうかがえるような遺物が出土し、集落が形成されていたことが明らかとなった。本遺跡から東900mには赤井沢窯跡(45)が位置する。1基のみ調査が行われ、9世紀の須恵器や瓦が多量に出土した。半地下式の瓦陶兼用の登り窯である。

安達郡は、仁平元(1151)年に惟宗定兼の上申により、安達郡から安達保に替えられた。安達保は、鎌の便補地として認可を受けた。その後、安達保は小槻家へ、さらに建保6(1218)年には壬生(小槻)国宗の申請により安達荘へと変遷している。この安達荘は壬生家別相伝地として建武年間まで継続した。また、安達保は奥州合戦以後に源朝頼より、安達盛長が地頭職に任じられ、本貫の地としたとされる。さらに嫡子景盛へと相続されている。弘安8(1285)年の霜月騒動と呼ばれる内乱により、景盛の孫泰盛一族は滅亡している。以後鎌倉幕府滅亡時まで安達氏一門の城高景が安堵していたと考えられる。本遺跡で検出した大規模な建物群や井戸跡などは、この時期に該当する遺構である。

建武親政以後は、北畠顕家が陸奥守に任じられた。南北朝期には、足利尊氏は南朝を征伐するため、康永4(1345)年に吉良氏と畠山氏が奥州管領として任じている。観応の擾乱では畠山氏は尊氏・師直派、吉良氏は直義派となった。畠山高国・国氏が奥州管領として下向した際に田地ヶ岡館跡を築いた。観応2(1351)年、吉良貞家は畠山国氏の岩切城を攻め、国氏・高国・直泰を滅ぼした。国氏の嫡子である国詮は二本松に移ったが、奥州管領と称した。国詮の嫡子満泰は白旗ヶ峰を中心とした天然の要害地に居館を築造し、この霧ヶ城を本拠とした。現在の二本松城跡(4)である。安達郡の畠山氏の支配は11代に及び、15世紀からは地名をとって二本松氏を名乗った。二本松氏は二本松市を中心に阿武隈川西岸から安積郡北部一帯を治めた。阿武隈川東部は三春田村氏・結城白川氏・吉良氏・宇都宮氏・石橋氏・大内氏などが支配していたようである。

戦国時代に入ると、伊達氏や葦名氏などにより、幾度となく二本松領は攻撃を受けることになる。天正13(1585)年に伊達氏と畠山氏・佐竹氏・葦名氏などが争った人取橋の戦いがある。翌年畠山義継の子国丸の代に伊達政宗によって攻め滅ぼされた。南北朝から戦国時代にかけてこの地域は、多くの山城が築かれ戦乱の舞台となった。館主が推定されている館跡として、石川佐渡守の石川館跡(21)、大塚備中の羽石館跡(24)、平石甲斐守武頼の高田館跡、小国又四郎の駄子内館跡(35)などがある。本遺跡のすぐ東の丘陵上にも泥海館とも呼ばれる浜井場館跡(43)、さらに高蒲谷館跡(46)が位置する。

天正18(1590)年、豊臣秀吉の奥州仕置により、二本松を含む安達郡は蒲生氏郷が領した。二本松城城主には、蒲生郷成が配置された。トロミ地区は文禄3(1594)年の蒲生領高目録では、平石村領に属している。慶長3(1598)年には上杉景勝が入部、関ヶ原の戦い以後は、蒲生秀行が領することとなる。その間、蒲生氏郷以来会津若松城の支城として支配した。寛永4(1627)年、会津藩に加藤嘉明が40万石で入部すると、嘉明の娘婿である松下重綱が5万石で入部したことで、二本松藩が成立した。重綱・長綱の後、嘉明の三男明利が3万石の所領を与えられた。明利は二本松城の改修

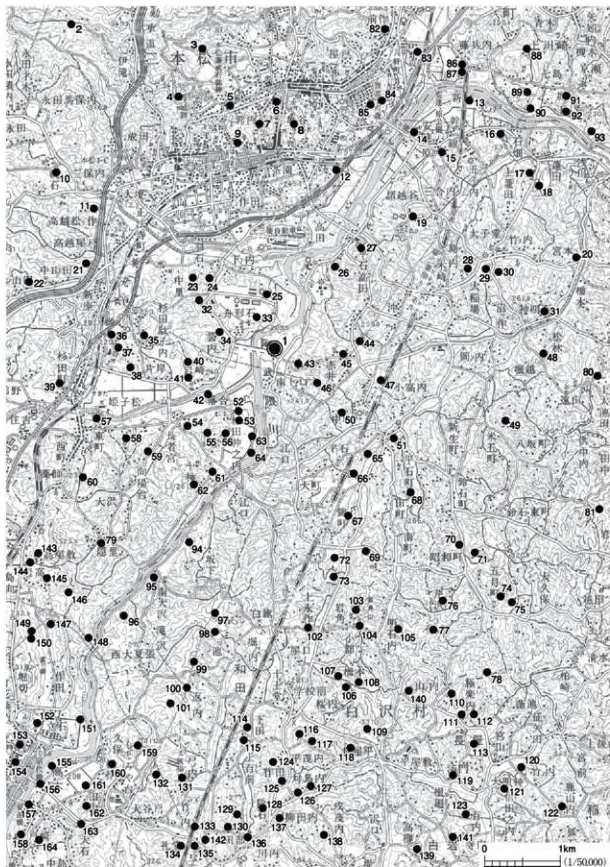


図5 トロミ遺跡周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡一覧(1)

No.	遺跡名	概要	No.	遺跡名	概要
1	トロミ遺跡	縄文・古代～中世の集落跡	51	庚申山遺跡	縄文時代の散布地
2	長者久保遺跡	縄文時代の散布地	52	落合古墳	古墳
3	心安館跡	中世の城館跡	53	落合の万葉歌碑	近世の石造物
4	二本松城跡	中世・近世の城館跡	54	信宿遺跡	古代の集落跡
5	代官丁遺跡	縄文時代の散布地	55	落合塚群	中世・近世の塚
6	竹田・根崎用水路跡	近世の用水路	56	落合小屋館跡	中世の城館跡
7	浮野河外苑三尊坐遊供貴塔婆	中世の石造物	57	飯小松供養碑	中世の石造物
8	亀谷観音堂の芭蕉句碑	近世の石造物	58	郡山台遺跡	古墳～古代の集落跡
9	坂下門跡	近世の城館跡	59	佐手内遺跡	縄文時代の散布地
10	水田館跡	中世の城館跡	60	大沢遺跡	縄文時代の散布地
11	松ヶ横遺跡	中世の城館跡	61	菅田遺跡	古代の散布地
12	上竹遺跡	古代の散布地	62	菅田館跡	中世の城館跡
13	矢ノ戸遺跡	古墳～古代の集落跡	63	塚ノ麓古墳群	古墳
14	黒塚	古墳	64	前田遺跡	古代の散布地
15	上平館跡	中世の城館跡	65	戸ノ内館跡	中世の城館跡
16	石畑遺跡	縄文時代の散布地	66	針間内館跡	中世の城館跡
17	蓬田遺跡	平安時代の墳墓	67	立石遺跡	縄文時代の散布地
18	蓬田館跡	中世の城館跡	68	治部田内館跡	中世の城館跡
19	講越谷館跡	中世の城館跡	69	宗明内館跡	中世の城館跡
20	坂本館跡	中世の城館跡	70	竹ノ内館跡	中世の城館跡
21	石川館跡	中世の城館跡	71	岩ノ作館跡	中世の城館跡
22	高島館跡	中世の城館跡	72	西新井館跡	中世の城館跡
23	中ノ内塚群	中世・近世の塚	73	寺向塚群	中世・近世の塚
24	羽石館跡	中世の城館跡	74	鈴石古館跡	中世の城館跡
25	八万館遺跡	縄文時代の散布地、古代の集落跡	75	大久保館跡	中世の城館跡
26	高田館跡	縄文時代の散布地	76	芦ノ沢館跡	中世の城館跡
27	佐官館跡	中世の城館跡	77	長峰館跡	中世の城館跡
28	島ノ内館跡	中世の城館跡	78	滝小屋館跡	中世の城館跡
29	太子堂遺跡	縄文時代の散布地	79	隠里遺跡	縄文時代の散布地
30	十部館跡	中世の城館跡	80	上太池田壇	塚
31	大平古館跡	中世の城館跡	81	三本松塚	塚
32	唐谷山遺跡	古代の散布地	82	前作館跡	中世の城館跡
33	岡塚群	中世・近世の塚	83	野辺遺跡	縄文～古代の散布地
34	中森山遺跡	古代の散布地	84	天皇館跡遺跡	散布地
35	駄子内館跡	中世の城館跡	85	天皇館跡	中世の城館跡
36	大平古墳	古墳	86	藤兵内遺跡	古墳～古代の散布地
37	駄子内塚群	中世・近世の塚	87	藤兵内古墳	古墳
38	古館跡	中世の城館跡	88	赤坂館跡	中世の城館跡
39	杉田館跡	中世の城館跡	89	八坂山古墳	古墳
40	坊ヶ脇古墳	古墳	90	戸ノ内遺跡	縄文・古代の散布地
41	坊ヶ脇遺跡	縄文時代の散布地	91	七島古墳群	古墳
42	岩崎遺跡	古代の散布地	92	坂ノ下A遺跡	縄文時代の散布地
43	浜井場館跡	中世の城館跡	93	坂ノ下B遺跡	散布地
44	吉祥院遺跡	古代の散布地	94	北大沢七ツ壇塚群	中世～近世の塚
45	赤井沢館跡	古代の集落跡	95	南大沢遺跡	散布地
46	萬葉谷館跡	中世の城館跡	96	古館跡	中世～近世の城館跡
47	広谷原遺跡	縄文・古代の散布地	97	白旗山古墳群	古墳
48	松林遺跡	縄文時代の散布地	98	愛宕壇古墳	古墳
49	五間日田館跡	中世の城館跡	99	最明内古墳	古墳
50	太夫内館跡	中世の城館跡	100	二ツ池古墳群	古墳

表2 周辺の遺跡一覧(2)

No.	遺跡名	概要	No.	遺跡名	概要
101	和田十三仏古墳群	古墳	133	竹ノ内古墳	古墳
102	一本松古墳群	古墳	134	礼堂館跡	中世の城館跡
103	岩角山磨崖仏	近世の石造物	135	御前塚遺跡	近世の塚
104	岩角館跡	中世の城館跡	136	小田部古墳	古墳
105	東明石内塚群	中世～近世の塚	137	船々岡供養塔	中世の石造物
106	橋本遺跡	縄文・古代の散布地	138	牛ヶ平古墳群	古墳
107	三ツ塚古墳群	古墳	139	花館古墳	古墳
108	ザーメキ遺跡	縄文・古代の散布地	140	山ノ内古墳	古墳
109	桜内古墳	古墳	141	和尚塚古墳	古墳
110	念仏塚古墳	古墳	142	腰巻山遺跡	縄文・古代の散布地
111	榎葉内五輪塔	中世の石造物	143	羽山神社供養塔	中世の石造物
112	源訪館跡	中世の城館跡	144	菊池館跡	中世の城館跡
113	駒の腰遺跡	古墳～古代の散布地	145	堂ヶ久保古墳群	古墳
114	堀ノ内古墳群	古墳	146	傾城塚古墳	古墳
115	下田古墳	古墳	147	前山小作田山遺跡	縄文～発生時代の散布地
116	桜本遺跡	縄文時代散布地	148	大川磯遺跡	縄文～古代の散布地
117	ドウセイ塚古墳	古墳	149	向山古墳群	古墳
118	平茂内古墳	古墳	150	巖治内館跡	中世の城館跡
119	中曾根遺跡	縄文・古代の散布地	151	大榎遺跡	古代の散布地
120	竹ノ内館跡	中世の城館跡	152	石雲寺供養塔	中世の石造物
121	信田ノ内遺跡	中世の城館跡	153	香森館跡	中世の城館跡
122	稲沢花遺跡	中世の城館跡	154	愛宕館跡	中世の城館跡
123	堂平遺跡	縄文・古代の散布地	155	山王川原遺跡	古代の集落跡
124	一本松古墳	古墳	156	北ノ脇遺跡	縄文・古代の集落跡
125	暮々内遺跡	古墳	157	高木遺跡	縄文・古代の集落跡
126	好馬内遺跡	縄文時代散布地	158	渡場遺跡	縄文～近世の散布地
127	船々岡館跡	中世の城館跡	159	問答山古墳群	古墳
128	除石古墳群	古墳	160	根岸古墳群	古墳
129	境ノ内五輪塔	中世の石造物	161	長畑古墳群	古墳
130	小田部古墳	古墳	162	高木田中館跡	中世の城館跡
131	文蔵塚	中世～近世の塚	163	土人塚遺跡	中世～近世の塚
132	問答塚群	中世～近世の塚	164	太学館跡	中世の城館跡

を行い、この城跡の改修後の城郭を描いたのが「正保二本松城絵図」と言われる。

寛永20(1643)年に丹羽光重が、10万700石で二本松藩主として入部している。以降、幕末までの224年間、丹羽氏11代が統治する。光重は二本松城郭の整備と城下町の普請を行っている。二本松城は馬蹄形城郭と言われ、外郭防衛線まで含めると東西2km、南北1.5kmにも及ぶ規模を持つ。城下は、東西に走る観音丘陵を境として丘陵北側に丹羽家臣の武家屋敷を配置し、現在郭内と呼ばれる地名である。丘陵南側は、丹羽氏以前の町屋や寺社を配置して、城郭を内外に分離した。また地割りに伴い、奥州街道を観音丘陵南側の城郭外に付け替えている。藩財政は江戸時代を通して困窮し、藩政改革を実施するも衰退していく一方であった。さらに、文政7(1824)年には「岳山崩」と言われる安達太良山麓の土砂崩れがあり、岳温泉が全滅した記録が残る。

慶応4(1868)年、二本松藩は戊辰戦争で会津藩を中心とする奥羽越前藩同盟に加わった。戊辰戦争では新政府軍の攻撃により、白河口の戦いから敗走を続けた。7月には新政府軍に対応すべく老

年の予備兵に加えて、少年兵による少年隊も戦争に加わった。しかし、新政府軍によるわずか一日の攻撃で、二本松城は落城している。現在においても、二本松少年隊の悲劇として語られている。

二本松藩は明治4(1871)年に廃藩置県により、二本松県となった。明治22(1889)年の町村制実施により、安達郡二本松町・塩沢村・岳下村・杉田村・石井村・大平村が成立し、さらに昭和30(1955)年にこれらの村が合併して二本松町となった。昭和33(1958)年、市制を施行して二本松市となる。さらに平成17(2005)年の平成の大合併時には、二本松市は隣接する安達町・東和町・岩代町と合併し、現在の市域となる。

近年は、箕輪門の附櫓や漆喰壁が復元され、さらには二本松城址の史跡整備に向けた調査も行われている。(三浦)

第4節 調査方法

トロミ遺跡の発掘調査を実施するに当たり、工事側の工区を示す幅杭を基に調査区を設定し、国土座標を基に遺跡全体をカバーする10mごとの方眼(グリッド)を設定した(図6)。今回の調査で用いた測量座標は、世界測地系に基づく国土座標第Ⅸ系の座標で、グリッド原点の座標値は調査区の北西側に位置する $X=174,300$ 、 $Y=53,500$ である。各グリッドには東西方向にA・B……Zというようにアルファベットの大きい文字を付し、南北方向に1・2……60というように算用数字を付して、X5グリッド、K49グリッドなどと呼称し、個別の番号を与えた。このグリッド番号は、遺構の大きな位置表示を行ったり、遺構外遺物の出土位置を表示するのに使用した。さらに、遺構平面図を作成するための水糸ラインを1m方眼で規定した。水糸ラインの方向はグリッドの分割線の方向と一致しており、1m単位の国土座標で表記した。なお、測量基準点の打設および簡易水単点の移動は測量会社に委託した。

発掘作業に際し、重機を使用して調査区の表土を除去し、その後、人力により遺構の検出作業および遺物包含層の掘り下げを行ったが、各調査区の東辺および西辺は民有地と接し、調査⑦・⑧区ではそれぞれの北端ないしは南端が舟形橋の擁壁と接していることから、表土除去に当たって、民有地境および舟形橋の擁壁から約1m幅の安全帯を設けて掘り下げ、調査が進行するに従い、掘削深度に合わせてさらに内側に約1m幅の安全帯を設けて掘り下げた。なお、土量が多く、遺物を確認できない堆積土については、調査員が立会いの下、重機で慎重に掘削した。

遺構の掘り込みは、堅穴住居跡は土層観察用畦を残した4分割法、土坑は2分割法を基本とし、溝跡は土層観察用畦を適宜残した。遺物の採り上げは、遺構内のものは区画ごと、遺構外の場合はグリッド単位で採り上げ、遺構外の土層番号は基本土層をLとローマ数字を組み合わせてLⅠ・LⅡ……と表し、遺構内の土層はℓと算用数字の組み合わせでℓ1・ℓ2……と表記した。なお、さらに分層される堆積土については、小文字のアルファベットを付加した。

調査の記録は、実測図作成および写真撮影により行った。遺構図は、基本的に1/20縮尺で平面

図と土層断面図を作成し、遺構の細部や遺物出土状況などは1/10縮尺、溝跡など図化範囲が広範囲にわたるものは1/40縮尺、調査区地形測量図は1/200縮尺で作成した。遺構写真は、検出状況、土層堆積状況、遺物出土状況、完掘状況などについて、同一被写体を35mm判のモノクロームフィルムとカラーリバーサルフィルムおよびデジタルカメラで随時撮影し、遺跡全景や調査区全景などは、ラジコンヘリコプター搭載カメラによって空中撮影を実施した。また、報告書掲載遺物写真はデジタルカメラによって撮影した。

調査において出土した遺物や実測図などの記録類は、福島県文化振興事業団の定める基準に従って整理を行った。報告書刊行後には福島県教育委員会へ移管し、福島県文化財センター白河館に収蔵される予定である。

(能登谷)



図6 グリッド配置図

第1章 調査②区の調査成果

第1節 調査経過と概要

本節では、調査②区の調査経過と概要について述べる。本調査区の調査は、調査区内の竹林・雑木林の立木が未伐採だった。このため、木々の伐採終了後の6月中旬から宅地基礎の撤去および表土剥ぎを開始した。調査区内の表土剥ぎについては、7月上旬に終了しているが、8月中旬までは優先工事区の調査⑧区の調査を先行させた。

なお、当地区は近現代に2度大火に見舞われており、火災の後片付けのための廃棄坑や宅地造成などにより、LⅢ a 上面ないし下位層まで削平が及ぶ場所が多い。調査にあたっては、掘削深度に合わせ安全帯を設け掘り下げている。また、調査区内の北側には現在も使用されている下水管が埋設されていたため、破損しないように周囲に安全帯を設け調査を行った。

8月下旬に本調査区の調査を再開し、主に調査区南側でLⅢ a 上面での遺構検出を行った。9月上旬には、調査区南側で奈良～平安時代の住居跡と土坑を検出した。同月9日にはLⅢ a 上面でラジコンヘリによる空中写真撮影を行っている。9月中旬には奈良～平安時代の遺構の精査を行った。

なお、調査⑦・⑧区で縄文時代の遺構・遺物が確認されていることから、本調査区でも縄文時代の遺構が確認される可能性が高いため、地形測量を含め古代の遺構の調査が終了したグリッドについては、9月下旬から重機と人力によりLⅢ a の除去を開始した。また、9月20日の台風15号による阿武隈川の増水により各調査区が水没し、各調査区とも数日間排水などの復旧作業を要した。

10月上旬には調査区中央～北側でLⅢ a 上面での遺構検出、南側でLⅢ b 上面での遺構検出とLⅣ a までの掘り込み、同層上面での遺構検出を行っている。同月中旬には、南側でLⅣ b までの掘り込みと同層上面での遺構検出を行った。調査区中央～北側LⅢ a 上面で奈良～平安時代の溝跡・土坑を検出・精査した。

調査区東側の突端部については、範囲が狭く民地と接する調査区壁が非常に崩落しやすい状況にあることから、LⅢ a 下位層については、トレンチによる断面観察と作図にとどめている。

10月下旬～11月上旬には、調査区南側のLⅣ b から縄文時代前期後葉～末葉の遺物が多数出土、下位層LⅤ 上面で同時代の住居跡と土坑を検出している。11月中旬には、LⅤ 上面での縄文時代の遺構の精査が終了したため、下位層の掘り込みを人力と重機で行った。11月下旬に基盤層LⅦ 上面から、縄文時代の落し穴状土坑4基を検出し精査した。

本調査区の調査は、地形測量などを含め11月25日に終了した。また、同日ラジコンヘリによる空中写真撮影を行っている。

次に概要について述べる。調査②区は築堤工事区のはほぼ中央に位置し、南側に調査①区、北側に調査③区が接している。本調査区は樋門部分に当たるため、東側の一部が張り出し、調査区の平面

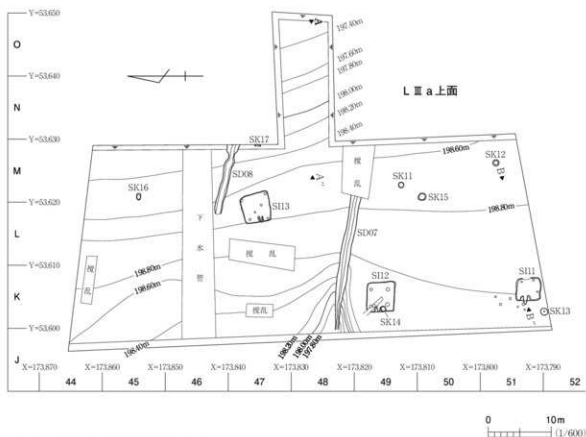


図7 調査②区遺構配置図(1)

形は、凸状を呈している。調査区の現況は竹林・雑木林、耕作地、宅地などである。調査区西側約20mには、阿武隈川が位置している。地形的には、トロミ地区の阿武隈川右岸沿いに形成された自然堤防微高地の南端部に当たる。現況の標高は、199.50～199.80mを測る。

本調査区の調査については、調査過程で古代・縄文時代の複数の文化層が確認されたため、上層と下層2段階に分けて調査している。調査面積は3,000㎡。この内、上層が1,800㎡、下層が1,200㎡。確認された遺構は、竪穴住居跡4軒、土坑13基、溝跡2条などである。遺構の所属時期については、出土遺物や検出層位などから、竪穴住居跡が縄文時代1軒、奈良時代3軒、土坑では縄文時代6基、奈良～平安時代6基、近世1基である。溝跡2条は奈良～平安時代の所産と考えている。

遺構の分布状況については、図7・8に示したように検出層位で微地形が異なるものの、調査区中央～南側に遺構が集中する。検出層位ごとに詳しく概観すると、L III a 上面では主に奈良～平安時代の遺構が検出され、東西幅15～30mの微高地に営まれている。調査区中央から西側にかけては阿武隈川に開析する小規模な沢が形成され、沢目に沿って溝跡1条が配されている。また、南側は後背湿地に続く緩やかな傾斜地となる。L III a 上面での標高は、197.40～198.80m。

なお、L IV a 上面で旧流路が確認された。旧流路については、人力で掘削を行ったが直ぐに湧水し、堆積する砂礫土が掘削直後に崩落したため、人力による掘削を断念し、重機で掘り下げを行った。旧流路の深さは1.6m。掘削直後に底面から激しく湧水し、旧流路の壁と堆積する砂礫土が一

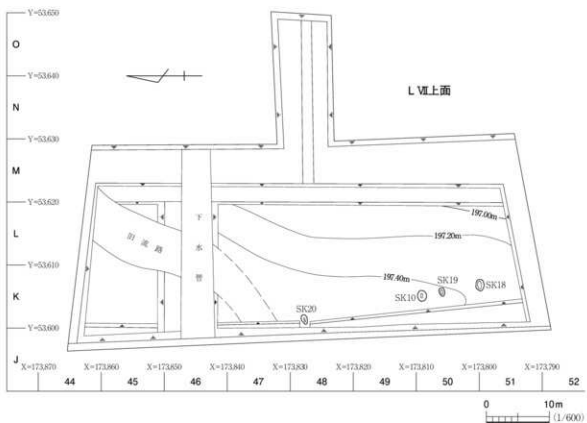
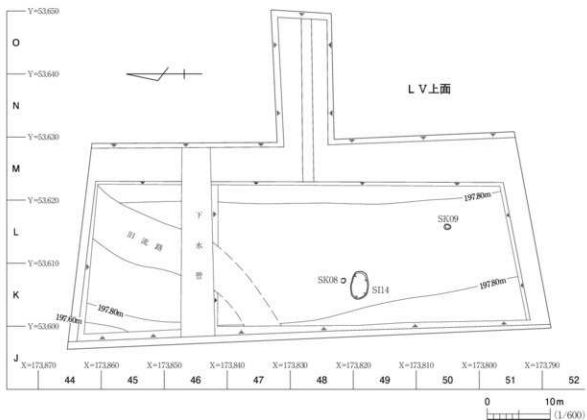


図8 調査②区遺構配置図(2)

気に崩落したため、旧流路の範囲確認と写真、土層については記録写真にとどめた。また、掘削した砂礫土からは土器は出土しなかった。

縄文時代の遺構は、L VおよびL VII上面で確認された。L V上面では縄文時代前期後葉～末葉の遺構を検出。遺構は、東西幅15m程の微高地平坦部に営まれている。標高は、197.60～197.80m。L VII上面では、縄文時代前期後葉以前の落し穴状土坑が、南北に直線状に並んで4基営まれている。

なお、L III a・V上面では、自然堤防微高地が調査区のほぼ中央に形成されていたが、L VII上面では調査区西側の阿武隈川寄りに形成され、自然堤防形成の変化がうかがえる。L VII上面の調査区内の標高は、197.00～197.40m。

本調査区で検出した各時代の遺構の分布や性格の詳細については、隣接する各調査区においても同時代の遺構が確認される可能性が高いため、今回は概観程度にとどめた。

遺物は、縄文土器片約3,900点、土師器片約480点、須恵器片約50点、陶磁器片約10点、石器類約200点、鉄製品・古銭等10点が出土した。これらの遺物の大半は、調査区中央～南側で検出された遺構内や遺構周辺部からの出土で、他の部分での出土状況は希薄である。出土遺物については、縄文時代前期後葉～末葉の遺物が主体を占める。

遺物包含層と層位の関係については、次節「基本土層」で述べる。

(大河原)

第2節 基本土層

トロミ遺跡は、阿武隈右岸沿いに形成された自然堤防上に営まれているが、地形的要因などにより各調査区内での土層堆積状況が異なっていた。このため、各調査区の基本土層については、隣接する調査区で対応できる層位以外は、個別に設定し調査・報告している。なお、各区の基本土層の対応については、調査①～⑧区の調査終了後に遺物の包含状況や遺構の検出状況などから総括する予定である。

堆積状況については、第1節で報告したように、火災の後片付けによる廃棄坑やその後の宅地造成などにより、掘削がL III a上面ないし下位層まで及ぶ場所が多い。なお、調査区東側の凸部については、範囲が狭くL III a下位層で湧水し、民地と接する調査区壁が非常に崩落しやすい状況にあり、L III a下位層については、安全帯を設けて掘り下げることが困難であった。このため、L III a下位層は、トレンチによる断面観察と作図にとどめた。

本調査区の基本土層については、各層ごとの特徴や遺構の検出状況、包含される遺物などから、以下の13層に大別した。

L Iは黒色土で、調査区全体に分布する表土等である。層厚は50～80cm。L I a～dは、調査区東側のN・O 47・48グリッドで確認できた層である。土層観察の結果、N 47・48、O 47・48グリッド周辺が各時代の自然堤防微高地から後背湿地へ続く緩やかな傾斜地であった。この内、L I a・bについては、西側の自然堤防にあたるJ～Mグリッドでは確認されなかった。このため、これら

の層は、後背湿地部の地形的に限られた範囲に堆積するものと考えられる。

L I c・dは、西側に向かい層が薄くなる。調査区中央では、擾乱などで削平されてしまい確認できず、本来調査区全体に分布していたのかについては不明である。L I a～d各層は、砂利などを含む黄褐色系の砂質土が多い。層厚は、各層10～50cm。本調査では、L I a～dから遺構・遺物は確認されなかった。

L IIは黒褐色砂質土で本来は調査区全体に堆積していた層である。宅地造成などで削平されている部分が多い。層厚は10～40cmを測り、調査区東側の突端部で残りが良い。奈良～平安時代、縄文時代晩期の遺物を包含するが、遺物の出土量は極めて少ない。なお、奈良～平安時代の遺物は、本層とL Iとの層境の出土である。また、本層上面からは、平安時代の所産と考えられる溝跡1条を検出している。

L III aはにぶい黄色褐色砂質土で調査区全域に堆積する。本層が主に奈良～平安時代の遺構の検出面である。層厚は20～60cm。本層から遺物は出土していない。L III bは、ほぼ調査区全域に堆積する層である。色調は、少礫を多量に含む灰黄褐色砂礫土である。層厚は10～60cm、調査区東側で比較的厚く堆積する。なお、調査区東側N・Oグリッド周辺部の後背湿地に至る緩斜面地では、本層および下位層から湧水する。本層から遺物は出土していない。

L IV aは灰黄褐色粘質土で、調査区の全域に堆積する。層厚は10～30cm。縄文時代中期末葉～後期前葉の遺物を極少量含む。本層から遺構は確認されていない。L IV bは、暗褐色砂質土で、調査区のほぼ全体に堆積するが、調査区東側N・Oグリッド周辺部の後背湿地に至る緩斜面地には認められない。本層からは縄文時代前期後葉～末葉の遺物が数多く出土している。遺物は、下位層L Vとの層境から比較的まとまった出土状況にあるが、特に層の上下で時期的な差は認められず、各時期の遺物が入り混じった状態である。層厚は20～40cm。

L Vは褐色砂質土で、層厚は20～30cm。調査区内の平面分布は、ほぼ上層L IV bと同様の堆積状況を示す。縄文時代前期後葉～末葉の遺構検出面である。なお、本層から遺物は出土していない。本調査区において、本層以降の層からは、遺物は確認されていない。

L VIは黒褐色粘質土で、調査区全体に堆積する。層厚は40～60cmを測る。本層からは、遺構・遺物は確認されていない。

L VIIは、にぶい黄褐色砂質土で調査区全体に堆積する基盤層である。本層上面で縄文時代前期後葉以前の落し穴状土坑が確認されている。

以上のように、本調査区では13層が確認された。層の中には、黄褐色系の砂質土や多量の砂利や川原石を含む層も認められ、これらの層は阿武隈川の氾濫に起因した堆積層と考えられる。遺物は、L IV bに縄文時代前期後葉～末葉の遺物が比較的まとまって含まれていた。これらの遺物は、各時期で出土の分布状況に相違は認められない。また、遺物の大半は、遺構が確認された調査区南側からの出土である。なお、本調査区からは、L IV b下位層から遺物は確認されなかったが、隣接する調査①・③区において、遺構や遺物が確認される可能性がある。(大河原)

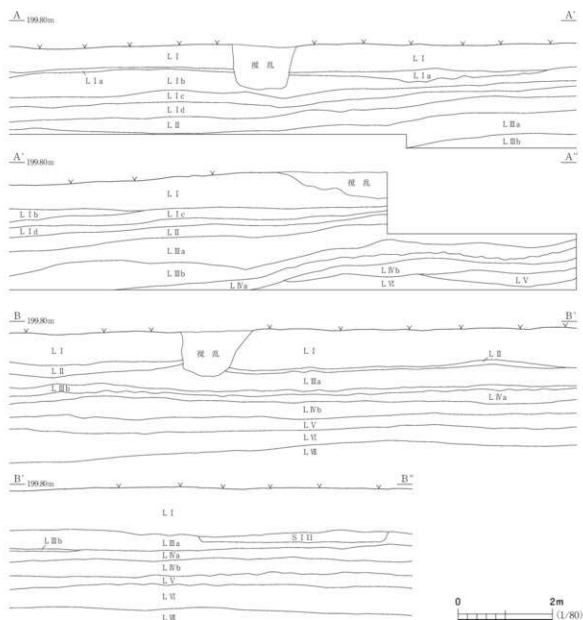
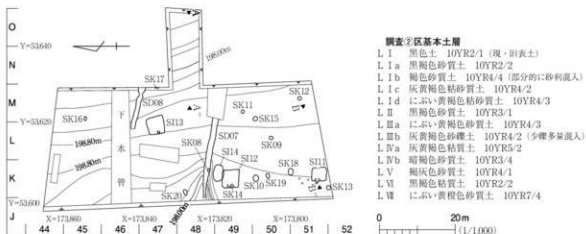


図9 調査②区基本土層

第3節 竪穴住居跡

調査②区からは竪穴住居跡が4軒確認された。時期別では、奈良～平安時代の住居跡3軒、縄文時代の住居跡1軒。住居跡の検出面は、奈良・平安時代の住居跡がLⅢ a上面、縄文時代の住居跡はL V上面で検出されている。以下、これらの住居跡について遺構番号順に個別に報告していく。

11号住居跡 S I 11

遺 構 (図10・11, 写真7・8)

調査区南西部, K51グリッドに位置する。地形的には自然堤防上の微高地に立地する。L I除去後, LⅢ a上面で黒褐色土の方形の広がりとして検出した。他の遺構との重複関係では, K51グリッドP 1と重複し, 本住居跡が古い。また, 東側の壁の中央は攪乱を受けている。

遺構内堆積土は2層に分層でき, いずれも壁際からの流入状態を示すことから自然堆積と判断した。平面形は方形を呈し, 規模は南北3.9m, 東西3.6m。壁は北側の壁で比較的緩やかに立ち上がっているが, その他の壁は急な角度で立ち上がっている。壁高は10～20cmを測る。床は中央部を除き, 黄褐色粘土を混入した暗褐色砂質土で貼床が施されている。また, 全体的に軽い踏み締めりが確認できた。

住居内施設として, カマドとピット3基を検出した。カマドは西壁のほぼ中央に位置する。袖は住居内に70～80cm程張り出し, 黄褐色粘土を含んだ暗褐色土で構築されている。両袖の最大幅は1.6mを測る。燃焼部の規模は焚口幅60cm, 奥行き85cm。底面は掘形の上面を皿状に掘り窪めて構築されている。また, 底面は1～2cm程焼土化していた。煙道部は, カマド奥壁から住居外に50cm程張り出している。煙道部の幅は30～40cm, 底面から検出面までの高さは5～10cmを測る。なお, 煙道の延長状でピットを検出した。ピットは直径25cm程の円形を呈し, 深さ10cm。このピットについては, 位置や規模などから本住居跡カマドに伴う煙出しと判断した。

カマド内堆積土は4層に区分した。ℓ 1は住居内堆積土ℓ 2に相当する。ℓ 2・4はカマド天井崩落土に起因する層, ℓ 3は煙道部からの流入土である。

ピットは南壁の中央西側と東壁の南北隅の床面で検出した。平面形は, いずれも径20～30cm程の円形を呈している。深さは, P 1・2が概ね25cm, P 3は15cmを測る。これらのピットについては, 配置や規模などから, 支柱穴と判断した。

遺 物 (図11, 写真19)

出土遺物は土器器杯片6点, 縄文土器片1点と極めて少なく, ほとんどが細片である。図11-1は非口ロ成形の土器器杯である。器形は, 口縁部が外反し, 体部中央に緩やかな段を持つ。底部は, やや丸みを帯びた平底となる。外面口縁部周縁にはヘラナデ, 体部中央から底部にかけて手持ちヘラケズリが施されている。また, 内面にはミガキおよび黒色処理が施される。

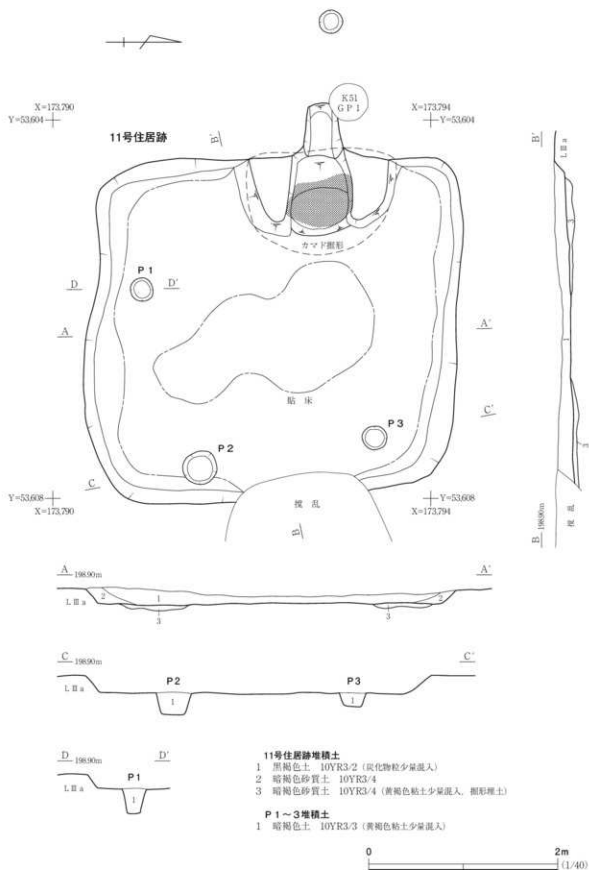


図10 11号住居跡

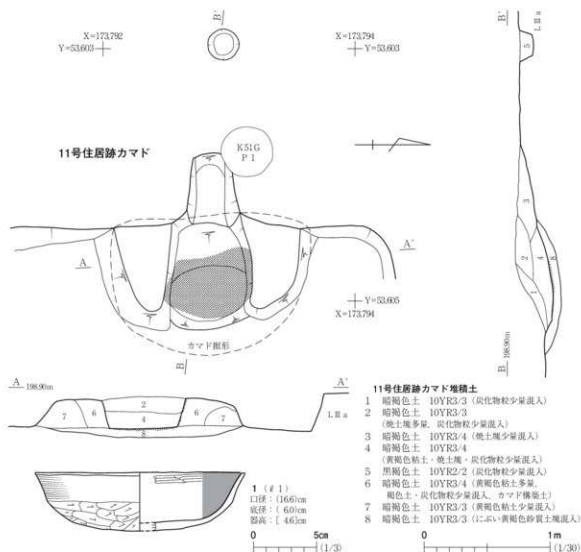


図11 11号住居跡カマド・出土遺物

まとめ

本住居跡は、南北3.9m、東西3.6m程の方形を呈する。住居内施設として、カマドと柱穴と考えられるピット3基を検出した。本住居跡の所属時期については、遺物の特徴などから8世紀後半頃と考えている。

(大河原)

12号住居跡 S I 12

遺構 (図12・13, 写真9・10)

調査区中央西部、K49グリッドに位置する。地形的には自然堤防の微高地上に立地する。遺構検出面はLⅢa上面である。14号土坑と重複関係にあり、本遺構が古い。なお、床面中央から西壁北隅にかけて攪乱を受けている。

遺構内堆積土は2層に分層した。いずれも壁際からの流入状態を示すことから自然堆積と判断した。平面形は方形状を呈している。規模は南北が遺存長で4.4m、東西4.7m。壁は比較急な角度

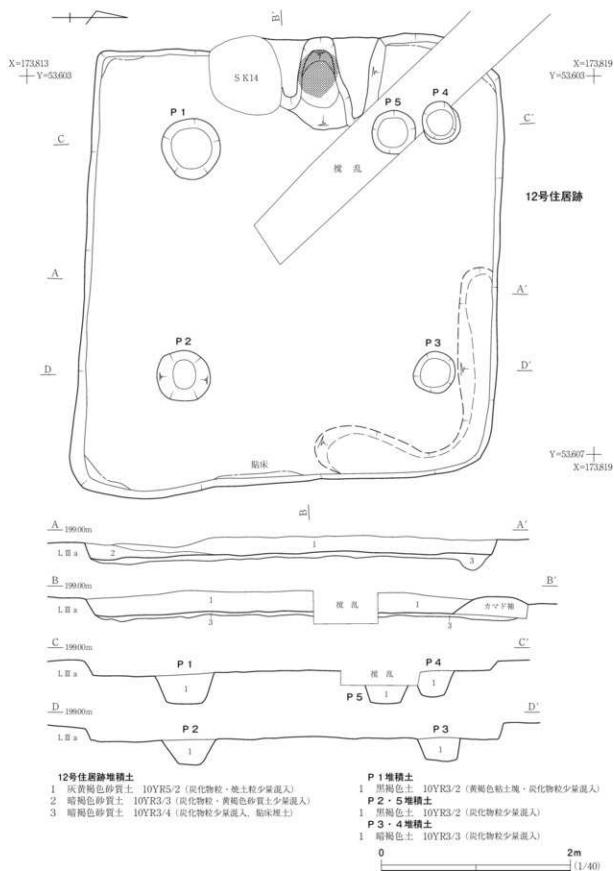
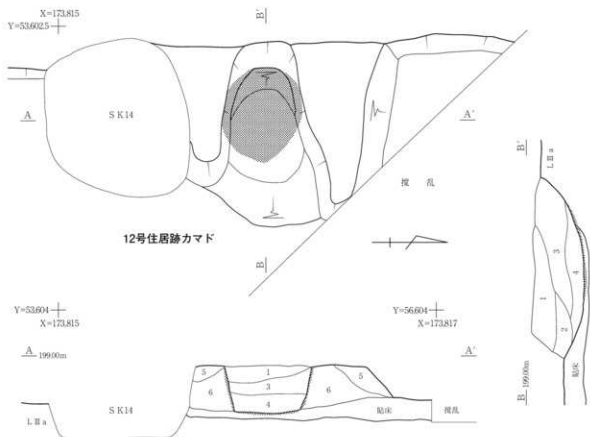
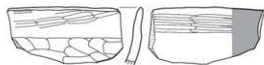


図12 12号住居跡



12号住居跡カマド増築土

- | | |
|--------------------------------------|-----------------------------------|
| 1 黒褐色土 10YR2/2 (黄褐色粘土少量混入) | 4 暗褐色土 10YR3/4 (黄土粒多量混入) |
| 2 暗褐色土 10YR3/3 (黄褐色粘土粒・炭土粒・炭化物粒少量混入) | 5 暗褐色土 10YR3/3 (炭化物粒少量混入、カマド構築土) |
| 3 黒褐色土 10YR2/2 (黄褐色粘土・炭土塊混入) | 6 黄褐色粘土 10YR5/6 (暗褐色土少量混入、カマド構築土) |



1 (床面)



2 (煙竈)

底径: 58cm
 壁高: 114cm



3 (床面)

長: 102cm
 幅: 0.7cm
 厚: 0.3cm



図13 12号住居跡カマド・出土遺物

で立ち上がり、壁高は10～20cmを測る。床はほぼ全面に貼床を施している。なお、床面には凹凸が認められ、全体的に壁際に向かい緩やかに傾斜している。

住居内施設として、カマドとピット5基を検出した。カマドは西壁の中央に位置する。カマドの左袖は14号土坑に、右袖は攪乱を受けているため残りが悪い。左袖は南側に住居内に70cm、右袖で90cm程張り出し、黄褐色粘土と暗褐色土で構築されている。両袖の最大幅は壁際で1.2mを測る。

カマド燃焼部は焚口の幅が約60cm、奥行き約1mを測る。底面は床面より10cm程掘り窪められている。底面の断面形は皿状を呈し、1cm程焼土化していた。煙道部は確認されなかった。カマド内堆積土は4層に区分した。ℓ1・2は天井崩落後の壁際からの流入土、ℓ3・4はカマド天井崩落土である。

ピットは南北壁際隔で検出した。ピットは直径40～60cm程の円形を呈し、深さは30cmを測る。この内P1～4については、ほぼ住居跡の各隅の対角線上に位置し、東西に並ぶP1・2間がピットの中で2.4m、P3・4間で2.6m、南北に並ぶP1・4間、P2・3間がピットの中で2.7mとほぼ等間隔で、方形に配置されていることから、支柱穴と判断した。なお、P5については、擾乱を掘り下げた段階で確認されたため、床下ピットの可能性もある。

この他、貼床除去後に東壁中央から北壁中央の壁に沿って、溝状の施設を検出した。規模は、幅20～50cm、深さ約10cmを測る。

遺物 (図13, 写真19)

出土遺物は土師器杯片11点、土師器甕片1点、縄文土器片2点、鉄製品1点で、土器は細片が多く遺物の出土は極めて少ない。

図13-1は床面から出土した非ロクロの土師器杯である。器形は、口縁部が直立気味に立ち上がり、体部上半に稜線を有している。外面口縁部周縁にはミガキ、体部上半には手持ちヘラケズリが施されている。また、内面にはミガキおよび黒色処理が施される。2は、ロクロ成形の土師器杯である。内面にはミガキと黒色処理が施され、底部の切り離しは、回転糸切りによる。

同図3は鉄製品である。両端部を欠損するが、形状から鋸あるいは釘と思われる。

まとめ

本住居跡は平面形が方形を呈する竪穴住居跡である。規模は南北4.4m、東西4.7mを測る。住居内施設としては、カマドと柱穴などを検出している。本住居跡所属時期については、床面から出土した遺物の特徴などから8世紀後葉頃と考えている。(大河原)

13号住居跡 S I 13

遺構 (図14・15, 写真11・12)

本住居跡は、調査区中央のL・M47グリッドに位置し、地形的には自然堤防微高地上に立地する。遺構はLⅢa上面で検出した。他の遺構との重複関係は認められない。

堆積土は1層で、堆積過程は不明である。本住居跡の規模は、南北4.4m、東西4.6m。平面形は、方形状を呈している。壁は緩やかな角度で立ち上がり、壁高は5cmを測る。床は貼床を施されず、全体的に凹凸している。また、踏み締まりなどは確認できなかった。

住居内施設として、カマドとピット6基を検出した。カマドは西壁中央やや南側に位置する。袖は住居内に90cm程張り出し、黄褐色粘土を含んだ暗褐色土で構築されている。両袖の最大幅は85cmを測る。燃焼部の規模は焚口幅40cm、奥行き1m。底面は床面を皿状に浅く掘り窪めて構築

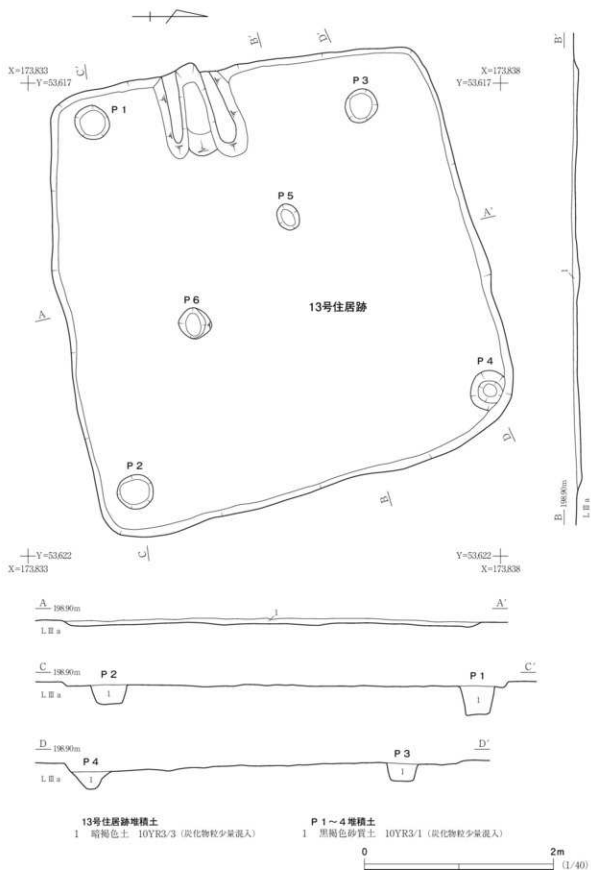


図14. 13号住居跡

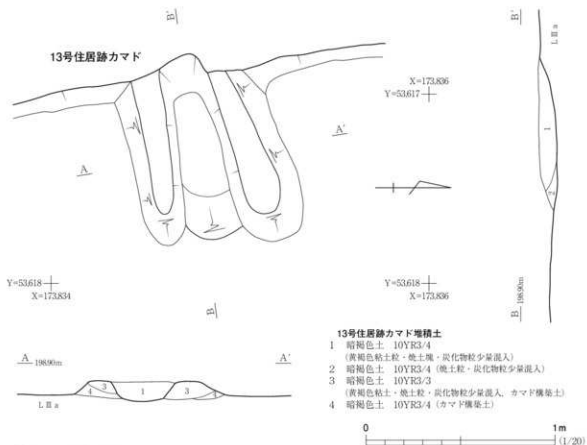


図15 13号住居跡カマド

されている。カマドの袖や底面には顕著に熱を受けた痕跡は認められなかった。また、煙道部は確認されなかった。カマド内堆積土は暗褐色土1層である。

ピットは各壁際隔と床面中央西で検出した。ピットは径30～40cm程の円形を呈し、深さは20～30cmを測る。この内比較的規模が大きく、各壁際隔に位置するP1～4については、主柱穴と判断した。また、P5・6についても規模や位置などから柱穴と考えている。

遺物

本住居跡からは、遺物は出土しなかった。

まとめ

本住居跡は、南北4.4m、東西4.6m程の方形を呈する。住居内施設として、カマドと柱穴と考えられるピット6基を検出した。本住居跡の所属時期については、出土遺物がなため特定できないが、周囲の遺構の分布状況や検出面などから奈良時代の住居跡と考えている。(大河原)

14号住居跡 S I 14

遺構 (図16, 写真13・14)

本遺構は、調査区中央西部のK48・49グリッドに位置し、地形的には自然堤防微高地上に立地する。遺構はLIVb除去後、LV上面で土器を含んだ黒褐色砂質土の不正な楕円形の広がりとして

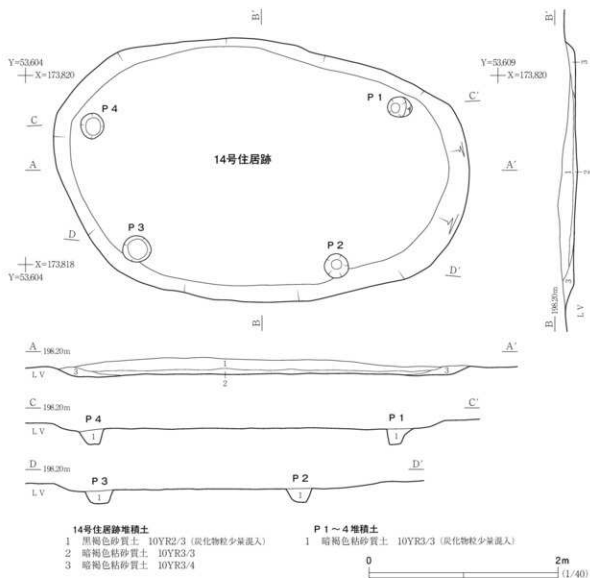


図16 14号住居跡

検出した。他の遺構との重複関係は認められなかった。

本遺構の平面形は東西に長軸を持つ楕円形状を呈し、規模は南北が2.8m、東西で4.4mを測る。壁は北側で比較的急な角度で、その他の壁では緩やかに立ち上がっている。壁の高さは5～10cm。床面は掘り込んだLV層をそのまま利用し、ほぼ平坦に整えられている。また、床面全体に踏み縮まりが確認できた。

本遺構の施設として南北側の壁際でピット4基を検出した。ピットの平面形は円形を呈し、規模は径25～30cm、深さ15cmを測る。これらのピットについては、規模や位置などから上屋を支える柱穴と考えている。この他、住居跡からは炉などの施設は確認できなかった。

遺物 (図17, 写真19)

出土遺物は縄文土器片78点、石器類7点が出土している。特に、図17-1の大型の深鉢形土器の破片は検出面からまとまって出土している。

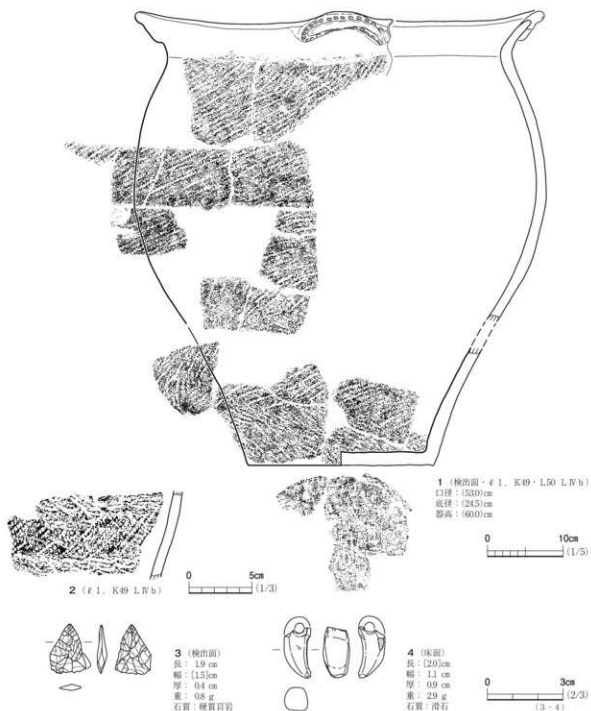


図17 14号住居跡出土遺物

図17-1は深鉢形土器である。全体の器形を知ることはできないが、頸部が「く」字状に屈曲し、胴部中央～上半にかけて強く張り出す大型の深鉢形土器になるものと思われる。口縁部は緩やかな波状口縁を呈し、波頂部には半截竹管による連続刺突文が施された三日月状の隆帯を貼り付けている。胴部には、やや原体幅の広い斜行縄文が施されている。また、底面には網代圧痕が認められるが、外縁は部分的にヘラナデが施されている。

同図2は深鉢形土器の胴部片で、斜行縄文施文後に綫織文が施されている。3は二等辺三角形状

を呈した凹基の石鏃。4は上部を欠損した滑石製の勾玉である。

まとめ

本遺構は平面形が楕円形状を呈した竪穴状遺構である。本遺構に伴う施設として、柱穴と考えられるピット4基を検出しているが、炉跡などは確認できなかった。本遺構の所属時期については、検出層位や遺物の出土状況などから、縄文時代前期後葉、大木4式土器期と考えている。(大河原)

第4節 土 坑

調査②区で検出した土坑は13基である。所属時期は、縄文時代に所属する土坑が6基、奈良・平安時代に所属するもの土坑6基、近世1基と考えている。時期別の分布状況を見ると、縄文時代の土坑では、落し穴と考えられるSK10・18～20は調査区南西側で一直線上に並んで検出されている。また、奈良・平安時代の土坑は、調査区全体に分布するが、比較的調査区南東側に分布する傾向にある。以下、これらの土坑について遺構番号順に個別に報告していく。

8号土坑 SK08 (図18, 写真15)

本土坑は、調査区中央のK48グリッドに位置する。遺構検出面はLV上面である。7号溝跡と重複し、新旧関係では本土坑が古い。平面形は北側の一部が7号溝跡で削平を受けているが、遺存状況から不整な楕円形状を呈していたものと思われる。規模は南北70cm、東西75cm、検出面から底面までの深さは25cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は鍋底状を呈している。堆積土は1層で、堆積過程は不明である。本土坑から遺物は出土しなかった。

本土坑の所属時期については、出土遺物がないため特定できないが、他の遺構との重複関係や検出面などから縄文時代に属するものと考えている。(大河原)

9号土坑 SK09 (図18・20, 写真15・19)

本土坑は調査区南側のL50グリッドに位置する。本土坑は、土器を含む黒褐色粘砂質土の不整な楕円形としてLV上面で検出した。他の遺構との重複関係は認められない。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は南北1.1m、東西0.9m。検出面から底面までの深さは、20cmを測る。壁は比較的緩やかな角度で立ち上がり、断面形は鍋底状に近い。遺構内堆積土は2層で、壁際からの流入状況が観察されることから、自然堆積土と判断した。

本土坑からは、縄文土器片12点が出土している。ℓ1から出土した大型の深鉢形土器片については、土坑周辺の包含層LVbから出土した破片と接合したことや土層の堆積状況の観察などから、土坑埋没過程で流入したものと考えている。

図20-1は大型の深鉢形土器である。全ての器形を知ることはできないが、口縁部がやや外反し、胴部上半が緩やかに膨らむ器形になる。口縁部は、緩やかな波状を呈している。比較的幅の広

い口縁部文様帯に半截竹管による連続爪形文を3段施し、波頂部に円形を描く。胴部には斜行縄文施文後に胴部上半から下半にかけて等間隔に綾織文を施している。

本土坑の所属時期については、検出層位や出土遺物などから判断して、大木6式土器期、縄文時代前期末葉頃と判断した。(大河原)

10号土坑 SK10 (図18, 写真15)

本土坑は調査区南西部のK50グリッドに位置し、LⅦ上面で検出した。重複する遺構はないが、南側に19号土坑が近接する。平面形は不整な楕円形を呈している。規模は南北1.5m、東西1.7mを測る。検出面から底面までの深さは65cm。壁は比較的急な角度で立ち上がるが、上方に向かい大きく外反する。断面形は、漏斗状を呈している。底面の平面形は長方形状を呈し、南北30cm、東西70cmを測る。

遺構内堆積土は2層に分けられ、レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と判断した。本土坑から遺物は出土しなかった。

本土坑は形状や同じ形状の18～20号土坑が直線状に並ぶことから、縄文時代の落し穴と考えられる。所属時期の詳細については、土器が出土していないため特定できないが、遺構検出面などから縄文時代前期後葉より古い所産と考えられる。(大河原)

11号土坑 SK11 (図18・20, 写真15・19)

本土坑は調査区南東部のM49グリッドに位置し、LⅠ除去後に礫を多量に含む暗褐色砂質土の広がりとしてLⅢa上面で検出した。本土坑と重複する遺構は認められない。

平面形は直径90cm程の円形を呈し、深さは18cmを測る。壁はいずれも急な角度で立ち上がり、断面形は鍋底状を呈している。また、底面の一部は黒褐色土で埋め戻されており、上面からは円面硯の破片が出土している。

土坑の堆積土は2層に分けられ、この内ℓ2は底面の埋土である。また、ℓ1については、多量の礫を含むことなどから、人為堆積と判断した。礫については、検出状況から1つ1つ並べられたものではなく、投げ込まれたものと考えている。また、礫の一部には熱を受けたものも認められた。

遺物は、底面から1点が出土している。図20-2は円面硯である。脚部には、方形の透かしの痕跡が確認できる。

本土坑の特徴としては、人為的に多量の礫が混入されていることと、破片であるが円面硯が出土したことである。所属時期については、出土遺物や検出層位などから判断して、8世紀後葉～9世紀前葉頃の所産と考えている。(大河原)

12号土坑 SK12 (図18, 写真15)

本土坑は調査区南東部のM51グリッドに位置する。遺構は、礫を多量に含む黒褐色砂質土の広

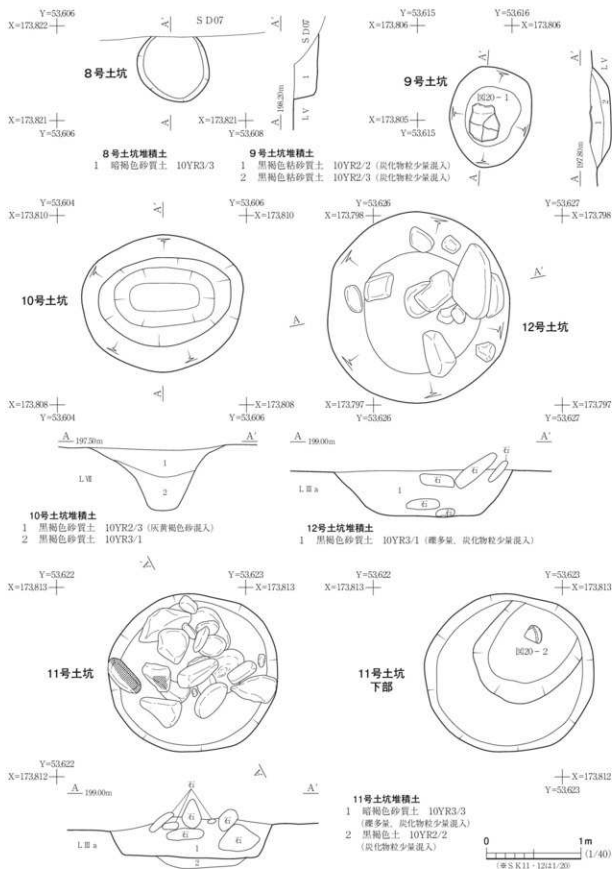


図18 8~12号土坑

がりとしてLⅢ a上面で検出した。平面形は直径1m程の円形を呈し、検出面からの深さは25cmを測る。壁は比較的緩やかな角度で立ち上がる。底面は平坦に整えられ、断面形は鍋底状を呈している。土坑の堆積土は1層で、多量の礫が混入することから、人為堆積と考えている。礫については、検出状況や土層の観察などから、投げ込まれたものと判断した。本土坑から遺物は出土しなかった。

所属時期については、出土遺物がないため特定できないが、検出面や本土坑と同様に堆積土中に礫を多量に含む11号土坑から判断して、奈良～平安時代に属するものと考えている。(大河原)

13号土坑 SK 13 (図19, 写真16)

本土坑は調査区南西部のK51・52グリッドに位置する。遺構検出面は、LⅢ a上面である。他の遺構との重複関係は認められないが、東側に11号住居跡が隣接する。

平面形は直径が約1.2mの円形を呈している。検出面から底面までの深さは50cmを測る。壁は底面から比較的急な角度で立ち上がり、上方に向かい緩やかに外反する。断面形は、漏斗状を呈している。堆積土は2層で、いずれも壁際から流入し、レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。遺物は堆積土から土師器甕片1点が出土しているが、細片で図示できなかった。

本土坑の所属時期については、検出層位や周囲の遺構の分布状況から、奈良～平安時代の所産と考えている。(大河原)

14号土坑 SK 14 (図19, 写真16)

本土坑は調査区中央西部のK49グリッドに位置し、12号住居跡精査時に礫を含む楕円形状の暗褐色砂質土の広がりとして検出した。12号住居跡と重複し、本土坑が新しい。平面形は、不整な楕円形状を呈している。規模は南北75cm、東西85cmを測る。検出面から底面までの深さは25cmを測る。周壁は急な角度で立ち上がっている。土坑の底面は凹凸が認められ、断面形は鍋底状を呈している。

土坑の堆積土は1層で、礫が混入していることから、人為堆積土と判断した。礫については、礫の平坦面を意識して土坑上部に置いていることから、意図的に並べていた可能性がある。本土坑から遺物は出土しなかった。

本土坑の所属時期については出土遺物がないため特定できないが、遺構の重複関係より、12号住居跡より新しい所産と考えている。(大河原)

15号土坑 SK 15 (図19, 写真16)

本土坑は調査区南東側のM50グリッドに位置している。遺構はLⅠ除去後のLⅢ aで検出した。なお、遺構検出時に土坑周囲を削り過ぎてしまったため、遺存状況は悪い。

土坑の平面形は不整な楕円形状を呈し、規模は南北1.3m、東西1.1mを測る。検出した壁は、緩やかに立ち上がっている。底面は細かい凹凸が認められた。検出面から底面までの深さは最も深い

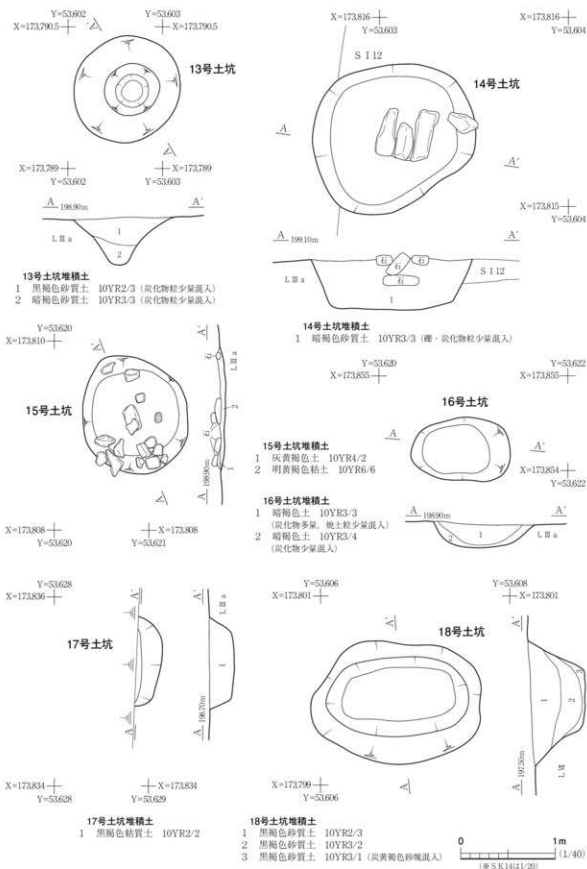


図19 13～18号土坑

部分で5cmを測る。

土坑内の堆積土は2層に分けた。堆積状況から $\ell 1 \cdot 2$ とも人為堆積と判断した。なお、土層の観察の結果、明黄褐色粘土 $\ell 2$ 上面が本土坑の底面の可能性が高く、 $\ell 2$ については、掘形埋土と考えている。また、礫の一部は、検出状況から $\ell 2$ 上面に敷かれていたものと思われる。本土坑からは、検出時に近世陶磁器片2点が出土しているが、細片のため図化できなかった。

本土坑については、検出時の遺物から近世の所産と判断した。なお、底面を粘土で整えていることから、本土坑は水溜として機能していたものと考えている。(大河原)

16号土坑 SK 16 (図19, 写真16)

本土坑は調査区北側のM45グリッドに位置する。遺構はLⅢa上面で検出した。他の遺構との重複関係は認められないが、周辺の遺構の密度は希薄である。

本土坑の平面形は、不整な楕円形状を呈している。規模は南北約70cm、東西1.05m。検出面から底面までは25cmを測る。壁は東側で比較的緩やかに立ち上がるが、他の壁は急な角度で立ち上がっている。断面形は鍋底状を呈している。堆積土は2層で、この内 $\ell 2$ は壁際からの流入状態が認められることから、自然堆積と考えている。なお、 $\ell 1$ については、多量の炭化物を含むことなどから、人為堆積の可能性が高い。本土坑からは、遺物は出土しなかった。

本土坑の所属時期については、遺物が出土していないため特定できないが、検出層位などから、奈良～平安時代の所産と考えている。(大河原)

17号土坑 SK 17 (図19, 写真16)

本土坑は調査区中央東側のM47グリッドに位置する。遺構検出面はLⅢa上面である。重複する遺構はないが、土坑西側は削平してしまい遺存していない。

遺存状況から平面形は楕円形状を呈していたものと考えられる。規模は遺存値で南北1m、東西25cmを測る。検出面から底面までの深さは約30cm。壁は比較的急な角度で立ち上がり、断面形は鍋底状を呈している。堆積土は1層で、不自然な混入物が認められないことから、自然堆積土と判断した。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑の所属時期については、遺物が出土していないため特定できないが、検出面や周囲の遺構の分布状況などから、奈良～平安時代に属するものと考えている。(大河原)

18号土坑 SK 18 (図19, 写真16)

本土坑は調査区南西部のK50・51グリッドに位置する。遺構検出面はLⅦ上面で、本土坑と重複する遺構はない。平面形は歪んだ楕円形状を呈している。規模は南北1.3m、東西1.8mを測る。検出面から底面までの深さは、60cmを測る。壁は底面から比較的急な角度で立ち上がっているが、南側では上方に向かい緩やかに立ち上がる。断面形は鍋底状に近い。底面の平面形は不整な長方形

状を呈し、南北60cm、東西1.2mを測る。

堆積土は3層に区分でき、いずれも壁際に沿ってレンズ状の堆積状況が認められることから、自然堆積土と判断した。本土坑から遺物は出土しなかった。

本土坑については、同じ形状の10・19・20号土坑が直線状に並ぶことから、縄文時代の落し穴と考えている。所属時期については、土器が出土していないため特定できないが、遺構検出面などから縄文時代前期後葉より古い所産と判断した。
(大河原)

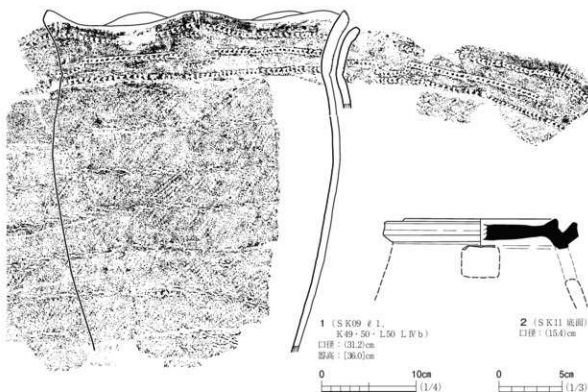
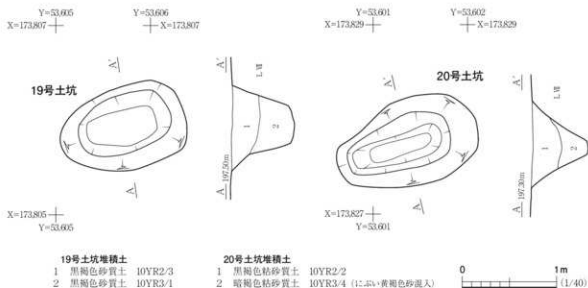


図20 19・20号土坑、9・11号土坑出土遺物

19号土坑 SK 19 (図20, 写真16)

本土坑は調査区西部のK 50グリッドに位置し、LⅦ上面で黒褐色砂質土の楕円形状の広がりとして検出した。重複する遺構はないが、北側に10号土坑が近接する。平面形は不整な楕円形状を呈し、規模は南北90cm、東西1.35mを測る。検出面から底面までの深さは65cmを測る。壁は底面からはほぼ垂直に近い角度で立ち上がるが、南側では上方部で大きく外反している。底面の平面形は、歪んだ方形を呈し南北35cm、東西75cmを測る。底面は細かな凹凸が認められ、中央に向かい緩やかに傾斜している。土坑の堆積土は2層で、いずれも壁際からの流入状況を示すことから、自然堆積土と考えている。本土坑から遺物は出土しなかった。

本土坑の所属時期については、検出面や周囲の遺構の分布状況などから、縄文時代前期後葉より古い所産と判断した。なお、本土坑の機能については、形状や10・18・20号土坑の分布状況などから、落し穴と考えている。(大河原)

20号土坑 SK 20 (図20, 写真16)

本土坑は調査区中央西側のK 48グリッドに位置し、LⅦ上面で検出した。重複する遺構はないが、南側に同規模の10・18・19号土坑が直線的に分布する。平面形は、歪んだ楕円形状を呈している。規模は南北90cm、東西1.55mを測る。検出面から底面までの深さは60cm。壁は底面から急角度で立ち上がり、西側を除き上方部で緩やかに外反する。堆積土は2層で、レンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積と判断した。

本土坑は、形状や同規模の10・18・19号土坑の分布状況などから、縄文時代の落し穴と考えられる。また、時期の詳細については、出土遺物がないため特定できないが、遺構検出面などから、縄文時代前期後葉以前の所産と判断している。(大河原)

第5節 溝 跡

調査②区で検出した溝跡は2条である。検出した溝跡については、いずれも調査区外に続き撓乱を受け削平されているため、全体の形状や規模が明確に把握できていない。本調査区で検出した7・8号溝跡はいずれも東西に配されている。溝跡の所属時期は、出土遺物や検出層位などから奈良・平安時代に所属するものと考えている。以下、溝跡について遺構番号順に個別に報告していく。

7号溝跡 SD 07 (図21, 写真17・19)

本溝跡はK～M48、L・M49グリッドに位置し、LⅢa上面で形成された沢地形に沿って検出された。この沢地形は、地元の古老によると数十年前までは、阿武隈川に続く道として使用されており、当時溝跡東側には水場も設けられていたようである。

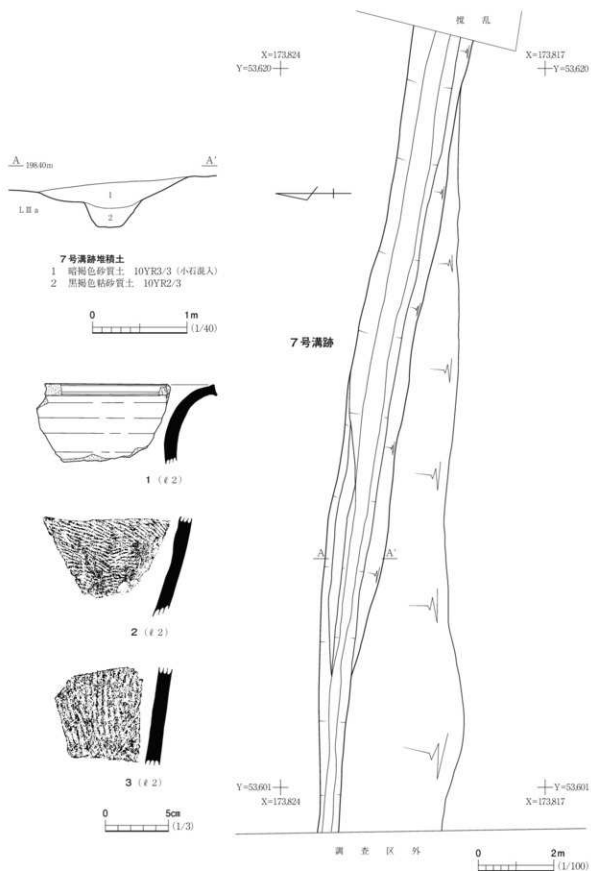


図21 7号溝跡・出土遺物

本溝跡の遺構検出面は、LⅢ a 上面である。他の遺構との重複関係は、8号土坑と重複し本溝跡が新しい。なお、検出状況などから溝跡東西端は調査区外に延びていると考えられる。また、溝跡東側は後世の攪乱を受け、削平されている。

調査区内における本溝跡の規模は全長約21.5m、幅約0.5～1.6m、深さ15～30cmを測る。溝跡東端と西端の検出面の比高差は約1m。周壁は急な角度で立ち上がる部分が多いが、K48グリッド付近では上方に向かい緩やかに外反する場所も認められた。また、底面には緩やかな凹凸が認められ、東から西に向かい緩やかに傾斜している。溝跡東端と西端底面の比高差は約60cm。また、断面形は鍋底状を呈している。

堆積土は2層に分層され、いずれも壁際からの流入状況が観察されることから自然堆積土と判断した。なお、土層の観察状況や底面の状況などから、溝跡機能時に水が常時湛水していたとは考えにくい。

遺物は、堆積土中から縄文土器片2点、土師器杯片3点、土師器甕片17点、須恵器甕片5点などが出土しているが、特にまとまった出土状況ではなく、検出面から堆積土中にかけて散在的に出土している。また、出土した遺物の多くは、細片である。図21-1～3は、須恵器甕の破片資料である。1は口縁部、2・3は外面にタタキ痕が認められる胴部片である。

本溝跡の所属時期については、出土遺物や検出層位などから、8世紀後葉～9世紀前葉頃の所産と考えている。溝跡の機能としては、区画を目的とするものではなく、降雨などを排水するための溝と考えられる。
(大河原)

8号溝跡 S D08 (図22, 写真18)

本溝跡は、調査区東南部のL46グリッド、M46・47グリッドに位置している。溝跡は遺構検出中にLⅢ a 上面で確認したが、安全帯として残した部分の調査区壁面で本溝跡の掘り込みがLⅡ上面であることを確認した。他の遺構との重複関係は認められないが、溝跡西側は後世の攪乱を受け削平されている。また、検出した溝跡の大半はLⅢ a まで掘り下げていたため、削平された溝跡上部については不明な点が多い。

本溝跡は自然堤防微高地から後背湿地部へ続く、西から東にかけて緩やかに傾斜する地形に位置する。溝跡の東端は調査区外に続き、西側は後世の攪乱で削平されている。調査区内における本溝跡の規模は全長約11m。幅は残りの良い調査区東壁際で約2m、深さ60cmを測る。周壁は比較的急な角度で立ち上がっている部分が多い。また、底面には細かな凹凸が認められ、西から東に向かい緩やかに傾斜している。溝跡西端と東端の底面の比高差は約8cmを測る。断面形は鍋底状を呈している。堆積土は2層に分層でき、レンズ状の土層堆積状況が観察されることから自然堆積土と判断した。なお、検出時に溝跡内から木杭が検出されたが、この杭はLⅠから確認できていたので、本遺構に直接伴うものではないものと判断した。

遺物は、堆積土中から土師器杯片3点、土師器甕片7点が出土しているが、いずれも細片で図示

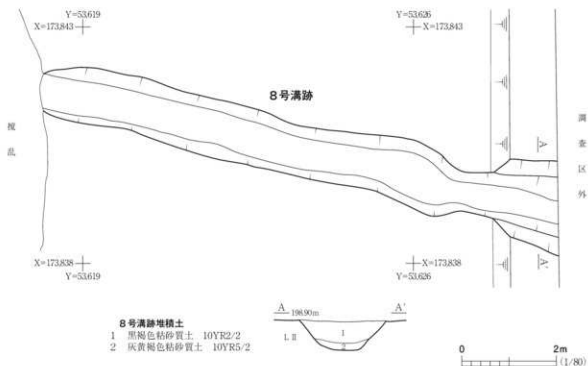


図22 8号溝跡

できなかった。

本溝跡の所属時期は、遺構検出面などから判断して平安時代に属するものと考えている。なお、本溝跡も区画を目的としたものではなく、降雨時などの排水用の溝と考えている。(大河原)

第6節 小 穴

調査②区で検出した小穴は5基である。いずれもK51グリッド内で検出されている。建物跡を想定し、周辺を精査したが他の小穴は確認できなかった。所属時期については、遺構の重複関係などから奈良時代以降に所属するものと考えている。

K51グリッドピット1～5 K51GP1～5 (図23)

P1～5は、調査区南西部のK51グリッドに位置し、LⅢa上面で検出した。このうちP1については11号住居跡と重複し、P1が新しい。P2～5については、他の遺構との重複関係は認められない。

P1～5の平面形は直径20～40cm程の不整な円形状を呈している。検出面から底面までの深さは、30cmを測る。壁の立ち上がりは、いずれも比較的急な角度で立ち上がる。堆積土は黒褐色砂質土1層で、堆積過程は不明である。これらP1～5については、P2～3～4間がピットの中心で1.8mと等間隔に並ぶことから、P1・5も含めた建物跡を想定し周辺を精査したが、これらに対応するピットは確認されなかった。P1～5から遺物は出土しなかった。

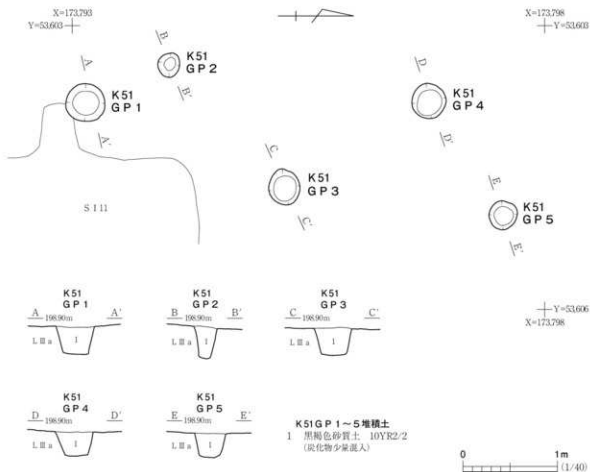


図23 K51グリッドピット1～5

本小穴の所属時期については、規模や堆積土などからP 1～5いずれも同時期の所産と考えている。時期の詳細については、出土遺物がないため特定できないが、11号住居跡との重複関係などから、奈良時代以降の所産と考えている。(大河原)

第7節 遺物包含層

調査②区における遺物包含層としては、耕作等により浮上し再包含されたL Iも含めL II・L IV a・bが確認されているが、L IV bを除き遺物の出土量は少ない。出土遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器・剥片などが出土している。時期的には、縄文時代前期～晩期、奈良・平安時代、江戸時代と各時期にわたって出土しているが、本調査区の主体となる遺物はL IV bに包含される縄文時代前期後葉～末葉の土器である。

層序と分布

遺物包含層と基本層序の関係については「本章 第2節」で述べたとおりである。本調査区では、L IV bが比較的良好的な縄文時代前期後葉～末葉の遺物包含層であった。L IV bは調査区のはほぼ全体

に堆積する層であるが、遺物の大半は調査区中央～南側のK・L49～51グリッドからの出土で、他のグリッドからの出土は極少量である。なお、調査区北側では遺物は出土していない。この平面分布の密度は、縄文時代の遺構の分布状況と重なる。

LIV bには、縄文時代前期後葉～末葉の遺物を包含するが、各時期で平面分布や出土状況に相違は認められない。また、各時期入り混じった状況で下位層LVとの層境からまとまって出土している。なお、遺物の中には、洪水時に浸水ないし流されたためか、器面が粗く胎土中に含まれる砂粒が表面まで露出する土器も認められた。LIV bの形成時期については、下位層LV上面で縄文時代前期末葉の遺物を堆積土中にも含む堅穴住居跡が確認されていることから、少なくとも縄文時代前期後葉～末葉にかけて堆積したものと考えられる。

土 器 (図24～31・33, 写真19～22)

遺物包含層から出土した土器は、破片数にして縄文土器片約3800点、土師器片約460点、須恵器片44点、陶磁器片8点が出土している。

縄文土器 (図24～31, 写真19～22)

図24～31は縄文土器である。縄文時代の遺物では、縄文時代前期～晩期の土器が出土しているが、前期後葉～末葉の土器の出土量が最も多い。前期後葉～末葉の土器については図24～30、その他の時期の縄文土器は図31に図示した。以下、各時期の土器についての説明を行う。

図24・26は、縄文時代前期後葉の大木4式期に比定される土器である。出土量は比較的多い。図24には、器形が分かる資料を掲載した。同図1は底部から体部中央まで緩やかに外傾しながら立ち上がり、体部上半で膨らみ、口縁部が緩やかに外反する大型の深鉢形土器である。文様構成は、同図1・2は口縁部に小波状の粘土紐が施され、体部上半に幅の広い綾線文帯を持つ。また、1の口縁部には、小突起が認められる。

この他、図24-3や図26の口縁上部を棒状工具などで刺突や刻みを施し、口縁部が小波状を呈しているものも認められる。これらの土器の体部には、図24-1～3と同様に体部上半に幅の広い綾線文帯を持つ。口縁部直下は、図26-1～5のように無文帯になるものもあり、同図3には隆帯、同図5には「Ω」状の粘土紐が貼り付けられている。同図15・16の口縁部上には、細い粘土紐が小波状に貼り付けられている。また、15には山形状の突起が施されている。

図25-1～3、図27-1～4は、縄文時代前期後葉の大木5式期に比定される土器である。出土量は少ない。器形については、破片資料のため不明な点が多いが、図25-1のような体部上半から口縁部まではほぼ直線的に立ち上がるもの、同図2の体部上半に膨らみを持つもの、同図3の体部中央に膨らみを持ち、口縁部に向かい緩やかに外傾するものなどが認められる。器形的には1・3は深鉢、2は台付鉢になるものと思われる。口縁部は、比較적肥厚するものが多い。

文様は、図25-1、図27-1のように、口縁上部に山形状に粘土紐を施すもの、図25-2、図27-2の口縁部下端に鋸歯状の文様を持つもの、図25-3の体部上半に沈線で連続山形文の文様

帯を形成するものが認められる。

図25-4・5、図27-5~17、図28-1~15は、縄文時代前期末葉の大木6式期に比定される土器である。本調査区の出土遺物の主体となす。破片資料が多く、全体の器形を知ることはできないが、破片資料の特徴から深鉢と鉢形土器が認められる。

図25-4は、体部上半に膨らみを持ち、「く」字状に口縁部が屈曲する器形で、鉢ないし台付鉢になるものと思われる。体部上半には、連続爪形文が施された隆線で文様を描き、下半には斜行縄文が施文されている。同図5は、口縁部と体部の境に比較的幅の広い連続爪形文が施文された隆帯が施されている。

図27-5~17は波状口縁の深鉢形土器で、沈線で文様を描く。5は口縁部文様帯と体部の縄文施文部を押し引き沈線で区画し、口縁部文様帯には2条一對の押し引き沈線が波状口縁に沿って施される。また、肥厚した口縁波状間には、部分的に刻みが施されている。6~10は同一個体の破片資料である。波状口縁に沿って、3条一對の沈線が施される。体部には、器面を縦位に区画する沈線を垂下させ、両脇に弧状や山形状の文様を展開させる。11~17も同一個体の破片資料である。11~14を見るとやや肥厚した波状口縁に沿って、口縁直下に半截竹管で沈線が施される。5と同様に口縁波状間に刻みが施されている。なお、5および6~10の体部の地文には縄文が施されるのに対し、11~17は沈線のみで文様が構成される。11~17については、後述する浮島・興津系統の土器の可能性もある。

この他に大木6式期に比定される土器としては、図28-1・11の連続刺突文が施されるもの、同図2~4の口縁部と体部を隆帯で区画するもの、同図5・6(同一個体)、7の幅の狭い口縁部文様帯に沈線や刺突を施すもの、同図12の平行沈線間に爪形文が充填されたもの、同図13・14の沈線が施されるものなどが認められる。口縁部と体部を隆帯で区画するものでは、2の隆帯上に爪形文、3の隆帯が小波状を呈する、4の斜めに刻みが施されるものなどが認められる。3は鉢形土器で、体部上半に穿孔が認められる。同図10は穿孔が施された橋状の把手である。同図15は底部外縁に細い隆帯が巡らされた鉢形土器である。

図28-9・16~22は、前期後葉~末葉の粗製土器である。器形的には、体部から口縁部まで緩やかに外傾しながら直線的に立ち上がる深鉢形土器となる。平縁が多いが16・21・22のように小波状、山形状を呈すものも認められる。地文は斜行縄文が施されるものと、9・21・22のように無文のものが認められる。なお、9の口縁部直下には穿孔が認められ、22の外面には粘土紐の積み上げ痕を残す。

図30には底部資料を一括した。底部資料の多くは、底面外縁部がやや外側に張り出すものが多い。また、底面には1~6の網代圧痕を残すもの、7・8の木葉痕を残すものが認められる。網代圧痕を残すものでは、底面を平坦にするためか、ヘラ状工具で網代の痕跡を部分的に調整しているものも認められる。

図29には、浮島・興津系の土器を一括した。出土量は少ない。器形的には、1のように体部下

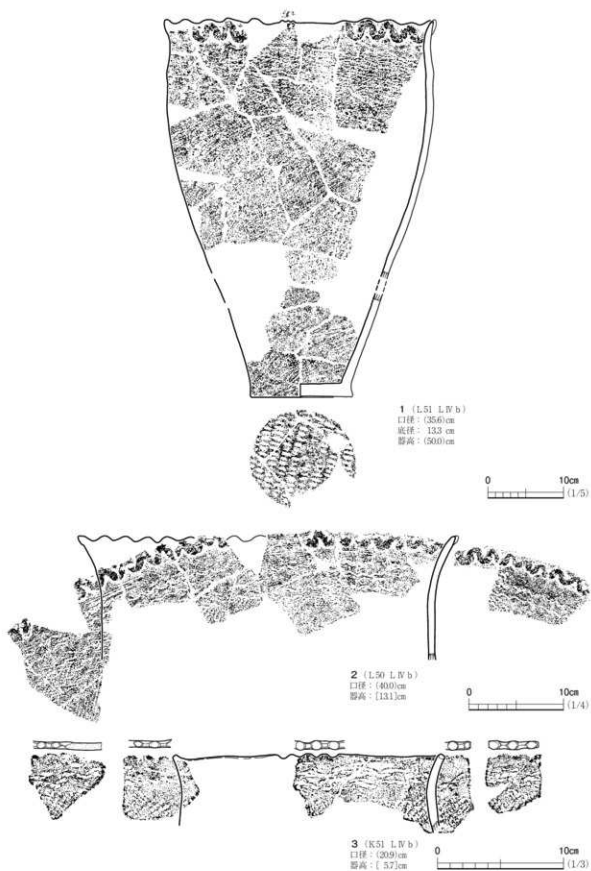


図24 調査②区遺物包含層出土遺物 (1)

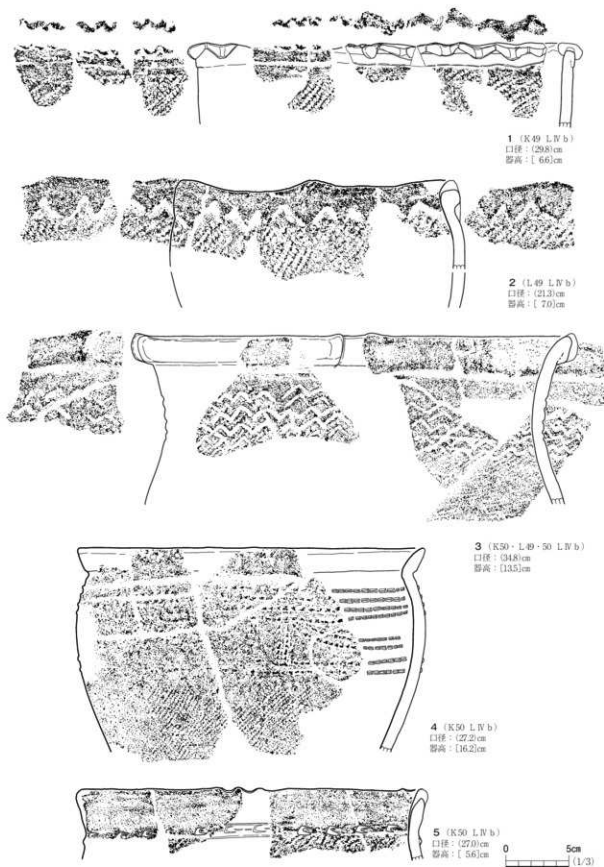


图25 調査②区遺物包含層出土遺物 (2)

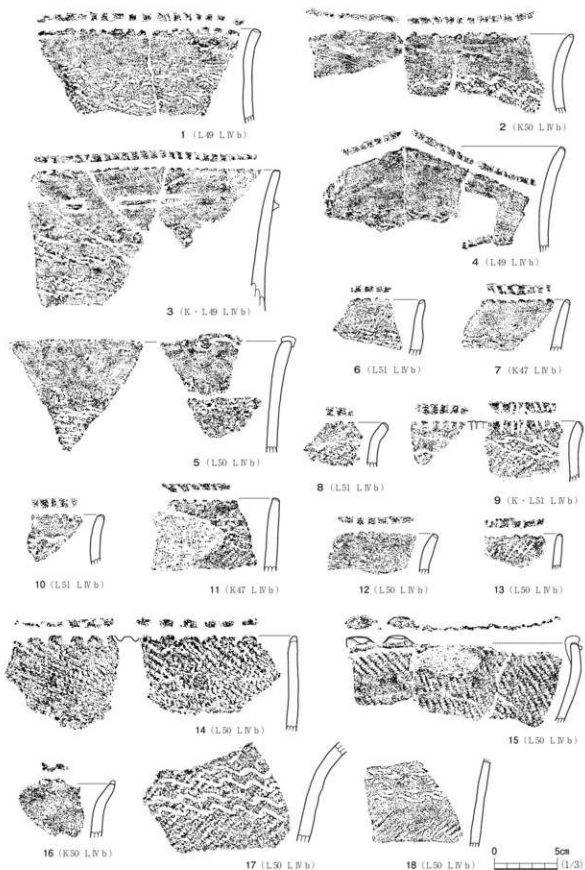


図26 調査②区遺物包含層出土遺物(3)

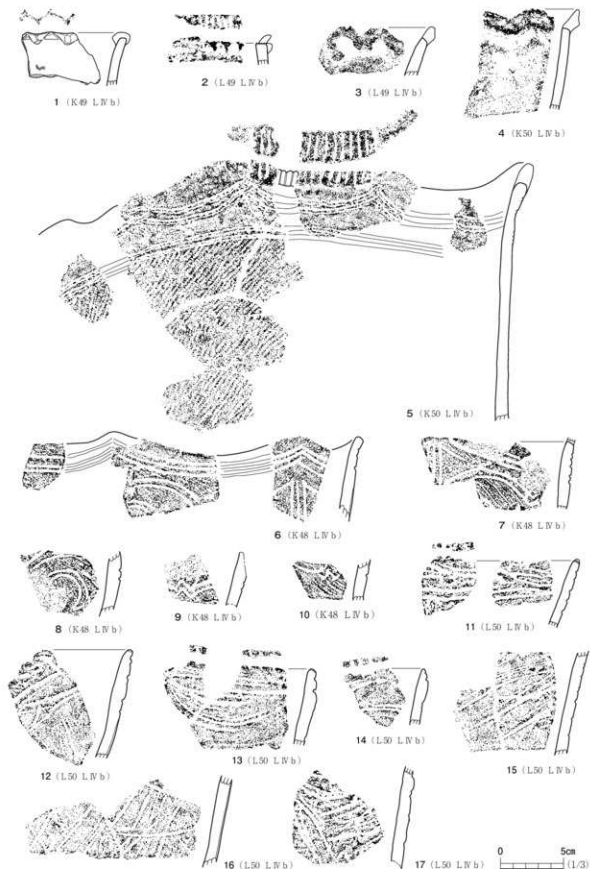


図27 調査②区遺物包含層出土遺物 (4)

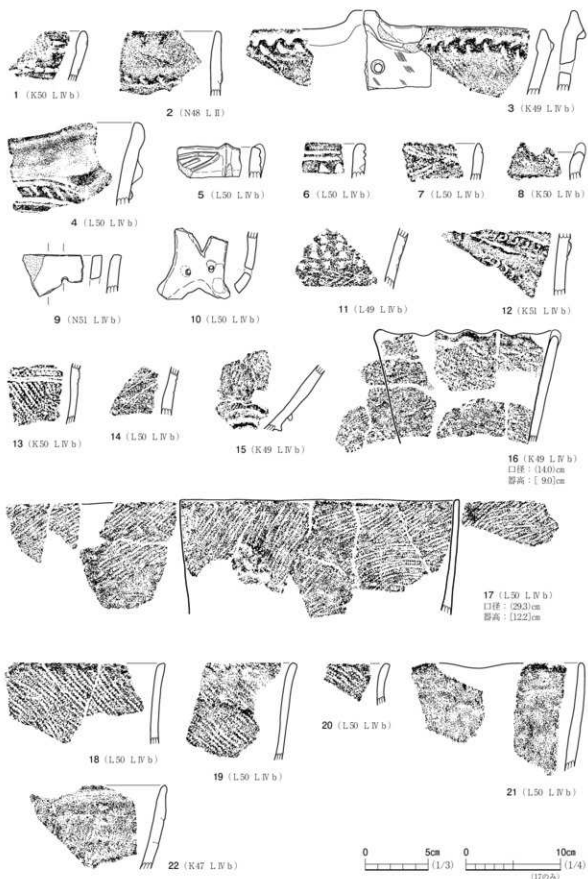


図28 調査②区遺物包含層出土遺物 (5)

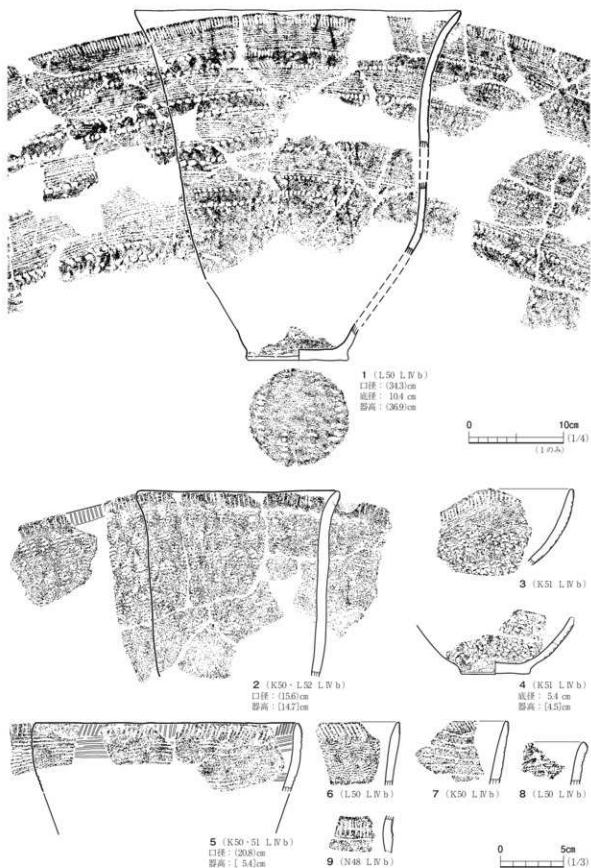


図29 調査②区遺物包含層出土遺物 (6)

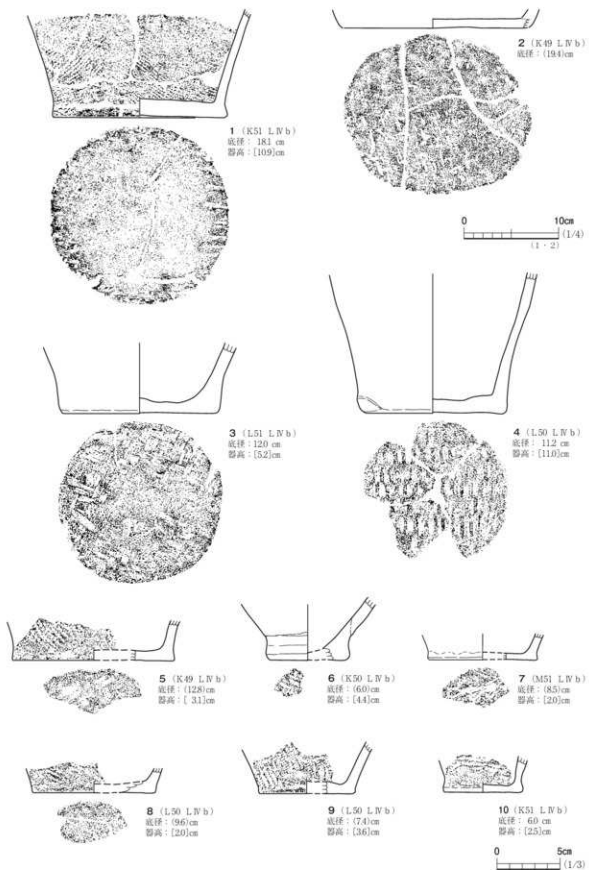


図30 調査②区遺物包含層出土遺物 (7)

半が膨らみ、体部上半に緩やかな括れを持ち、口縁部がやや外反気味に立ち上がる比較的大型の深鉢と、2の体部下半から上半まではほぼ直線的に立ち上がり、口縁部が緩やかに外反する小型の深鉢、3・4(同一個体)の底部から体部上半まで緩やかに外傾しながら立ち上がり、口縁部がやや内湾気味に立ち上がる鉢形土器などが認められる。

図29の文様構成は、口縁部資料が残るものでは、いずれも口縁部に条線帯を持つ。1は、平行沈線文帯上下に連続刺突文を持つ無文帯が条線帯直下から体部下半まで交互に展開する。2～9は貝殻文が施された土器である。これらは、貝殻の背を使用し施文するものが多い。2～4は列点状、5・6は条線状、7は貝殻縁で施文、8は有節沈線風に貝殻文が施される。これらの土器については、文様の特徴から浮島Ⅲ～興津Ⅰ式と並行する資料と考えている。

図31には、縄文時代中期～晩期の土器を掲載した。1・2は、中期末葉～後期初頭に比定される土器で、1は口縁部の無文部と体部の縄文施文部を隆線で区画する。3は盲孔と多条沈線が施された土器で、後期前葉に比定される。4は、後期後半に比定される土器である。破片資料のため器形全体を知ることはできないが、体部上半に緩やかな膨らみと括れを持つ深鉢形土器となる。文様は、体部上半の平行沈線間内に短沈線を施す。また、平行沈線を挟んだ上下には弧状沈線で縁取られた磨り消し縄文によって文様が描かれている。5は後期末葉の鉢形土器で、体部上半の平行沈線間に瘤状の貼付け、口縁部には刻みを持つ貼瘤が施されている。

図31-6は晩期中葉に比定される土器で、口縁上端と口縁直下に列点状の刺突が施される。体部には断片的であるが、雲形文をモチーフした文様が施文されている。

図31-7～10は、中期～晩期の粗製土器である。7は斜行縄文、8は羽状縄文、9は網目状撫糸文が施されている。また、10は底部資料で、底部周縁に指頭圧痕が認められる。

土 師 器 (図33, 写真22)

図33-1～3は非ロクロ土器で、1は小型の鉢、2・3は甕の底部である。2・3の底面には木葉痕を残す。これらの資料については、8世紀後葉頃の所産と考えている。同図4～7はロクロ成形の杯である。器形的には、4・5を見ると体部下半がやや膨らみ、口縁部に向かい外傾しながら直線的に立ち上がる器形となる。なお、口縁端部の立ち上がりは、4が直線的、5はやや外反している。また、4の口縁直下には沈線が巡らされる。器面の調整は、4～6には内面にミガキと黒色処理が施されている。外面には、4の体部下半に回転ヘラケズリ、6には手持ちヘラケズリが施される。底部の切り離しは、5・7が回転糸切りによる。同図8は、外面にタタキ整形痕を残す甕片である。これらの土器については、9世紀前葉頃の資料と考えている。

須 恵 器 (図33)

図33-9・10は須恵器甕の胴部資料で、内外面に整形痕が認められる。資料の時期については、概ね土師器の時期の範囲に収まるものと考えている。

陶 磁 器 (図33)

図33-11は内外面に鉄釉が施された天目茶碗である。18世紀頃の所産と考えている。

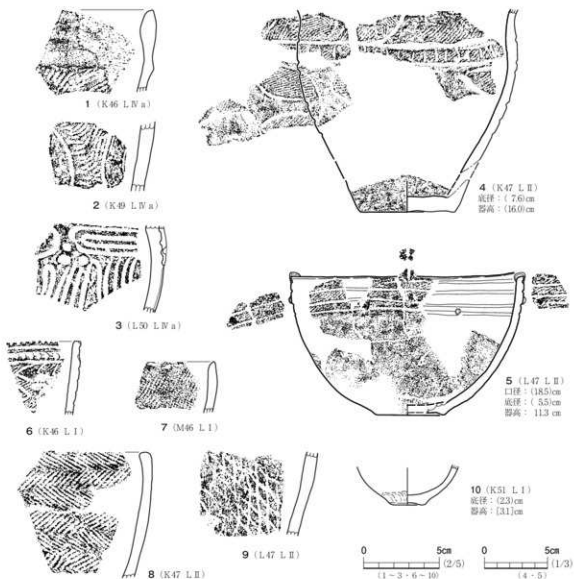


図31 調査②区遺物包含層出土遺物 (8)

石器・石製品 (図32, 写真22)

遺物包含層からは、石器・石製品は剥片類も含め189点が出土している。出土した石器の大半は、小剥片とチップ類である。

図32-1・2は、二等辺三角形の平基の石鏃となるが、いずれも素材剥片の厚みを残す。未製品と考えられる。3・4は、石鏃としたものである。鏃部を中心に剝離調整が施されている。5は打製石斧である。素材礫の形状を利用し、器体を整えるための剝離調整は粗い。7は、搔器ないし削器の未製品で、剥片周縁に部分的に器体を整えるための剝離調整が施されている。9は石核である。なお、7・8の剥片は、9と接合関係にある。石核からの剥片の採取は、打面を頻繁に転移させながら剥片剝離作業を行っている。10は片面中央部に皿状の窪みを持つ石皿である。11は、器体中央に穿孔部を持つ勾玉で、形状は牙状を呈している。

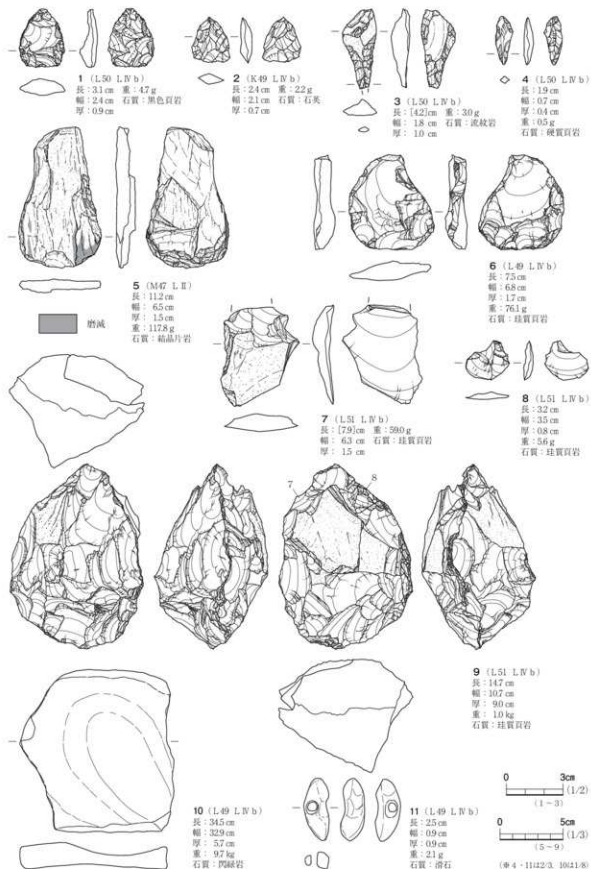


図32 調査②区遺物包含層出土遺物(9)

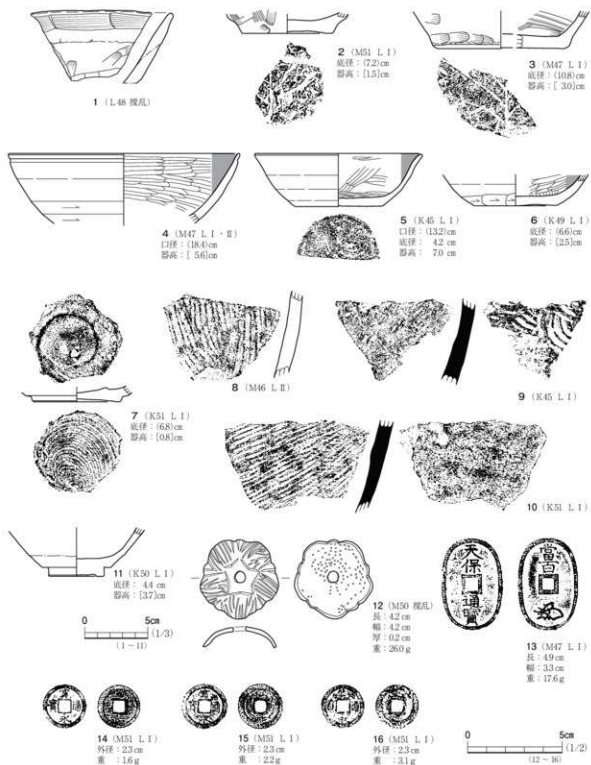


図33 調査②区遺物包含層出土遺物 (10)

その他 (図33)

その他、L I などから銅製品や古銭が出土した。図33-12は、形状が五葉を呈した釘隠しである。同図13-16は古銭で、13は天保通宝、14-16は寛永通宝である。

(大河原)

第2章 調査⑤上区の調査成果

第1節 調査経過と概要

本節では、調査⑤上区の調査経過と概要について述べる。調査に当たっては、調査区東西が民地、調査区北側は市道として使用されていたため、掘削深度に合わせ安全帯を設け掘り下げた。

調査⑤上区の調査は、6月上旬から調査区東側の重機搬入路を除いた部分の表土剥ぎを開始した。同月中旬にはLⅡ上面での遺構検出を行ったが、遺構は確認されなかった。また、現況が耕作地であったため、一部LⅡまで掘削された部分も認められた。出土した遺物は、全て耕作土中からの出土である。6月中旬以降は、工事の工程上、調査②区および調査⑧区の調査を先行させた。

なお、調査②区の調査が終了した11月下旬に本調査区の調査を再開し、既にLⅡまで掘り下げた調査区西側部分の掘り込みと調査区東側の重機搬入路の表土剥ぎを行った。調査区東側からは、LⅡ上面で溝跡2条を検出し精査を行った。12月上旬には、LⅢ上面で縄文時代晩期後葉の土器片を多量に含む土坑1基を検出・精査した。なお、LⅡからは調査区東側を中心に縄文時代晩期後葉の遺物が少量出土している。

本調査区ではLⅢ上面で湧水が激しかったため、調査区数カ所にトレンチを設け、下位層の状況を確認した。土層の観察の結果、下位層が砂礫層およびグライ層であり、遺物を含まず遺構も確認されなかったことから、LⅢ以下についてはトレンチによる土層観察と土層作図にとどめた。なお、地形図作成および調査区全景撮影を行い、12月6日に調査⑤上区の調査を終了した。

次に本調査区の概要について述べる。本調査区は築堤工事区の中央北側に位置し、南側に調査④区、北側には調査⑤中区が接している。調査面積は500㎡。調査区の現況は耕作地である。地形的には、阿武隈川右岸沿いに形成された自然堤防の微高地にあたる。現況の標高は199.30～199.50m。

本調査区で確認された遺構は、土坑1基、溝跡2条である。本調査区で確認された遺構の所属時期については、出土遺物や検出層位などから、土坑が縄文時代晩期後葉、溝跡が平安時代～中世と考えている。遺構の分布状況は、図34に示したように調査区東側に集中している。なお、LⅢ上面での標高は198.00mを測る。

遺物は、縄文土器片207点、土器片22点、須恵器片4点、かわらけ1点、剥片2点が出土した。これらの遺物の大半は、調査区東側で検出された遺構内や遺構周辺部からの出土で、他の部分での出土状況は希薄である。出土遺物については、縄文時代晩期後葉の遺物が主体を占める。遺物包含層と層位の間係については、次節「基本土層」で述べる。

(大河原)

第2節 基本土層

トロミ遺跡は、阿武隈川右岸沿いに形成された自然堤防上に営まれている。今回調査を行った調査②・⑤上・⑥～⑧区各地区では、地形的要因により土層の堆積状況が異なっていた。このため、基本土層については、隣接する調査区で対応できる層位以外は、各区個別に設定している。

なお、各区の基本土層については、トロミ遺跡調査終了後に遺物の包含状況や遺構の検出状況などから総括する予定である。

堆積状況は耕作による削平、攪乱が認められるものの、調査区東側では比較的安定した堆積状況にあった。なお、湧水が激しいLⅢ下位層については、トレンチによる断面観察にとどめている。本調査区の基本土層については、各層ごとの特徴や遺構の検出状況、包含される遺物などから、以下の13層に大別した。

LⅠは黒色土で、調査区全体に分布する現表土・耕作土である。層厚は30～100cm。LⅠa～gは、調査区東側に堆積する層である。なお、これらの層は、洪水に起因すると考えられる黄褐色系の砂質土が交互に堆積している。調査区北側の壁で観察した結果、この部分は地形的に自然堤防の微高地から後背湿地へ続く場所であり、調査区西側では確認されなかったことから、LⅠa～gについては、地形的に限られた範囲に堆積するものと考えられる。層厚は、各層10～20cm。また、LⅠgからは須恵器壘片が出土している。LⅠa～gの堆積時期については、出土遺物もほとんどなく、遺構も検出されていないことから特定できないが、後述するLⅡとの関係から、奈良・平安時代以降に形成されたものと考えている。

LⅡは黒褐色粘質土で調査区全体に堆積する層である。層厚は10～20cmを測る。縄文時代晩期後葉の遺物を包含するが、遺物の出土量は少ない。また、遺物の包含密度は、調査区東側で比較的高く、それ以外の場所では希薄である。本層上面からは、平安時代～中世の所産と考えられる溝跡2条を検出している。

LⅢは褐灰色砂質土で調査区全域に堆積する。層厚は10～30cm。本層から遺物は出土していない。縄文時代晩期後葉の土坑が本層上面で検出された。なお、本層から下位の層については特に湧水が激しい。今回の調査では、本層から縄文時代の遺構は確認されなかった。本層の堆積時期については、遺構の検出状況などから、縄文時代晩期後葉には既に形成されていたものと考えている。

LⅣは暗褐色砂礫層である。層厚は15～30cm。LⅤはにぶい黄橙色砂質土で、層厚は10～20cmを測る。LⅥは灰オリーブ粘砂質土で、全体的グライ化している。

以上のように、本調査区では現表土、耕作土を含め13層が確認された。しかしながら、調査範囲が狭く、下位層では湧水が激しかったため、地形全体を概観した土層の観察および堆積過程や時期の詳細については特定できなかった。本調査区の基本土層については、隣接する調査④・⑤中区の堆積状況の結果も踏まえ、今後再考する必要がある。

(大河原)

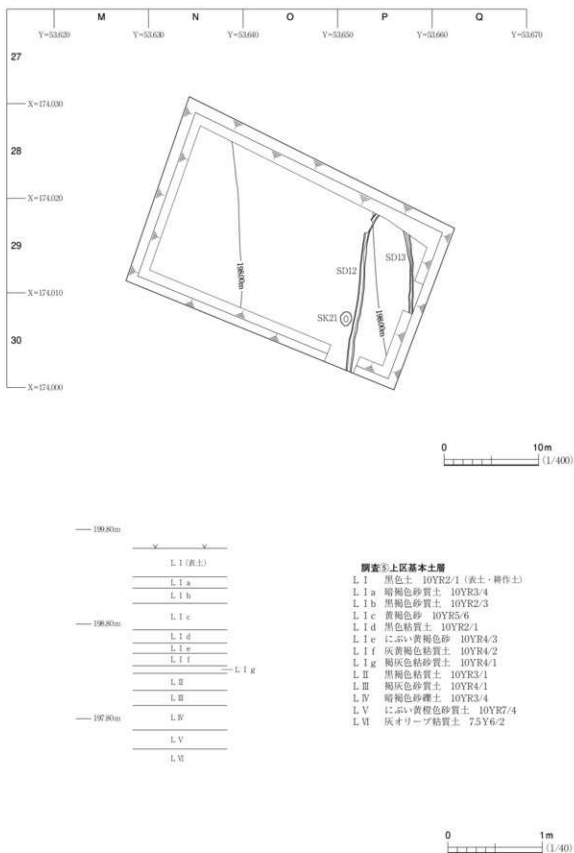


図34 調査⑤上区遺構配置図・基本土層

第3節 土 坑

調査⑤上区からは、縄文時代晩期の土坑1基を検出した。土坑内からは、ほぼ完全な形の大型の深鉢形土器と部分的に朱彩された鉢形土器が出土している。以下、21号土坑について報告を行う。

21号土坑 SK21 (図35, 写真25・27)

本土坑は、調査区南東のP30グリッドに位置する。遺構検出面はLⅢ上面である。他の遺構との重複関係はない。土坑の平面形は、不整な楕円形状を呈している。規模は南北1.5m、東西1.2m、検出面から底面までの深さは30cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈している。堆積土は1層で、堆積土中に多量の土器片を含む。堆積過程は人為堆積と判断した。

遺物は、大型の縄文土器深鉢と部分的に朱彩された鉢形土器で、ほぼ完全な形に復元できた。遺物の出土状況などから、完全な形の土器を据えたのではなく、破片の状態で土坑内に埋めたものと判断した。

図35-1は大型の深鉢形土器である。器形的には、底部から体部上半にかけて直線的に外傾しながら立ち上がり、口縁部に向けやや内傾する。口縁部は平縁の複合口縁となる。外面には口縁部周辺に横位に、体部には斜位に摺糸文が施されている。内面上部には、粘土紐輪積み痕を残す。また、内面下部には炭化物が付着した痕跡が認められる。

同図2は、体部上半に緩やかな膨らみを持つ鉢形土器である。口縁部は直立気味に立ち上がる。口縁は平縁となるが、部分的に小波状を呈す。内外面および口縁端部には沈線を巡らしている。外面体部には、斜行縄文が施される。また、口縁部外面と口縁端部の沈線内で、部分的に朱彩が認められた。

本土坑は、大型の深鉢と朱彩された鉢が破片の状態で人為的に埋められていた。土坑の所属時期については、出土遺物などから縄文時代晩期後葉に属するものと考えている。(大河原)

第4節 溝 跡

調査⑤上区で検出した溝跡は2条である。検出した溝跡については、いずれも調査④区・⑤中区および調査区外に続くことから、全体の形状や規模が明確に把握できていない。本調査区で検出した12・13号溝跡は、いずれも南北に配されている。なお、2条の溝跡については、調査区北側に向かい徐々に近接しているため、本来1条の溝跡が分岐した部分を検出・調査した可能性もある。

溝跡の所属時期は、検出層位等から平安時代～中世に所属するものと考えている。以下、これらの溝跡について遺構番号順に個別に報告していく。

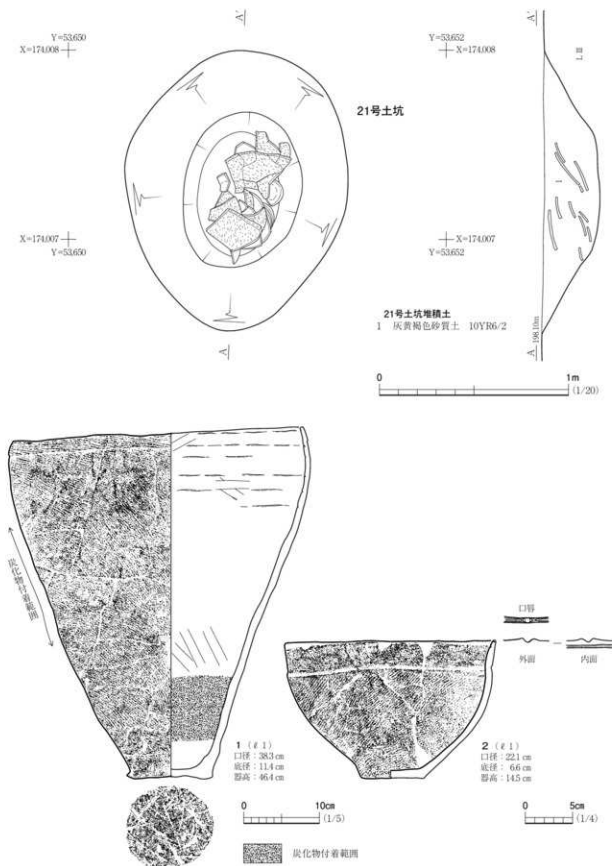


圖35 21号土坑・出土遺物

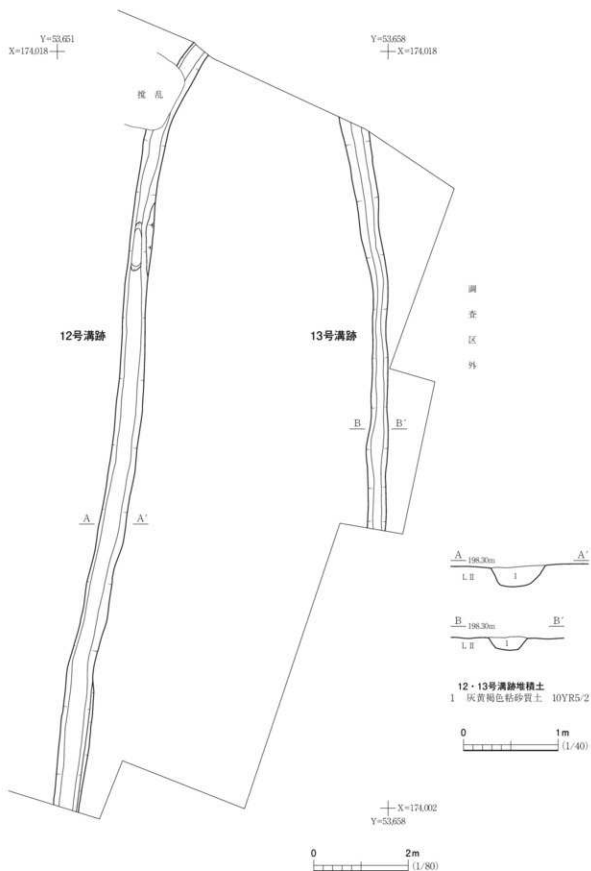


図36 12・13号溝跡

12号溝跡 S D 07 (図36, 写真26)

溝跡は調査区の東側P 29・30グリッドに位置し、自然堤防上の微高地に沿って南北に配されている。検出面はL II上面である。他の遺構との重複関係は認められないが、東側に13号溝跡が近接する。また、北側の一部は攪乱を受け遺存していない。また、溝跡南北端については、調査④区・⑤中区に続いている。

本溝跡は、ほぼ直線的に南北に配されているが、北側では緩やかに東側に曲がっていく。調査区内で検出できた溝跡の規模は全長約16.4m、幅約40～60cm、深さ15～20cm。周壁は比較的急な角度で立ち上がる部分が多い。底面はほぼ平坦に整えられているが、ピット状に窪む部分も認められる。断面形は鍋底状を呈している。

堆積土は1層で、不自然な堆積物などが混入していないことから、自然堆積土と判断した。本溝跡からは、遺物は出土しなかった。

本溝跡の所属時期については出土遺物がないため特定できないが、検出層位などから平安時代～中世の所産と判断した。溝跡の機能としては、溝跡全体を調査していないため判断できないが、本調査区では部分的にL IIないしL IIIで湧水するため、これらを排水するために設けられた溝と考えられる。また、本溝跡と隣接する13号溝跡は、調査区北側に向かい徐々に近接しているため、本来1条の溝跡の分岐部分の可能性もある。
(大河原)

13号溝跡 S D 13 (図36, 写真26)

本溝跡は、調査区東側のP 29・30グリッドに位置し、L II上面で検出した。他の遺構との重複関係は認められないが、溝跡西側に12号溝跡が隣接する。なお、溝跡北端は調査⑤中区、南端については調査区外に続いている。

調査区内で検出された溝跡の規模は全長約8.6m。幅は30～60cm、深さ10cmを測る。周壁は比較的急な角度で立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、断面形は鍋底状を呈している。

堆積土は1層で、12号溝跡と同一の灰黄褐色粘砂質土が堆積する。堆積土中に不自然な混入物などが認められないことから、自然堆積と考えている。本溝跡からは、遺物は出土しなかった。

本溝跡については、隣接する12号溝跡が北側で本溝跡に近接するので、本来1条の溝跡だった可能性が高い。所属時期については、出土遺物がないため特定できないが、検出層位などから平安時代～中世の所産と考えている。
(大河原)

第5節 遺物包含層

本調査区における遺物包含層としては、LⅡが確認されている。遺物はLⅡおよび耕作等により浮上し再包含されたLⅠも含め縄文土器、土師器、須恵器、かわらけ、剝片が出土しているが、出土量は極めて少ない。時期的には、縄文時代晩期、奈良時代～中世と各時期にわたって出土しているが、縄文時代晩期後葉の遺物が主体を占める。

層序と分布

遺物包含層と基本層序の関係については「本章 第2節」で述べたとおりである。本調査区内ではLⅡが遺物包含層に該当する。なお、今回の報告では便宜的にLⅠとして報告しているが、LⅠf・gにも古代・中世の遺物が極少量含まれている。

次に、出土遺物と検出遺構からLⅡの堆積時期を概観する。なお、各層の詳細については、今後調査予定である調査④区・⑤中区の調査終了後に述べることにする。縄文時代晩期後葉の遺物を包含するLⅡは、調査区全域に分布するが、遺物の包含は極めて希薄である。LⅡの堆積時期については、下位層のLⅢからは同時期の土坑が検出されていることから、少なくとも縄文時代晩期後葉以降に形成された層と考えている。

遺物出土(LⅡ出土)平面分布状況を見ると、出土した遺物の大半が、土坑が検出された周辺のO29グリッド、P29・30グリッドから出土している。

土 器 (図37, 写真27)

本調査区から出土した土器は、LⅡおよび耕作等により浮上し再包含されたLⅠも含め、破片数にして縄文土器片74点、土師器片22点、須恵器片6点、かわらけ1点が出土している。

図37-1～3は縄文土器である。1・2については、接合はしなかったものの、同一個体である。器形的には体部上半に膨らみを持ち、口縁部が「く」字状に屈曲する深鉢形土器となる。口縁部は棒状の工具で押圧され、小波状を呈す。また、体部上半と口縁部境には沈線が巡らされている。体部には、網目状捺糸文が施文される。底面外縁の一部に網代圧痕が認められるが、それ以外は底面を平坦にするためか、ヘラ状工具で整形している。3は、体部に網目状文が施文された小型の鉢形土器である。器形はコップ状を呈している。これらの土器の所属時期については、晩期後葉頃に比定される。

図37-4はハケメが施された土師器甕片、同図5・8は須恵器甕の胴部片、同図6は須恵器杯である。同図7は口縁部が緩やかに外傾するかわらけである。4～6・8については、奈良～平安時代、7については鎌倉時代の所産である。

(大河原)

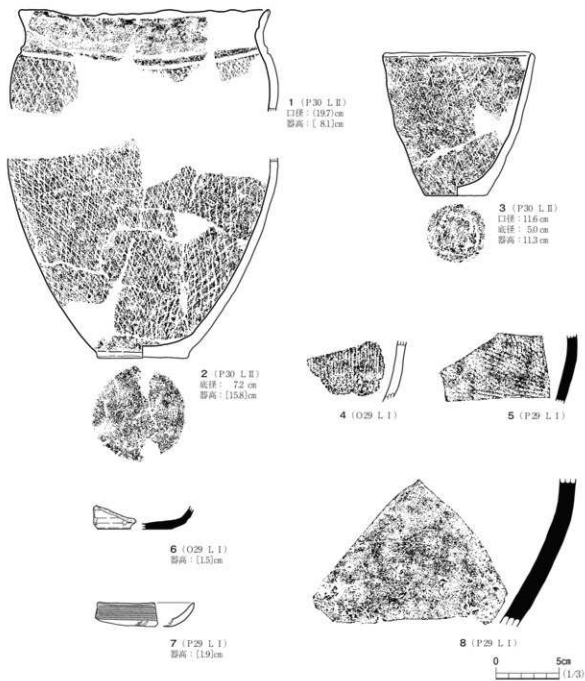


図37 調査⑤上区遺物包含層出土遺物

第3章 調査⑦区の調査成果

第1節 調査経過と概要

調査⑦区は遺跡の北部に位置し、舟形橋の南脇に存在する。2本の市道に挟まれた三角形の調査区で、南に調査⑥区が隣接する。調査前の現況は荒地であった。

調査⑦区は、年度当初に調査準備を進める中で、当年度の調査予定箇所に上がっていなかったが、5月中旬に国土交通省側から工事計画の変更に伴う本調査区の調査の要望が示されたことから、急遽、調査を実施することになった。

6月6日から重機による表土削ぎを開始し、10日からは作業員による遺構検出作業を行った。調査区の中央部から周壁が焼成化した大きな穴が検出されたが、その後の調査で、この穴は現代の混乱坑であることが判明した。7月になり、作業員を増員するとともに、調査⑧区の調査に集中することから、本調査区の調査は8月末まで一時中断した。

8月29日から本調査区の調査を再開し、遺物包含層LⅡの掘り込みと新たに検出した古代の1号溝跡の調査を行った。その後、9月13・14日に重機でLⅢを除去し、19日からは遺物包含層LⅣの掘り込みを実施した。この層からは縄文土器が出土するが、その範囲は調査区南東部に限られることから、それより北西では重機も使用して掘り下げ、下層のLⅤ・Ⅵの掘り込みへと移行した。調査期間中、雨天などにより作業の中止や足場が悪くなることもあったが、10月24日には調査を終了し、28日に現地を国土交通省へ引き渡した。なお、本調査区の調査はLⅢを境に大きく上層(400m)と下層(200m)に分けて調査した。

調査の結果、上層からは古代の溝跡1条と遺物包含層が検出され、下層からは縄文時代早期～中期にかけての遺物包含層が検出された。なお、出土した遺物の点数は、縄文土器片232点、土師器片56点、須恵器片18点、かわかけ片1点、陶磁器片6点、石器類9点である。(能登)

第2節 基本土層

本調査区の基本土層は、調査区の北壁・南東壁・南西壁で観察できるが、いずれにおいてもほぼ同一の様相を呈していることから、南東壁において記録を取ることにした。基本的には色調の違いにより7層に大別され、さらに細分される層もある。

LⅠaは砂利や碎石などを敷いた現表土で、層厚は約10～15cmである。LⅠbは暗褐色砂質土で、LⅠaを敷く前の旧表土である。炭化物が少量混入し、固く締まっており、層厚は約30～50cmを測る。土師器が少量出土している。

LⅡは黒褐色土で、LⅢが塊状に少量混入している。固く締まっており、層厚は約15～30cmを

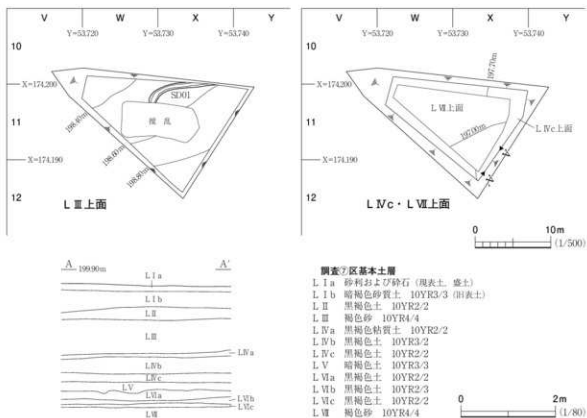


図38 調査⑦区遺物配置図・基本土層

測る。土師器や須恵器など古代の遺物包含層である。

LⅢは締まりの弱い褐色砂で、阿武隈川の洪水により堆積した砂と推測される。混入物がなく、層厚は約70cmを測る。無遺物層。調査⑧区のLⅢに相当する。

LⅣaは黒褐色粘質土で、炭化物が微量混入している。固く締まっており、層厚は10cm前後を測る。縄文時代中期の土器を包含するが、出土量は少量である。LⅣbは黒褐色土で、炭化物が微量混入している。固く締まっており、層厚は約25～35cmを測る。縄文時代前期の土器を包含する。LⅣcも黒褐色土であるが、LⅣbとは色調が若干異なる。炭化物が微量混入している。固く締まっており、層厚は約15～20cmを測る。縄文時代前期の土器を包含する。LⅣa～cは調査⑧区のLⅣに相当する。

LⅤは暗褐色土で、にぶい黄褐色砂が薄い層状に混入しており、固く締まっている。層厚は約15～25cmを測り、無遺物層である。調査⑧区のLⅤに相当する。

LⅥaは黒褐色土で、炭化物が微量混入している。固く締まっており、層厚は約10～25cmを測る。縄文時代早期の土器を包含し、調査⑧区のLⅥaに相当する。LⅥbも黒褐色土で、炭化物が微量混入している。固く締まっており、層厚は約5～17cmを測る。縄文時代早期の土器を包含し、調査⑧区のLⅥbに相当する。LⅥcも黒褐色土で、炭化物が微量混入している。固く締まっており、層厚は約5～10cmを測る。無遺物層である。

LⅦは褐色砂で、締まりは弱い。調査⑧区南東部のLⅦに相当する。

（能登谷）

第3節 溝 跡

本調査区において検出された遺構は1号溝跡のみである。遺構数が少ないのは、狭い調査面積と調査区中央部に大きなゴミ穴が掘られていたことにもよるであろう。1号溝跡は舟形橋が架設された調査区北端から、ゴミ穴までの範囲で認められた。

1号溝跡 SD 01

遺 構 (図39, 写真30・31)

本遺構は⑦区のW・X 11グリッドに位置する溝跡である。L II 上面から掘り込まれた攪乱坑を掘り下げ、L II を掘削中に図示した須恵器の大甕が出土したことから、遺構の存在を考慮しながら

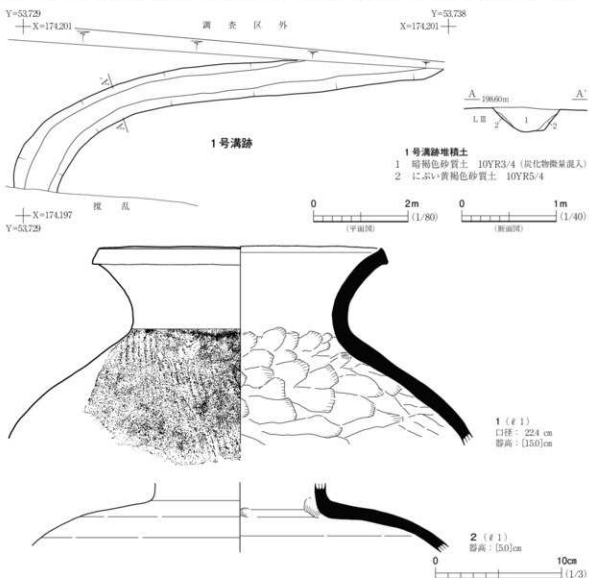


図39 1号溝跡・出土遺物

調査を進めた。遺構の平面形を明確にするために、LⅢ上面まで掘り下げて検出している。検出面の標高は198.50mである。検出面のLⅢは阿武隈川が流れる西へ向かって緩やかに傾斜している。本遺構の北端は舟形橋の下へと延びている。南端は掘乱坑によって壊されていたが、調査⑥区に延びていることも考慮され、調査⑥区において検出した10号溝跡と同一遺構である可能性が高い。

堆積土は2層を確認した。①は黒褐色砂質土で流入土、②はにぶい黄褐色砂質土で壁面崩落土および流入土である。堆積状況より、自然堆積と判断した。

本遺構の規模は、長さ9m、最大幅1m、検出面から底面までの深さは25cmを測る。底面の標高はほぼ南へ向かってわずかに傾斜する。底面は平坦というよりは、やや丸みを帯びる。底面から壁面にかけては40～50°程の傾斜で立ち上がる。

遺物 (図39, 写真32)

堆積土中からは縄文土器片3点、土師器片5点、須恵器片8点の遺物が出土した。内2点を図示した。いずれも須恵器の大甕である。図39-1はLⅡ掘削中に出土した。口縁部から胴部上半にかけての資料である。外面には平行タタキ目、内面には横方向への精緻なナデが観察できる。口縁部内面と肩部には自然軸が観察できる。2は肩部の資料である。1に比べて器壁が薄い。外面は自然軸が発泡した状況が観察できる。内面は無文である。

まとめ

本溝跡は自然地形に沿って認められ、曲線的である。このことから自然流路または自然流路を利用した排水路と考えられる。出土遺物から、古代の溝跡であると想定している。(三浦)

第4節 遺物包含層

本調査区において黒褐色土または黒褐色粘質土の堆積が認められ、層中には土師器片や縄文土器片が含まれていた。本調査区における遺物包含層としては、LⅡ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵが確認されている。遺物は縄文土器片、土師器片、須恵器片、かわらけ片、陶磁器片、石器・剥片が出土している。出土量は少ないが、出土した遺物の時期は幅広い。遺物の確認できたこれらの層を遺物包含層とし、本節で報告する。

層序と分布

本調査区はV10・11、W10～12、X10～12、Y11グリッドの範囲である。第2節でも記載したように、LⅠから基盤層であるLⅦまで認められた。さらにLⅠはa・b、LⅣはa・b・c、LⅥはa・b・cに細分された。各層位によって、土色や土質および出土する遺物が異なることから分層した。褐色砂であるLⅢを鍵層として、LⅢ以上を上層、LⅣa以下を下層と便宜的に呼称する。

上層の遺物包含層はLⅡであり、主に古代以降の出土遺物が認められた。上層としたLⅢ上面での本調査区の平面積は400㎡である。調査区周囲には舟形橋や市道が隣接することから、幅1m程

度の安全帯を設けている。地形的には東から西に向かって緩やかに下る。そのためLⅡも西に向かって次第に層高が厚くなる。

下層はLⅣa～LⅥbであり、縄文時代の層である。縄文時代早期～晩期までと各時期にわたって出土している。中でも主体となる時期は、前期前葉である。下層としたLⅤ上面での本調査区の平面積は200㎡である。LⅤ面は上層底面であるLⅢ面から約1.8m下がる。また、LⅢは砂層であるため非常に崩れやすい。そのために調査区壁面の崩落への対処として、調査区周囲を階段状に平坦面を造りながら掘り下げている。

本調査区から縄文土器片232点、土師器片56点、須恵器片18点、かわらけ片1点、陶磁器片6点、石器・剣片9点が出土している。

土 器 (図40・41, 写真33～35)

縄文土器 (図40・41, 写真)

図40, 図41-1～6に縄文土器を図示した。器面は脆く弱い。胎土中には長石の混入が顕著に認められる。

図40-1は横位の沈線が施文された深鉢形土器の口縁部資料である。器壁は比較的薄く、堅地である。口縁部は平坦に作られている。縄文時代早期中葉の土器である。

図40-2・3・6～8は文様構成、施文具、胎土、色調などの特徴や出土位置から、同一個体の可能性が高いと考えられ、器形は緩やかな波状口縁をもつ深鉢形土器と考えられる。2・3・6・7は口縁部と胴部の境に横位隆帯が貼り付けられている。隆帯上には棒状工具による刻みが施される。2の器形は波状口縁となる。胴部には斜縄文が施文される。口縁部から横位隆帯に向かってV字状に2本の隆帯を貼付している。口縁部文様帯には、幅6mm程の半載竹管工具による2列の刺突に近い押し引き文が認められる。波状口縁の頂点となるV字に囲まれた口縁部文様帯には、同施文具による1列の押し引き文が施文される。3・6～8には2列の押し引き文が施され、口唇部には2個または3個の小突起が認められる。押し引き工具は幅6mmの半載竹管を用いている。胴部には斜縄文が施文されるようである。

図40-4も口縁部資料である。櫛歯状工具により、刺突状の押し引きを施している。5は口唇部が肥厚し、端部は平坦になる。幅6mm程度の半載竹管工具を用いて刺突状に施文する。9は緩い波状口縁で、内湾する器形の深鉢形土器である。口縁部無文帯には半載竹管工具を用いた平行沈線により文様を描く。胴部にはやや節の太い斜縄文が施文される。10は口縁部文様帯と胴部との境界において、屈曲する器形である。縄文地文上に5条の沈線が横位に引かれる。胎土中に明確な繊維混和痕が認められた。

図40-11～16には、沈線が引かれた胴部資料を掲載した。11は縄文地文に横位沈線が描き出される。胎土や文様の特徴から同図10と同一個体であると考えている。12の器形は胴部に括れを持ち、口縁部が大きく開く深鉢になると考えられる。半載竹管工具による横位沈線が認められる。胴部に

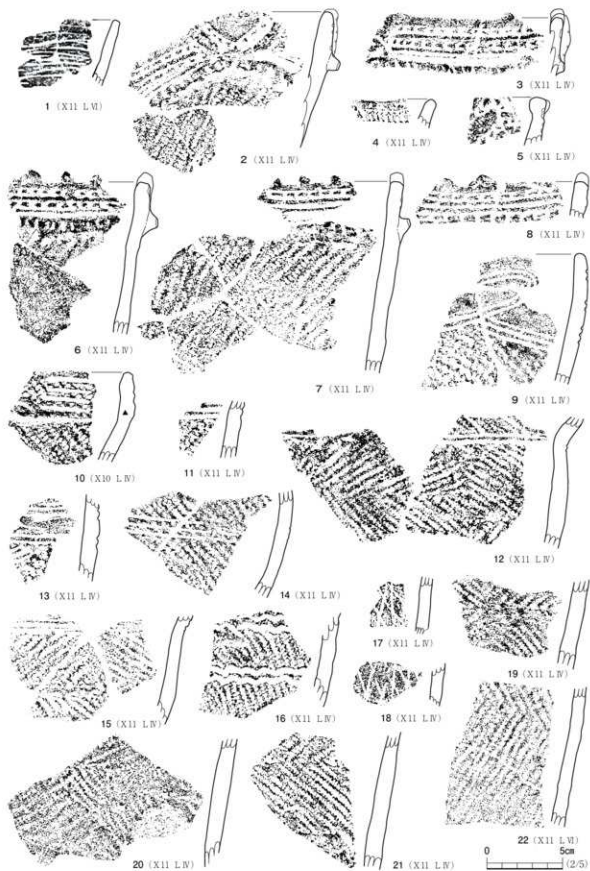


図40 調査⑦区遺物包含層出土遺物(1)

は羽状縄文が施文される。13は口縁部に近い胴部資料であると判断している。半截竹管を用い2条の沈線が横位に施文されている。14は縄文地文上に半截竹管による横位の沈線を施す。15は半截竹管により横位の沈線を描く。胴部の括れ部または口縁部と胴部文様帯との境界に引かれた線と考えられる。地文には羽状縄文が施文される。16は縄文地文上に半截竹管工具によって波状の沈線を描く。上下に2条認められる。

図40-17~22は地文のみの資料を集めた。17・18は撚りの弱い網目状撚糸文が施文される。19~22は非結束の羽状縄文が施文される。

図41-1~3は縄文時代中期末葉の資料を掲載した。沈線または微隆起線によって区画文様を描出し、その区画内に縄文を充填したり、無文とした胴部資料である。1は微隆起線によって区画文を描き、無文の区画内にはよく磨かれている。器壁はやや硬く、比較的薄手である。2・3は3~5mmの沈線により文様を描き、区画内には縄文を充填している。胎土や文様構成の特徴が類似することから、同一個体の可能性がある。深鉢形土器か筒形の器形になると考えられる。

図41-4は口縁部に無文部をもつ口縁部資料である。無文部はよく磨かれている。胴部には斜縄文が認められる。5は内湾する器形の口縁部資料である。

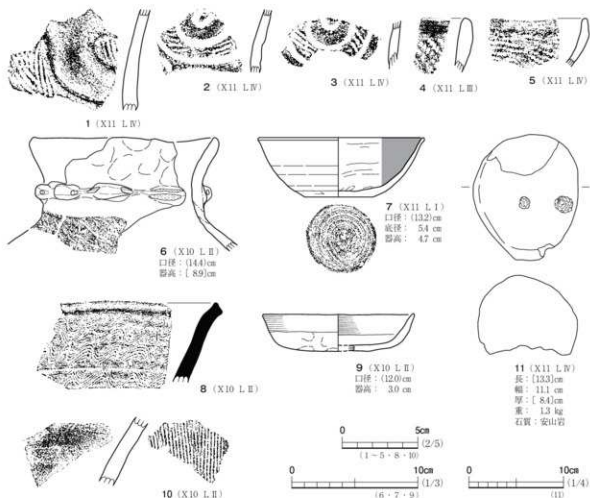


図41 調査⑦区遺物包含層出土遺物(2)

図41-6は小型壺の口縁部から胴部上半の資料である。口縁部は無文で平坦に作られている。頸部には約1cmおきに3cm程度の粘土瘤が貼付される。粘土瘤には横方向の穿孔がされている。胴部には網目状燃糸文が施文される。内面には粘土の輪積み痕が明瞭に残る。縄文晩期中葉頃の資料である。

土師器・須恵器・かわらけ・陶磁器 (図41, 写真33)

図41-7~10には古代~近世の資料を掲載した。7はロクロ成形の土師器杯である。内面は黒色処理されている。器面が荒れているため内面調整は不明瞭である。底部には回転糸切り痕が明瞭に残る。舟形橋の建設または調査区中央に認められた攪乱坑により、L Iに混入したと考えられる。8は須恵器甕の口縁部資料である。櫛歯状工具による波状文が施文される。9は手捏ね成形のかわらけである。口縁部にはナデが施され、体部には指頭圧痕が明瞭に認められる。口縁部から見込みまでの深さがあるのが特徴的である。特徴より鎌倉時代の所産である。10は常滑焼のすり鉢である。内面の刻み目の間隔は2mmである。刻み目の条線が7~9本で1単位となっている。条線が細かいことから、近世以降の資料であると考えられる。

石 器 (図41)

図41-11は安山岩製の凹石である。直径13cm程の円礫を利用している。一部欠損が認められるが、欠損部は使用時に地面に置いて安定させるために意図的に破壊した可能性も考えられる。凹み部は3カ所認められた。

(三 浦)

第4章 調査⑧区の調査成果

第1節 調査経過と概要

調査⑧区は遺跡の北端に位置し、唯一、舟形橋の北方に存在する。調査前の現況は畑および山林で、ほぼ平坦な地形であったが、調査の結果、旧地形は、南部から中央部にかけては北東へ緩く下降する浅い沢状を呈し、北部は急斜面を介して平坦地ないしは浅い沢状であることが分かった。

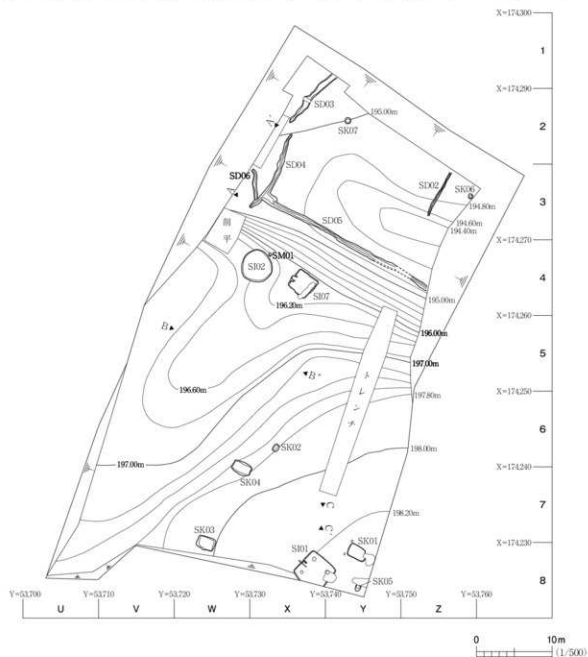


図42 調査⑧区遺構配置図

調査⑧区は、平成23年2月の事前協議の段階から調査優先箇所とされていたが、4月中は3月の大震災の影響もあり作業員の確保や重機・プレハブ等の手配が進展せず、現地においては立木や耕作物が存在し、排土置場等の条件も整っていなかった。5月に入ると、諸準備や条件整備が徐々に進み、23日に調査区の縄張りを行って、翌日から重機により表土剥ぎを開始した。6月6日からは作業員による遺構検出作業も開始したが、本格的な遺構検出作業となったのは作業員を増員した7月4日からで、遺物包含層の掘り込みも並行して進めた。7月下旬になると、調査区南半部で堅穴住居跡や土坑が検出され、北半部では遺物包含層の掘り込みが続いていた。

8月4・5日には福島県文化財センター白河館の「教職員発掘体験研修」が行われ、下旬には調

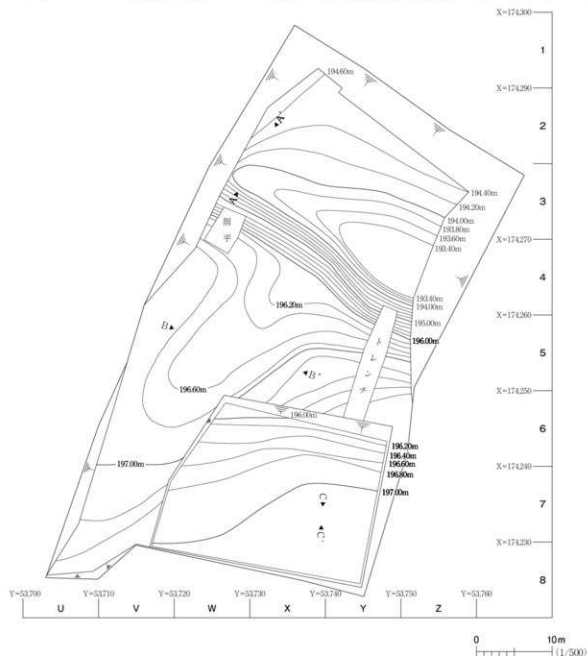


図43 調査⑧区地形図

査の主体は北半部に移行し、方形の区画溝跡が検出された。

9月上旬には上層の調査が終了し、9日にラジコンヘリコプター搭載カメラによる空中写真撮影を行った後、下層の調査に着手した。なお、南半部では、無遺物層のLⅢが厚く堆積していることから、重機でこの層を部分的に除去し、遺物が出た区域を中心にこの層を除去することにした。下旬には台風15号の影響による大雨で阿武隈川が増水し、調査区は水没した。調査区内すべての排水および流入した泥の除去に約1週間を費やすこととなったが、その後は調査が順調に進捗し、10月20日に調査を終了し、28日に現地を国土交通省へ引き渡した。なお、本調査区の調査はLⅢを境に大きく上層(2,900m)と下層(1,100m)に分けて調査した。

調査の結果、上層からは竪穴住居跡3軒、土坑7基、溝跡5条、土器埋設遺構1基の他、縄文時代後期から平安時代にかけての遺物包含層が検出され、下層からは縄文時代早期から中期にかけての遺物包含層が検出された。竪穴住居跡は縄文時代晩期1軒、奈良時代2軒で、土坑および溝跡は奈良・平安時代のもので推測される。なお、出土した遺物の点数は、縄文土器片2,884点、弥生土器片2点、土師器片613点、須恵器片81点、陶磁器片24点、土製品6点、鉄製品5点、銅製品1点、石器類149点、鉄滓9点である。

(能登谷)

第2節 基本土層

本調査区の基本土層の観察は、調査区北西部、中央部、南東部の3カ所において行った。調査区南半部は他の調査区と旧地形が似ていることから、中央部と南東部で観察した土層は、他の調査区の基本土層と対応可能である。これに対し、北西部で観察した土層は調査区北部の旧地形の落ち込みに何層にもわたって厚く堆積した土層である。そこで、北部の基本土層と中央～南部の基本土層を分けて記述する。

北部の基本土層

LⅠaは砂利を多量含む黄褐色土で、後世の盛土である。層厚は西側で約50～80cm、東側で最大120cmを測る。LⅠbはにぶい黄褐色砂質土で、LⅠaを盛土する前の旧表土である。炭化物が微量混入しており、上部が黒褐色を呈する部分もある。層厚は約40～50cmを測る。LⅠcは黒褐色砂質土で、中央～南部のLⅠに相当する。層厚は約70～80cmを測る。LⅠdはにぶい黄褐色砂質土で、締まりがなく、上面は起伏に富んでいる。LⅠeは暗褐色粘質土で、黒褐色土を多量混入している。層厚は約5～10cmを測る。

LⅡaは黒色土で、炭化物が微量混入し、縄文時代後・晩期の土器、土師器、須恵器を包含する。層厚は約15～20cmを測る。LⅡbはにぶい黄褐色砂質土で、炭化物が微量混入し、縄文時代後・晩期の土器、土師器、須恵器を包含する。層厚は約15～20cmを測る。LⅡcは黒褐色土で、白色粒が多量混入し、縄文時代後・晩期の土器、土師器、須恵器を包含する。層厚は約30cmを測る。LⅡdは炭化物が微量混入するにぶい黄褐色砂質土で、上面から古代の遺構が検出された。無遺物

層で、層厚は約20～30cmを測る。L II eは黒褐色土で、炭化物が微量混入し、縄文時代後・晩期の土器を包含する。層厚は約15～20cmを測る。L II fも黒褐色土で、にぶい黄褐色砂質土が混入している。層厚は20cm前後を測る。L II gは黒色土で、炭化物が微量、にぶい黄褐色砂質土が少量混入している。層厚は約10～30cmを測る。縄文時代後・晩期の土器を包含する。

L IIIは締まりのない褐色砂質土で、中央～南部のL IIIに相当する。

中央～南部の基本土層

L Iは暗褐色砂質土で、縄文時代後・晩期の土器、土師器、須恵器を包含する。北部のL I c、調査⑦区のL I bに相当する。L IIは黒褐色土で、炭化物が微量混入し、縄文時代後・晩期の土器、土師器、須恵器を包含する。層厚は約15～40cmを測る。調査⑦区のL IIに相当する。

L IIIは褐色砂ないしは黒褐色砂、暗褐色砂で、場所により色調が異なる。また、場所によっては締まりの度合いも異なる。調査⑦区のL IIIに相当する。

L IVは黒褐色土で固く締まり、層厚は約60cmを測る。縄文時代中期の土器を包含する。調査⑦

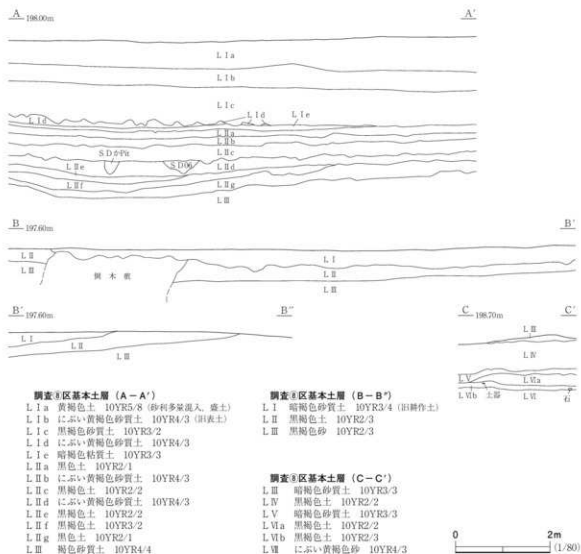


図44. 調査⑧区基本土層

区のLⅣa～cに相当する。LⅤは暗褐色砂質土で、黒褐色土が多量混入するが、西に行くにつれて黒褐色土の混入度合いが減り、黄褐色を呈する。層厚は約10～15cmを測る。調査⑦区のLⅤに相当する。LⅥは黒褐色土で、色調の微妙な違いによりa・b2層に分かれる。層厚はX7グリッドではLⅥaが約25cm、LⅥbが約10cmを測るが、西に行くにつれて薄くなっている。いずれも縄文時代早期の土器を包含し、それぞれ調査⑦区のLⅥa・bに相当する。

LⅦはにぶい黄褐色砂で、締まりは弱い。調査⑦区のLⅦに相当する。(能登谷)

第3節 竪穴住居跡

本調査区において、竪穴住居跡は3軒確認できた。1・2・7号住居跡である。1・7号住居跡が古代、2号住居跡が縄文時代に属する。1号住居跡は調査区南端の平坦面に位置していた。2・7号住居跡は北へ向かって緩やかに傾斜する比較的平坦な面に位置していた。1・7号住居跡は調査⑥区で検出した律令期の集落跡の最北端に位置する住居跡と考えられる。

1号住居跡 S I 01

遺 構 (図45・46, 写真39・40)

本遺構は調査区南東端のX・Y8グリッドに位置する竪穴住居跡である。標高198.20mの平坦面に立地する。検出時には、炭化物粒を含んだ方形の暗褐色土によって認められた。調査区南端は舟形橋架設工事の際に大きく攪乱を受け、部分的にLⅢが掘削された箇所が認められた。そのため、検出面はLⅢ面およびLⅣ面である。本遺構の一部は攪乱により破壊されている。また、住居跡の南西隅は舟形橋側に設けた1.5m幅の安全帯により、調査することはできなかった。グリッドピットと重複し、ピットが新しい。堆積土は1層のみ確認した。

本遺構は全形を把握できていないが、平面形はほぼ正方形になるものと想定できる。遺存する辺は約4m前後を測る。軸線方位はN50°Wを向く。カマドは北西壁の中央に構築されている。壁面は床面から緩やかに立ち上がる。壁面の遺存状況は悪く、10cm程度である。調査区壁で観察できた断面からは、最大で20cm程の立ち上がりが認められた。床面は平坦に造られている。貼床は認められなかった。床面上からはカマドとピット3基を検出した。

カマドは北西壁の中央に造られ、燃焼面と右袖および煙出し部の窪みが確認できた。左袖は住居跡検出時に設定したトレンチにより破壊してしまった。カマド内の堆積土として、2層確認した。ℓ1は住居廃棄後に堆積した層で、天井崩落土および流入土と考えられる。焼土塊が多量に混入する暗褐色土である。ℓ2はカマド袖構築土である。

カマドの規模は、トレンチから右袖までの幅は48cm、袖の先端から煙出し部の窪みまで88cmを測る。燃焼面の規模は遺存する焚口幅25cm、奥行き65cmである。燃焼部の底面は床面とほぼ平坦に造られており、奥壁で緩く立ち上がる。

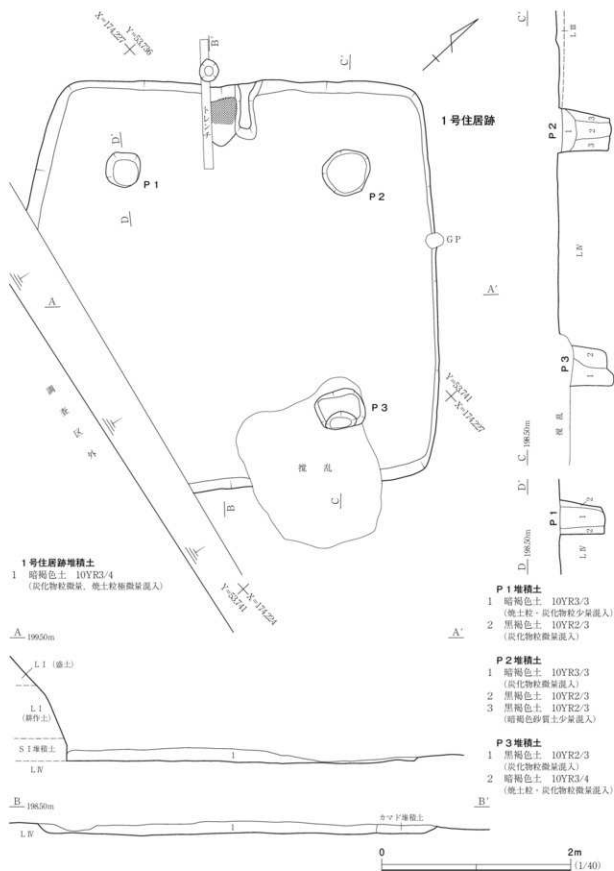


図45 1号住居跡

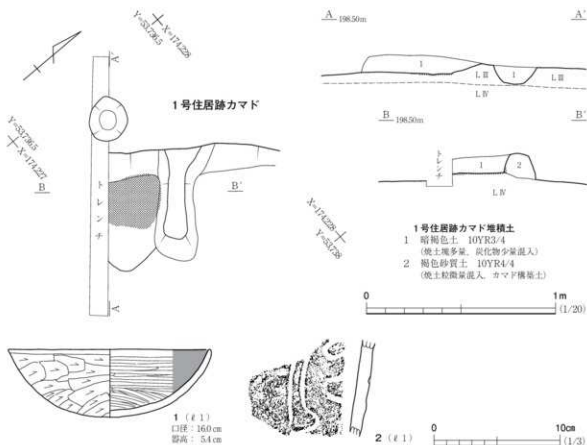


図46 1号住居跡カマド・出土遺物

ピットは住居跡の三隅から確認できた。カマドの左に位置するピットをP1と呼称し、時計回りにP2・P3と呼ぶことにした。P1の平面形は径37cm程の円形である。床面から底面までの深さは、47cmを測る。P2の平面形は不整な円形で、直径52cm程度である。床面から底面までの深さは、53cmを測る。P3の平面形は40×50cmの方形となる。P3周囲の床面は擾乱により遺存せず、検出面は床面より14cm程下がった位置である。検出面から底面までの深さは、45cmを測る。

遺物 (図46, 写真50)

遺物は堆積土中から縄文土器片3点、土師器片10点が出土した。内2点を図示した。

図46-1は南西隅から出土した土師器杯である。非ロクロ成形で、底部が丸底である。外面は体部から口縁部にかけてケズリを施している。口縁部付近には弱いヨコナデが認められる。ケズリの痕跡が良く確認できるため、弱いヨコナデはあえて図示せず、記述するにとどめた。2は縄文時代後期前葉の土器片である。深鉢形土器の胴部資料である。垂下する直線の沈線と波状沈線が観察できる。

まとめ

本遺構は一辺が4m程度の正方形と考えられる住居跡である。擾乱され、遺存状況は悪い。北西壁にカマドを有し、床面上から3基の柱穴を確認した。堆積土中からの出土遺物は非常に少ない。本住居跡の年代は、土師器杯の特徴から8世紀中葉～後葉頃と推測される。(三 浦)

2号住居跡 S I 02

遺 構 (図47, 写真41・42)

本遺構は、調査区中央部のX・W4グリッドに位置し、南部から続く北東向き緩斜面の端部に存在する。北東方は北部へ下る急斜面となっている。L IIを掘削中に遺物や礫を多く含む円形プランを検出した。北東には1号土器埋設遺構が隣接し、東方約2.5mからは7号住居跡が検出された。

平面形は楕円形で、規模は、上端で東西4.06m、南北4.3m、床面で東西3.7m、南北4mを測る。床面はほぼ平坦であるが、西から東へ緩く下降しており、西側はL IIIが露出して、締まりがない。なお、床面からは炉や柱穴は検出できなかった。周壁は直線的に外傾して立ち上がっており、西側の壁以外は立ち上がりが急である。壁高は8～23cmで、斜面下位側の北西壁が最も低く、斜面上位側の南壁が最も高く残存していた。遺構内堆積土は2層に分層され、いずれも自然流入土と推測される。ℓ 1からは多くの縄文土器片の他、礫も多く混入していた。

遺 物 (図48, 写真50～52)

北西部の床面上から縄文土器が正位の状態ですべて1点出土した他、ℓ 1から縄文土器片363点、石器1点が出土した。床面上の土器の他、特徴的な土器および石器を図示した。

図48-1は浅鉢形の縄文土器で、2～32は深鉢形の縄文土器である。1～3は口縁部付近に幅広い縄文帯が巡り、節の細かい縄文帯と無文帯が交互に配されている。2・3は同一個体で、口縁が小波状である。4～10は口縁部付近に幅の狭い縄文帯や無文帯が巡るもので、4・5には縄文は見られず、4は沈線間に刻目が充填され、5は口唇に貼付による小さな突起を持っている。6～9は口唇に沿って2段の縄文帯が巡り、10には無文帯と縄文帯が巡っている。10の無文帯には磨り消し前に深く施文された地文の一部が認められ、口唇には斜めの刻みが施されている。11は小突起を持ち、口縁が肥厚している。口縁には節の細かい縄文が施文され、突起の頂部には刻みが2個施されている。12～19は直線ないし曲線で区画文を描いて、内部に刻み目(12・13)ないしは縄文を充填している胴部破片である。13には上面に刻みを施した縦長の貼付文が2個並んで配され、その下位にも瘤状の貼付文が見られる。15では円形刺突を挟んだ三叉状の沈線が認められ、18では3つの区画文間に三叉文が配されている。19にはC字状の貼付文を背中合わせにしたX字状貼付文が施されている。なお、16～19には節の細かい縄文が充填されている。

20～26は櫛歯状工具による細い条線文が施されているものである。いずれも平口縁で、20・21は口縁部外端に刻みを施している。条線文は口縁部では口唇に沿って巡り、その下位では蛇行垂下している。27～30は全面に縄文が施文されたもので、31・32は無文のものである。31の口縁部がやや肥厚するのに対して、32は口縁部が薄く仕上げられている。また、31では横位の幅広のミガキが施され、32の口縁部付近の内外面はナデおよびミガキが施されている。

以上の縄文土器は、縄文時代後期後葉～晩期初頭にかけての土器である。

33は安山岩製の打製石斧である。両面には自然面が広く残存しており、側縁も基部および刃部

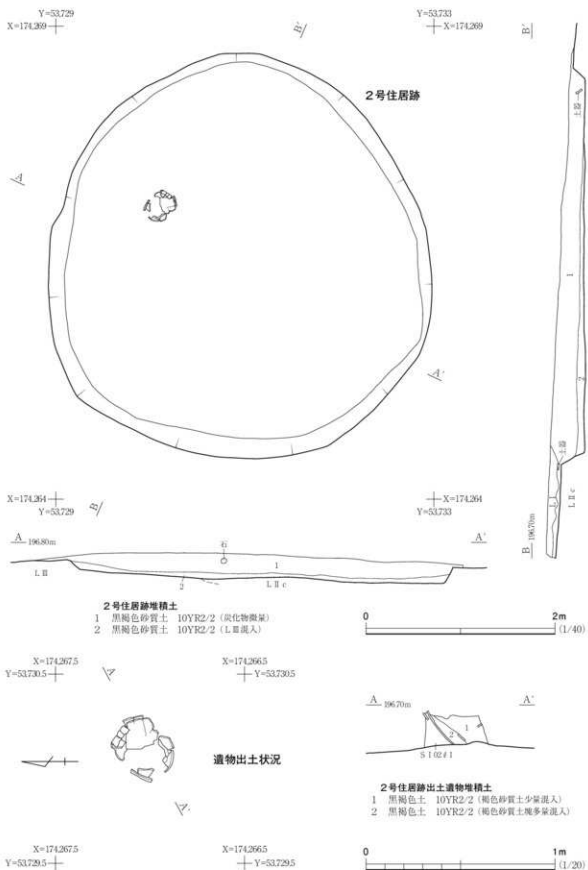


図47 2号住居跡

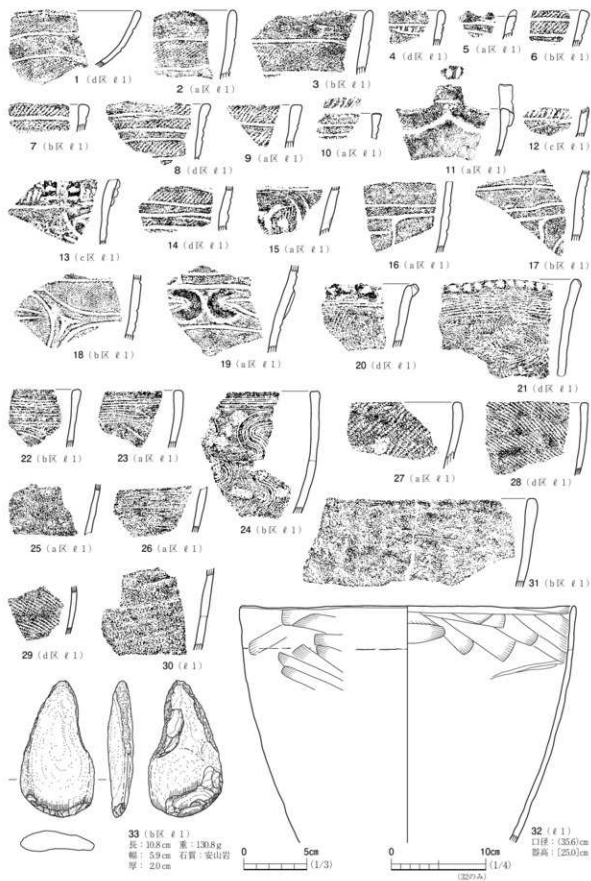


図48 2号住居跡出土遺物

以外は自然面をとどめている。基部は敲打によって成形され、刃部は両面からの押圧剥離によって成形されている。なお、刃部には線状の使用痕が認められる。

まとめ

本遺構は楕円形を呈する竪穴住居跡で、時期は出土遺物から縄文時代後期末葉～晩期初頭と推測される。(能登谷)

7号住居跡 S I 07

遺構 (図49・50, 写真43・44)

本遺構は、調査区中央部のX4グリッドに位置し、南部から続く北東向き緩斜面の端部に存在す

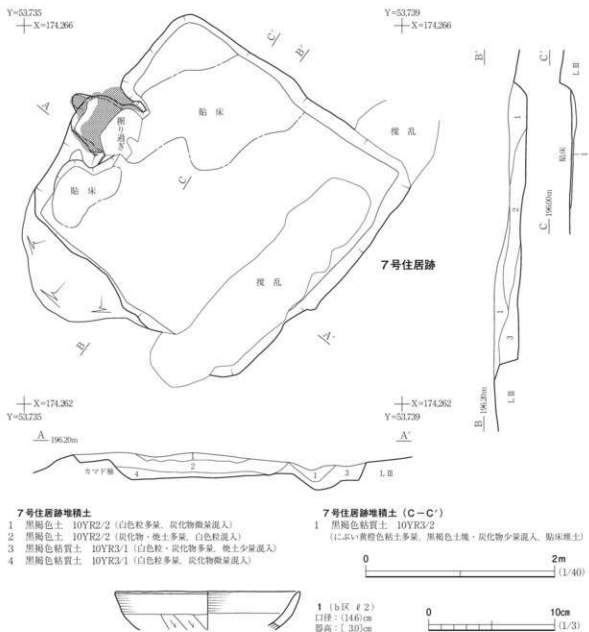


図49 7号住居跡・出土遺物

る。北東方は北部へ下る急斜面となっている。LⅢ上面において検出したが、南東部は排土運搬用の重機が通行した際の重量により窪んでいた。西方約2.5mに2号住居跡が近接する。

平面形は、北西-南東主軸の方角を呈し、上端における規模は北西-南東3.1m、北東-南西3mを測る。床面は、南東壁際が大きく窪んでいる以外はほぼ平坦で、固く締まっている。これは踏み締まりと推測されるが、その範囲を捉えることはできなかった。また、北端はLⅣ、他はLⅢおよび貼床であり、貼床の範囲は北西半にのみ認められる。床面の規模は一辺2.6~2.8mを測る。なお、柱穴は検出できなかった。

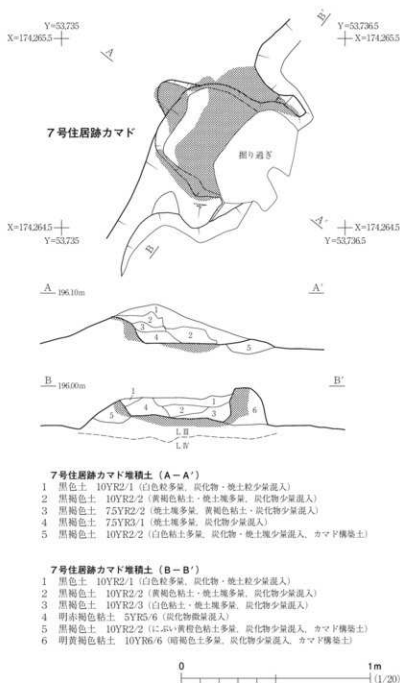


図50 7号住居跡カマド

周壁は、南西壁上部が崩落により欠失している以外は、直立ないしは直線的に急外傾して立ち上がっており、南西壁および南東壁はLⅢ、北西壁および北東壁は上部がLⅢ、下部はLⅣである。壁高は、上部が欠失している南西壁や重機の重みで沈降した北東部および南端以外では10~26cmを測る。

遺構内堆積土は貼床土も含めて5層に分層される。ℓ1~4は遺構廃絶後の堆積土で、ℓ2・4は北西方向から、ℓ3は南方から自然流入したものと推測される。貼床土は径3~7cmのぶい黄橙色粘土を多く含み、最大厚5cmを測る。

遺構内堆積土のℓ1~4を除去したところ、北西壁に敷設されたカマドが検出された。燃焼部と煙道部からなり、カマドの全長は約75cmを測る。

燃焼部は、奥壁が北西壁か

ら約15cm張り出して設けられており、両袖が直線的に住居内に張り出している。右袖は明黄褐色粘土により構築され、左袖はにぶい黄褐色粘土を多く含む土で構築されており、内壁の立ち上がりは、奥壁および焚口付近では外傾しているもの、それ以外の部分ではほぼ直立している。左袖の規模は、長さ55cm、幅25cm、高さ11cmを測り、右袖の規模は、長さ50cm、幅25cm、高さ18cmを測る。底面は、焚口から奥壁へ向かってほぼ水平であるが、左袖側から右袖側へは若干起伏があり、下降している。底面の奥行きは55cmで、幅は奥側で40cm、焚口側で50cmを測る。また、奥壁手前を除く底面と両袖内壁、煙道部下の奥壁は焼成化しており、焼成化は右袖では内壁から約10cm、他では約5cmのところまで及んでいる。

煙道は奥壁北寄りの地点から北西方向に延びているが、大部分は調査中の重機による作業や降雨の際の流水により削平され、長さ13cmしか残存していなかった。幅は24cm、深さは約8cmを測り、底面は薄く焼成化している。

カマド内堆積土は、A-A'とB-B'でそれぞれ4層に分層されたが、 $\ell 1$ はカマド廃絶後の堆積土で、それぞれの $\ell 2\sim 4$ には燃焼部の天井が崩落した際の焼土塊やカマド構築材の白色ないしは黄褐色の粘土が多量混入している。

遺物 (図49)

遺構内堆積土から縄文土器片13点、土師器片6点が出土した。この内、 $\ell 2$ から出土したのは、図示した土師器1点のみである。

図49-1は土師器杯で、口縁部は直線的に外傾し、体部下半は内湾気味に立ち上がっている。口縁部は内外面ともナデ調整され、外面の体部下半はヘラケズリされている。

まとめ

本遺構は方形を呈する小型の竪穴住居跡で、北西壁にカマドが付設されている。床面の踏み縮まりやカマド内面の焼成状況から、ある程度の使用期間が見込まれるが、柱穴は検出できなかった。遺構に伴う遺物が出土していないが、概ね、奈良～平安時代の住居跡と推測される。(能登谷)

第4節 土坑

本調査区において土坑を7基検出した。1～5号土坑は調査区南半のLⅢ上面の平坦面から検出した。6・7号土坑は調査区北半において、LⅢ除去後に検出した。堆積土中からの出土遺物が少なく、詳細な時期や機能を想定できる材料に乏しい。いずれも古代以降の所産と判断している。

1号土坑 SK01 (図51, 写真45)

本遺構はY8グリッドに位置する土坑である。調査区の南東端の平坦面に立地する。黒褐色砂質土の長方形として認識した。LⅡは後世の削平により欠層しているため、本遺構の検出面はLⅢ上面である。LⅢも15cm程度しか認められず、削平を受けた可能性がある。さらに、攪乱により東

壁の一部は破壊されている。長方形の掘り込みのすぐ西に2個の小穴が認められた。当初、グリッドピットとして認識していたが、小穴の位置や堆積土の特徴から、本遺構の付属施設として調査を進めた。

平面形は北西-南東に長軸を有する長方形である。長軸方向はN61°Wである。規模は212×168cmを測る。検出面から底面までの深さは17cmである。底面は平坦に造られている。壁面は垂直に立ち上がる。堆積土は2層確認した。ℓ1は黒褐色砂質土で流入土、ℓ2は暗褐色砂質土で壁面崩落土および流入土である。堆積状況から自然堆積と考えられる。

小穴の平面形は楕円形である。規模はP1が30×25cmで、P2が31×20cmである。検出面からの深さはP1が23cm、P2が24cmを測る。堆積土はいずれも暗褐色砂質土である。

本遺構の堆積土中からの出土遺物は4点である。すべて土師器片である。黒色処理された杯の体部破片が出土している。小破片のため図示しなかった。

本遺構は2個の柱穴が付属施設として付随する土坑である。土坑の東には攪乱があり、柱穴は検出できなかった。この柱穴は位置や規模から、簡易な小屋組みの柱跡であった可能性を考えている。本遺構の規模や平面形は、3・4号土坑に類似する。検出面から底面までの深さが大きく異なるが、LⅢまでも掘削を受けたために、検出面から底面までの深さが浅くなってしまったとも考えられる。

本遺構は出土遺物や周囲の遺構の分布状況から、古代以降の土坑と考えられる。 (三浦)

2号土坑 SK02 (図51・52, 写真45)

本遺構は調査区中央南側のX6グリッドに位置する。LⅢ上面で礫を含む暗褐色砂質土の不整な楕円形として検出した。他の遺構との重複関係は認められないが、南西側に4号土坑が近接する。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は南北100cm、東西80cmを測る。検出面から底面までの深さは、45cmを測る。壁は急な角度で立ち上がり、底面は凸凹している。

遺構内堆積土は礫を含む暗褐色砂質土1層で、人為堆積と判断した。礫の中には熱を受けたものもあり、砥石として使用されたのか表面に擦痕が認められるものもあった。

本遺構からは、土師器片2点、砥石1点が出土しているが、土師器については細片で図示できなかった。図52-1は砥石で、拳大の礫の表面に擦痕が認められる。

本遺構の所属時期については、土器が細片のため特定できないが、検出層位や周囲の遺構の分布状況などから、奈良~平安時代の所産と考えている。 (大河原)

3号土坑 SK03 (図51, 写真45)

調査区南側のW7・8グリッドに位置し、LⅢ上面で検出した。平面形は長方形を呈している。規模は南北180cm、東西240cmを測る。検出面から底面までの深さは70cm。壁は急な角度で立ち上がり、断面形は鍋底状を呈している。底面はほぼ平坦に造られているが、底面中央から西側にかけて緩やかに傾いている。

遺構内堆積土は3層に分けられ、レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積と判断した。本遺構から遺物は出土しなかった。

本遺構の所属時期については、土器が出土していないため特定できないが、遺構検出面や周囲の遺構の分布状況などから、奈良～平安時代の所産と判断した。(大河原)

4号土坑 SK04 (図51, 写真45)

本遺構は調査区中央南側のW・X6・7グリッドに位置し、褐色砂質土の方形状の広がりとしてLⅢ上面で検出した。本遺構と重複する遺構は認められないが、北東側に2号土坑が隣接する。

平面形は南北170cm、東西250cmの長方形状を呈し、深さは90cmを測る。壁はいずれも急な角度で立ち上がるが、東側では底面から壁のほぼ中央にかけてオーバーハングしている。断面形は鍋底状を呈している。

遺構内堆積土は3層に分けられ、いずれも壁際から流入し、レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。遺物は堆積土から土師器片3点、須恵器片1点が出土しているが、細片で図示できなかった。

本遺構の所属時期については、出土遺物が細片のため特定できないが、遺構検出面や周囲の遺構の分布状況などから、奈良～平安時代の所産と考えている。(大河原)

5号土坑 SK05 (図52, 写真45)

本遺構はY8グリッドに位置する土坑である。調査区の南東端の平坦面に立地する。炭化物を含んだ暗褐色砂質土の楕円形として認識した。検出面はLⅢ面である。本遺構の北半は擾乱により破壊されている。

平面形は北-南に長軸を有する楕円形である。主軸方向はN18°Eである。遺存規模は80×70cmを測る。検出面から底面までの深さは51cmである。底面は丸くボウル状になる。底面から壁面にかけては丸みを帯びながら立ち上がり、東西壁はやや急峻に立ち上がる。堆積土は4層確認した。ℓ1は暗褐色砂質土、ℓ2は炭化物を多量に含む黒褐色土でいずれも流入土である。ℓ3・4は底面に認められる層で、土質や堆積状況から人為堆積と判断した。堆積土からは炭化物のみ出土した。

本遺構からは時期を特定できる出土遺物はなかった。検出層位や遺構の分布状況から、古代以降の時期と推測できる。機能については不明である。(三浦)

6号土坑 SK06 (図52, 写真45)

本遺構は調査区北東部の平坦面に存在し、Z3グリッドに位置する。検出面はLⅡd上面である。西方3.3mに2号溝跡が近接する。

平面形は、上端では南北主軸の楕円形を呈するが、これは北西壁の上部が大きく崩落しているためで、本来は北東-南西主軸の楕円形を呈する。規模は、上端で長軸68cm、短軸58cm、底面で長

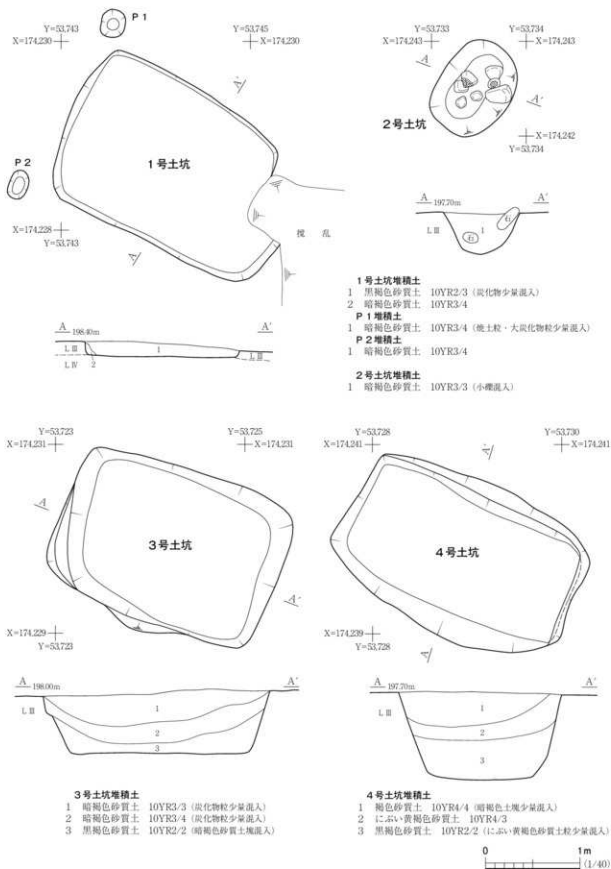


图51 1~4号土坑

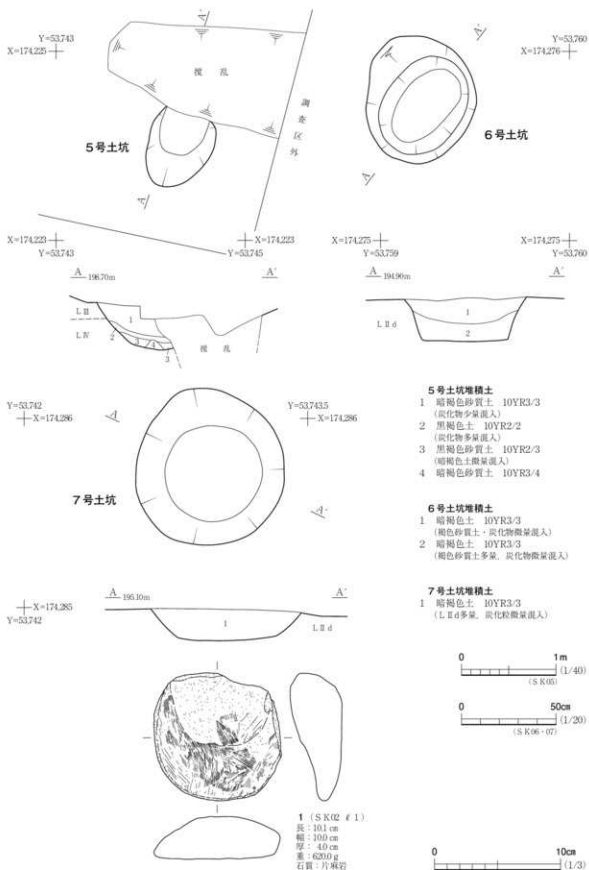


図52 5～7号土坑、2号土坑出土遺物

軸45cm、短軸26cm、深さ24cmを測る。周壁および底面はLⅡdで、周壁の立ち上がりは、直線的に急外傾しているが、上部7cm程はやや緩くなっている。この上部の立ち上がりがやや緩くなっているのは、機能中および廃棄後に壁面が崩落したためと推測される。底面は平坦である。遺構内堆積土は2層に分層され、いずれも自然堆積土と推測される。

遺構内から遺物は出土していないが、同一面から検出された溝跡と近い時期のものと考えられ、概ね、平安時代の遺構と推測される。(能登谷)

7号土坑 SK07 (図52, 写真45)

本遺構は調査区北部の平坦面に存在し、Y2グリッドに位置する。検出面はLⅡd上面である。北西約5mに3号溝跡が近接する。

平面形は円形で、規模は上端で径80cm前後、底面で径50cm前後、深さ17cmを測る。周壁および底面はLⅡdで、周壁の立ち上がりは、北東部で急であるが、他では緩やかで、直線的ないしは内湾気味に外傾している。底面は中央に向かって緩く窪んでいる。遺構内堆積土はLⅡdを多量混入する単層で、自然堆積土と推測される。

遺構内から遺物は出土していないが、同一面から検出された溝跡と近い時期のものと考えられ、概ね、平安時代の遺構と推測される。(能登谷)

第5節 溝 跡

調査区北部から溝跡が5条検出された。4号溝跡と5号溝跡は直交しており、接続はしていないものの、2号溝跡も5号溝跡と主軸が直交している。また、3号溝跡と4号溝跡はそれぞれを意識して構築されたものと推測される。これらの溝跡は、位置関係や検出状況、堆積土の状況が似ていることなどから、近似する時期のものとして推測され、4・5号溝跡より出土した須恵器から平安時代の遺構と推測される。

2号溝跡 SD02 (図53・54, 写真46・47)

本遺構は調査区北東部の平坦面に存在し、Z3グリッドに位置する。検出面はLⅡd上面で、東方約3.3mに6号土坑が近接している。

本遺構は北東-南西主軸の直線的な溝跡で、南西端が若干南へ折れ、北東端は調査区外に伸びている。規模は、長さ6.44m、上端幅20～44cm、深さ15～19cmを測る。遺構内堆積土は2層に分層され、いずれも自然流入土と推測される。ℓ2にはLⅡdの褐色砂質土が多量混入している。側壁は直線的に急角度で立ち上がっている。底面は若干の起伏が認められるが、北半はほぼ水平に近く、中央部から南は緩く下降している。北端と南端の比高差は25cmを測る。なお、遺構内から遺物は出土していない。(能登谷)



図53 2～6号溝跡

3号溝跡 SD 03 (図53・54, 写真46・47)

本遺構は調査区北端の平坦面に存在し、X1・2、Y1グリッドに位置する。検出面はLⅡd上面で、南方約13mには主軸が若干異なる4号溝跡が近接する。

本遺構は北東-南西主軸の直線的な溝跡であるが、中央部は屈折し、北東端は調査区外に延びる。規模は、長さ8.5m、上端幅40～100cm、深さ10～27cmを測る。遺構内堆積土は2層に分層され、いずれも自然流入土と推測される。ℓ1には径0.5～1cmのLⅡd塊が少量混入し、ℓ2には径1～2cmのLⅡd塊が多量混入している。側壁は内湾気味ないしは直線的に緩く立ち上がっている。底面は長軸方向に波打っており、北東部には大きな窪みが存在する。また、北東端と南西端の比高差はないが、中央部は両端より低くなっている。なお、遺構内出土遺物はない。(能登谷)

4号溝跡 SD 04 (図53～55, 写真46・48)

本遺構は調査区北部の平坦面に存在し、X2・3グリッドに位置する。検出面はLⅡd上面で、北方約13mには若干主軸が異なる3号溝跡が近接し、南西部北壁上部からは6号溝跡が北方に延びている。この部分における底面の比高差は27cmを測る。また、その地点の東方からは主軸がほ

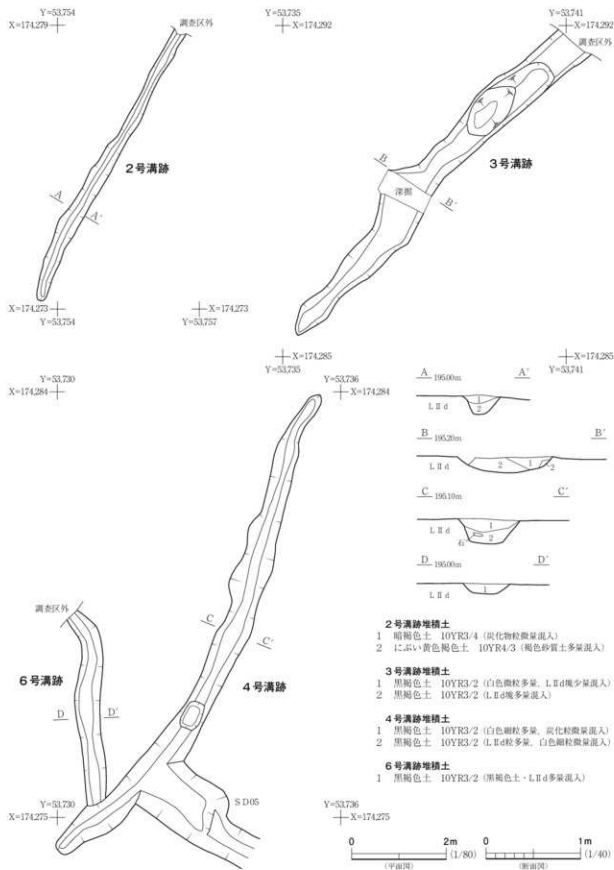


図54 2～4・6号溝跡

は直交する5号溝跡が南東方向に向かって延びている。それぞれの接続部分における堆積土の状況を観察すると、重複関係が認められないことから、これらは一連のものと推測される。

本遺構は北東から南西方向に緩く弧状に延びる溝跡で、規模は、長さ11.48m、上端幅30～70cm、深さ13～36cmを測る。遺構内堆積土は2層に分層され、いずれも自然流入土と推測される。 $\varnothing 2$ には径1～5mmのL II d粒が多量混入している。側壁は直線的ないしは内湾気味に急角度で立ち上がっている。底面は大きな起伏は認められないが、5・6号溝跡との接続地点付近に向かって北東端からは緩く下降し、南西端からは急下降している。5・6号溝跡との接続地点付近と北東端との比高差は約30cm、南西端との差は約15cmを測る。また、5号溝跡との接続地点の北東には深さ18cmのピット上の落ち込みがある。

遺構内堆積土から縄文土器片17点、土師器片24点、須恵器片2点、剥片1点が出土し、その内、須恵器片2点を図示した。図55-1は須恵器甕の口縁部で、頸部は外反して立ち上がり、口縁端部は面取りされて直立し、両端は鋭く引き出されている。2は須恵器鉢の口縁部から体部にかけての資料で、口縁端部は低い山形を呈し、体部にはタタキ目が認められる。(能登谷)

5号溝跡 S D 05 (図53・55, 写真46・48)

本遺構は調査区中央部と北部を隔する急斜面の裾に沿って存在し、X・Y3、Y・Z4グリッドに位置する。検出面はL II d上面で、北西端は4号溝跡とはほぼ直交して接続している。

本遺構は北西-南東主軸の直線的な溝跡で、南東端は調査区外に延びている。規模は、長さ24.6m、幅は北西端から1.5m程は1.2～1.3mで、その南東ではほぼ70cmである。なお、遺構検出の際に上部を削り過ぎた中央部での幅は40cm、その南東での幅は50cmを測る部分もある。深さは北西端では40cm、その南東では約20～35cmを測る。遺構内堆積土は2層に分層され、いずれも自然流入土と推測される。遺構が長大なことから、混入物の様相は一様ではなく、いずれもL II dを混入するが、 $\varnothing 1$ では粒状で、 $\varnothing 2$ では径1～2cmの塊が混入し、部分的に多量混入する。側壁は内湾気味ないしは直線的に立ち上がり、立ち上がりの角度が急な部分と緩やかな部分がある。断面形は概ね逆台形であるが、中央部ではV字型を呈している。底面は北西端から1.5m程の上端幅が広い部分の底面とその南東部分の底面には段差があり、その比高差は約16cmを測る。また、北西端から1.5m程の底面はほぼ平坦であるが、それより南東の底面は若干起伏が認められ、中央部に向かってそれぞれの端部から緩く下降している。因みに、北西方向からは約26cm下降し、南東方向からは約12cm下降している。

図55-3は遺構内堆積土から出土した唯一の須恵器片である。須恵器鉢の口縁部で、口縁端部は低い山形を呈している。4号溝跡から出土した同図2と同一個体である。(能登谷)

6号溝跡 S D 06 (図53・54, 写真46・48)

本遺構は調査区北部の平坦面に存在し、X3グリッドに位置する。検出面はL II d上面で、南

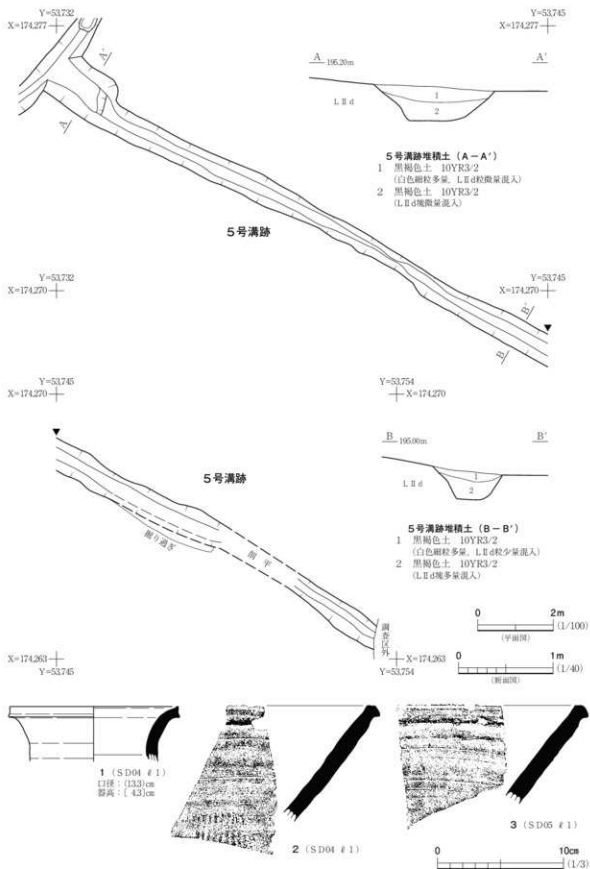


図55 5号溝跡、4・5号溝跡出土遺物

端部は4号溝跡の南西部北壁上部と接続しており、この部分における底面は4号溝跡の底面より27cm上位に存在する。

本遺構はほぼ南北主軸の直線的な溝跡で、北端部は北西方向に屈曲した後、調査区外に延びている。規模は、長さ4.1m、幅30～52cm、深さ3～11cmを測る。遺構内堆積土は黒褐色土の単層で、L II dを多量混入している。側壁は内湾気味に緩く立ち上がっており、底面はほぼ平坦であるが、中央部に向かって緩く下降しており、北端から約8cm、南端から12cm下降している。なお、遺構内から遺物は出土していない。(能登谷)

第6節 土器埋設遺構

1号土器埋設遺構 SM01 (図56, 写真49・50)

本遺構は調査区中央部から北部へ下る急斜面の肩部に存在し、X4グリッドに位置する。2号住居跡の北東のL IIを掘削中に土器片がほぼ円形に巡るプランを検出した。

掘形の中に土器を正位に埋設しているが、土器の遺存状態は悪かった。土器内堆積土は錆化した極暗赤褐色土が多量混入した締まりのある黒褐色土で、埋設土器の破片以外に遺物は出土していない。掘形は、東西41cm、南北48cm、深さ24cmの平面不整な楕円形を呈している。

埋設されていた土器(図56-1)は、口縁部が緩く内湾する無文の深鉢形土器で、体部上半は直線的に立ち上がり、体部下半はやや内湾気味に立ち上がっている。なお、外面は口縁部付近では横方向に、体部では縦位ないしは斜位に磨かれており、内面下部には煤が付着している。器壁は上半で5～6mm、下半で約8mmと薄い。(能登谷)

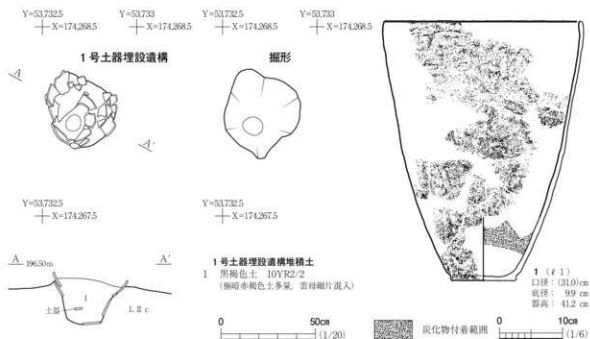


図56 1号土器埋設遺構・出土遺物

第7節 遺物包含層

層序と分布

本調査区ではLⅠ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴに遺物が包含される。その内、LⅠの上部は盛土や耕作土であり、重機で取り除いているため、同層下部から遺物を採集した。各層から出土した遺物の種類と量は、LⅠ・Ⅱは縄文土器片2,169点、弥生土器片2点、土師器片558点、須恵器片76点、陶磁器片24点、石器6点、土製品6点、LⅣは縄文土器片31点、石器2点、LⅤは縄文土器片85点、石器5点であり、LⅠ・Ⅱには縄文時代後期前葉～中世の土器が包含され、LⅣには縄文時代前期～中期末葉の土器、LⅤには縄文時代早期中葉の土器が包含されている。

LⅠ・Ⅱにおいて、縄文土器片は調査区内の広い範囲から出土しているが、特に、南西部のV・Wグリッドから北部のW3～Y4グリッドにかけて多く出土しており、中央部と北部の境にある急斜面付近のW3・4グリッドおよびX3・4グリッドからは全体の約75%の土器が出土している。また、同層において、古代の土器(土師器片・須恵器片)も調査区内の広い範囲から出土しているが、この急斜面およびその北部の平坦地から全体の約74%が出土している。

LⅣでは、縄文土器片がX7グリッドを中心に多く出土しており、LⅤではW・X7グリッドを中心に多く出土している。

土器・土製品 (図57～62, 写真53～58)

縄文土器 (図57～60, 写真53～58)

図57-1～21は、W7・8グリッドおよびX7・8グリッドのLⅤから出土した縄文時代早期中葉の土器である。器面には縄文が施されず、沈線や押しき文が施されている。1は口縁が波状となる小型の土器で、全面に直線的な横走沈線が施され、波頂部下には弧状の沈線も見られる。2は平口縁、3は波状口縁で、それぞれ、口縁部下に沈線が施されている。4～10は沈線のみが認められる体部破片で、4～7には横走する沈線、8・9には斜行する沈線、10には縦走する沈線が施されている。5には半截竹管の凹面による2本同時施文の沈線と単沈線が併存し、7にも半截竹管の凹面による2本同時施文の沈線が見られる。10の沈線は他の資料に比べて太いものである。11～18は横走する沈線と連続刺突文を持つものである。連続刺突文は沈線間に施され、工具の凸面によるもの(11～16)と凹面によるもの(17・18)がある。また、16～18には2本一対の弧線文も見られる。19は器面に円形の瘤を持ち、細かいV字状の文様も認められる。20・21は底部資料で、尖底である。

図57-22～26は、X・Y7グリッドのLⅣから出土した土器で、22は縄文時代前期、23～26は中期の土器である。22には横位回転の縄文が施されている。23・24は中期前葉の土器で、縦位回転の縄文が施されている。25は中期末葉の土器で、口縁部下に低い稜を巡らせて、無文の口縁

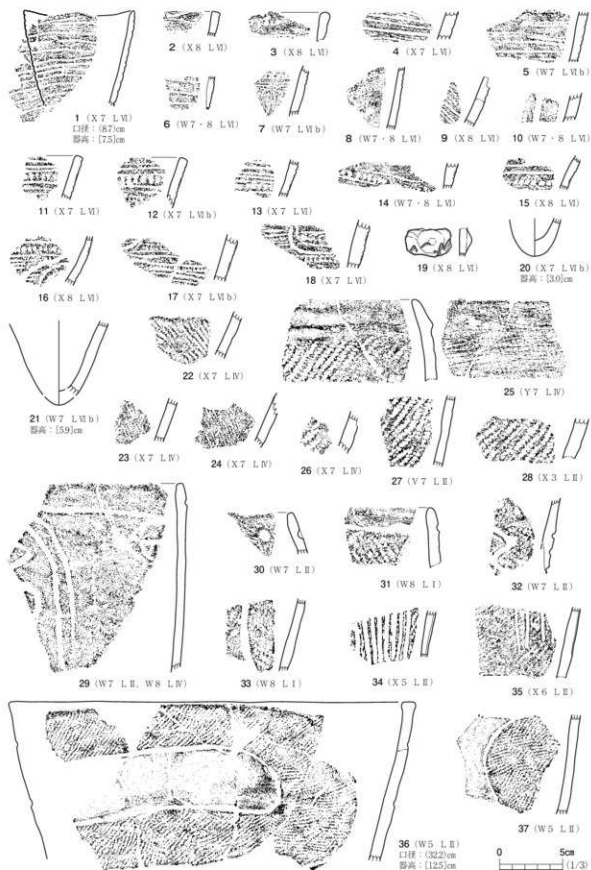


図57 調査⑧区遺物包含層出土遺物(1)

部と縄文を施した体部を画している。26の縄文は25と似ている。なお、27・28はLⅡから出土した土器であるが、縄文時代中期末葉の土器であろう。

図57-29-37、図58・59、図60-1-17にはLⅠ・Ⅱから出土した縄文時代後・晩期の土器を図示した。

図57-29-35は、縄文時代後期前葉の土器である。29は口唇に沿って沈線が巡り、縦位の2条の弧線や蛇行沈線が見られる。30は口縁直下に円孔を持ち、31は口唇に沿った沈線によって無文の口縁部と縄文の体部を画している。32-35はいずれも体部に縄文を施した後に縦走する沈線を引いており、32は蛇行沈線文、33は弧線文、34・35は平行ないしは多条沈線である。

図57-36・37は縄文時代後期中葉の土器である。36・37は同一個体で、沈線により区画文を描画し、区画内に方向を変えながら縄文を充填し、無文部と対置している。また、口縁部は面取りされ、内端は内側に張り出している。

図58・59、図60-1-17は縄文時代後期後葉～晩期前葉にかけての土器である。

図58-1-4は口縁部に貼付瘤を持つものである。1は2段の縄文帯の間の沈線上に小さな瘤が貼り付けられ、2-4は口縁直下に2個一対の瘤が貼り付けられている。

同図5-18は口唇に沿って沈線を巡らし、口縁部に縄文帯および無文帯を配すもので、体部に弧線による区画文を持つものもある。10の口唇には連続して刻み目が施され、11・17では横走沈線から弧線が垂下している。14-16は口縁部に沈線で区画された幅の狭い縄文帯が巡り、それより下位は広い無文帯となっている。18は沈線で区画された幅広の口縁部を持ち、口縁部・体部とも無文である。

同図19-22は山形突起を持つもので、頂部には刻み目や円形刺突(20)が施され、19・20では口縁部を巡る沈線から突起の頂部に向けて沈線が引かれ、22では突起部に三叉文が描かれている。それより下位では、直線や弧線による区画内に節の細かい縄文の他に刻み目(20)や短沈線(21)を充填して、無文部と対置している。

同図23・24は口縁部に連続した刻み目が施されたもの、25-29は沈線区画内には刻み目が充填されているものである。23・24の体部には弧線による区画文や入組状の文様が描かれている。27-32は瘤等の貼付文が施されるものである。27には沈線による入り組み状の区画文が描画され、入組部に瘤を貼り付けている。28・29の瘤は縦長で、28の瘤は上面に刻みを有する。30はX字状の貼付文を持ち、31・32はボタン状の貼付文を持つ。

同図33-39は直線や弧線による区画内に節の細かい縄文を充填して無文部と対置している体部破片である。37の括れ部には縄文を充填した区画内に横長の刺突が見られる。38の括れ部には隆帯が巡り、その上に縄文を施文した後に横長の刺突を連続して施している。その刺突間は瘤状で、縦位の刻みを有する。

同図40・41は体部下半の資料で、横走沈線を境に縄文部と無文部を対置させている。41は縄文時代後期中葉の土器の可能性もある。



図58 調査⑧区遺物包含層出土遺物(2)

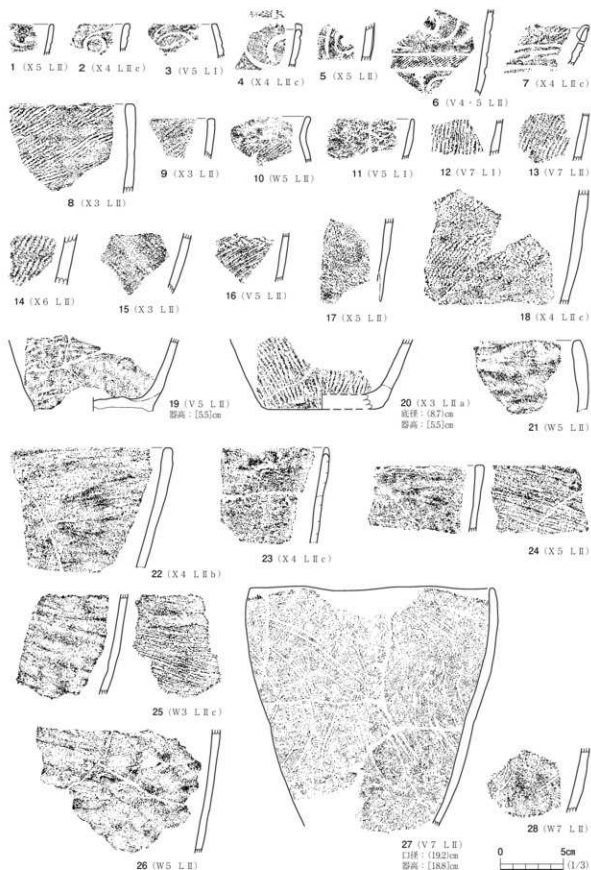


图59 調査⑧区遺物包含層出土遺物(3)

図59-1~4は弧線により入組文などが描かれた薄手の口縁部資料である。3は注口土器であろうか。4は山形突起を持ち、頂部には刻みが施されている。5・6は沈線による円文を持つもので、5は円文内にさらに円形刺突を施し、6は円文内を無文としている。7は浅鉢形土器であろうか。口縁部に縄文帯、その下位には平行沈線間にクランク状の沈線を配した文様帯を持ち、内面の口縁部下には稜が巡っている。また、口縁部には頂部に刻み目を持つ小突起が2個あり、この突起は内面において弧状の粘土紐で結ばれており、粘土紐下部には貫通孔がある。

以上の土器の内、図58-1~4・23~32は縄文時代後期後葉の土器で、同図19~22・37・38、図59-1~7は縄文時代晩期前葉の土器であり、他の土器は縄文時代後期末葉の土器と推測される。

図59-8~28、図60-1~11は粗製土器である。図59-8~20は地文のみの土器で、斜縄文のものが多いが、横位回転の網目状捺糸文(11)や縦位の捺糸文(12・13・17・20)、結束縄文(16)などもある。10は波状口縁で、頸部で屈曲し、口縁部は外傾して無文である。

図59-21~26は無文の土器である。23の外面には粘土積み上げ痕が認められ、他の資料では横位のミガキが認められる。また、24・25の内面には工具によるナデ痕が認められる。

図59-27・28、図60-1~11はほぼ全面に櫛歯状工具による条線文を施した土器である。いずれも平口縁であるが、口縁部に内湾しながら立ち上がるものと直線的に立ち上がるものがあり、後者の図60-5~8は口縁外端を肥厚させ、その上面に連続の刻みを施している。条線には、条間が狭いものと広いもの(図59-27・28)があり、前者は条が細く、1単位当たりが多条となるのに対して、後者は条が太く、1単位当たりの条数も少ない。条間が狭い条線文は口縁部を巡り、体部では蛇行垂下しているが、図60-3では体部にも口縁部と平行に条線を巡らせている。また、条間が広い条線文が施文された図59-27では、条線が口縁部を巡り、体部には2~4本を1単位とした蛇行ないしは弧状の文様が不規則に描かれている。

図60-12~16は土器の底部破片である。13の底面には網代圧痕があり、14~16には直立する高台が付いている。同図17は注口土器の注口部で、注口の直下には二袋状突起が付されている。

弥生土器 (図60)

図60-18・19はⅡから出土した弥生時代中期の土器である。18には沈線による三角形の区画文が描画され、区画内に筋の細かい縄文を充填して無文部と対置している。19では沈線による方形区画文が描画され、区画外に筋の細かい縄文を施文して無文部と対置している。

土器 (図60・61、写真58)

図60-20・21はロクロ成形の杯である。20は底面周縁から体部下半が手持ちヘラケズリされ、内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。底面中央には回転糸切り痕が認められる。21は体部下端が回転ヘラケズリされ、内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。底面切り離しは回転糸切りで、X字状の線刻を持つ。同図22はロクロ成形の小皿である。底部付近は外反気味に立ち上がり、体部上半は直線的に外傾している。底面切り離しは回転糸切りである。

同図23~25は墨書土器である。23は杯の体部下半に、24・25は杯の底面に墨書されているが、

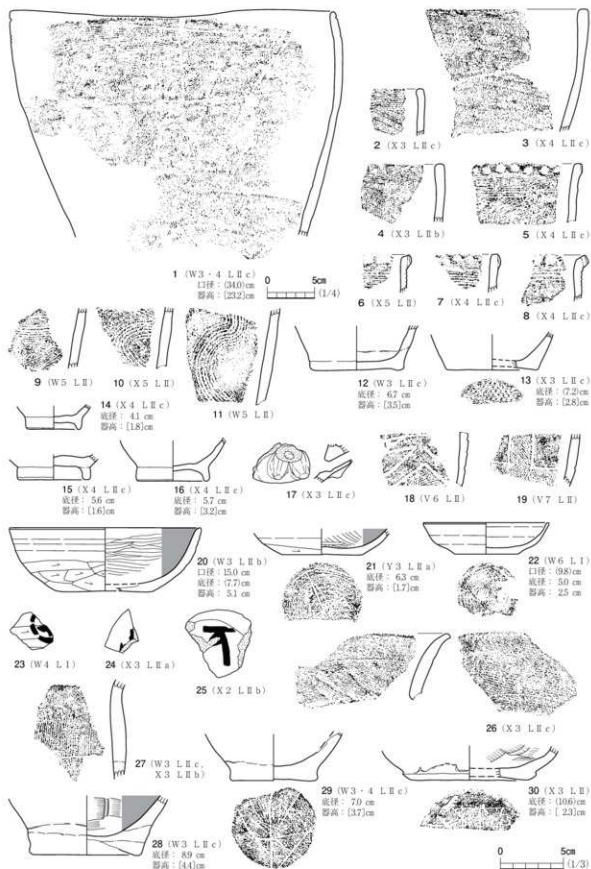


图60 調査⑧区遺物包含層出土遺物(4)

判読不明である。

同図26～30、図61-1・2は非ロクロ成形の甕である。26は端部が面取りされた口縁部で、外面は斜位に、内面は横位にハケメ調整されており、外面には先端が平坦な工具による浅い沈線が口唇と並行して巡っている。27は口縁部から体部で、体部はハケメ調整されている。28～30は底部で、28・30の内面はヘラナデ調整され、29の底面には木葉痕、30の底面には木葉痕の他に格子目状の線刻が認められる。図61-1は底部付近である。体部は内外面とも化粧粘土を塗布しており、部分的に化粧粘土が剥落している。体部外面はヘラケズリおよびハケメ調整後にヘラミガキされ、内面はヘラナデ調整されている。底面はヘラケズリされ、上げ底となっている。2は長胴甕で、体部が内湾して立ち上がり、口縁部は緩く外反している。口縁部は両面とも横方向にナデ調整され、体部は外面が縦方向にヘラケズリ調整され、内面は横方向にヘラナデ調整されている。

図61-3・4はロクロ成形の甕である。3は長胴甕で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は屈曲して端部が面取りされている。体部下半には調整が施されており、外面には縦方向のヘラケズリの他、下端に横方向のヘラケズリが認められ、内面は縦方向にヘラナデ調整されている。4は球胴甕と推測され、体部は内湾して立ち上がっている。底面の切り離しは回転糸切りである。

須 惠 器 (図61・62)

図61-5は灰白色を呈する高台付杯で、高台が「八」字状に踏ん張り、杯部の底面は回転ヘラケズリされている。同図6～8はそれぞれ大きさが異なる長頸甕である。6・7には断面三角形の高台が付き、8には断面箱形の高台が付いている。また、7・8では体部下半がヘラケズリされている。同図9は小型の短頸甕で、口縁部が直立し、肩はなで肩である。

図61-10～14、図62-1～7は甕で、図61-10は櫛描きの波状文が横位に展開する口縁部破片である。同図11～14、図62-1・2・4～6は外面にタタキメが認められる体部破片で、2・4・5の内面には当具痕が認められ、6の内面には櫛状工具によるナデの痕跡が認められる。なお、図61-13・14は外面がにぶい赤褐色、断面が橙色を呈し、他の須惠器とは色調が異なる。図62-3はロクロ回転による調整を施した小型甕である。また、同図5・7は断面が灰色を呈し、胎土に白色微粒を多く含んでいる。7の内面にはナデ痕が認められる。

青 磁 (図62)

図62-8は中国龍泉窯産の青磁碗である。体部に文様はなく、口縁部が横に張り出している。

土 製 品 (図62)

図62-9は鼓型の耳栓あるいは土器の蓋の摘みと推測される。10は環状の耳飾りで、表面には竹管による円形刺突文と細沈線による三叉文が描かれている。11は先細りの製品で、断面は円形で、先端に切れ込みを持つ。12は土鈴で、紐部は円錐形を呈し、球形の体部との境が明確ではない。紐部には径3mmの貫通孔が穿たれ、体部下端にはこの孔と軸を直交する鈴口が切られている。また、体部の内面は径2cmで平滑である。13・14は羽口である。13は14に比べて肉薄で、吸気部がやや広がるものである。外面は被熱により先端部側から黄灰色、浅黄橙色に変化している。器厚は2cm

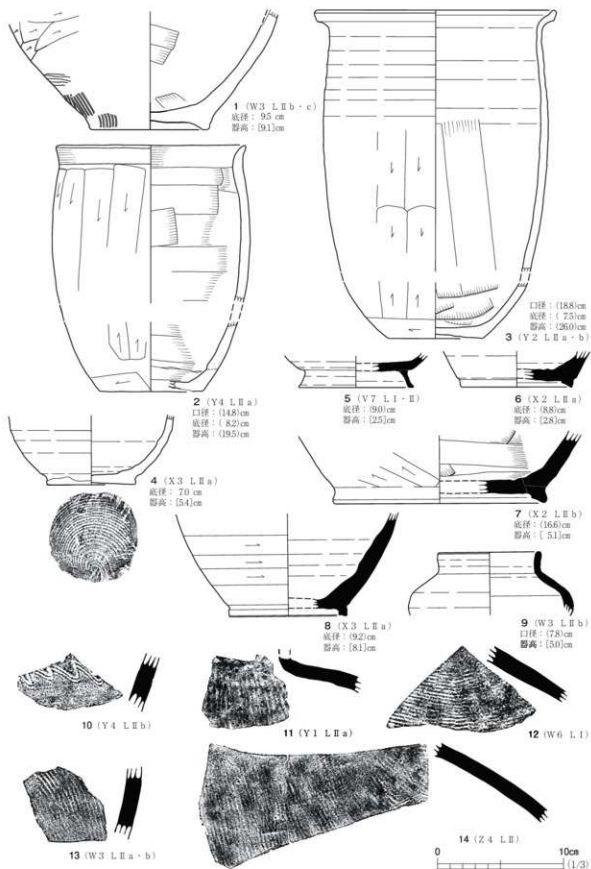


图61 調査⑧区遺物包含層出土遺物 (5)

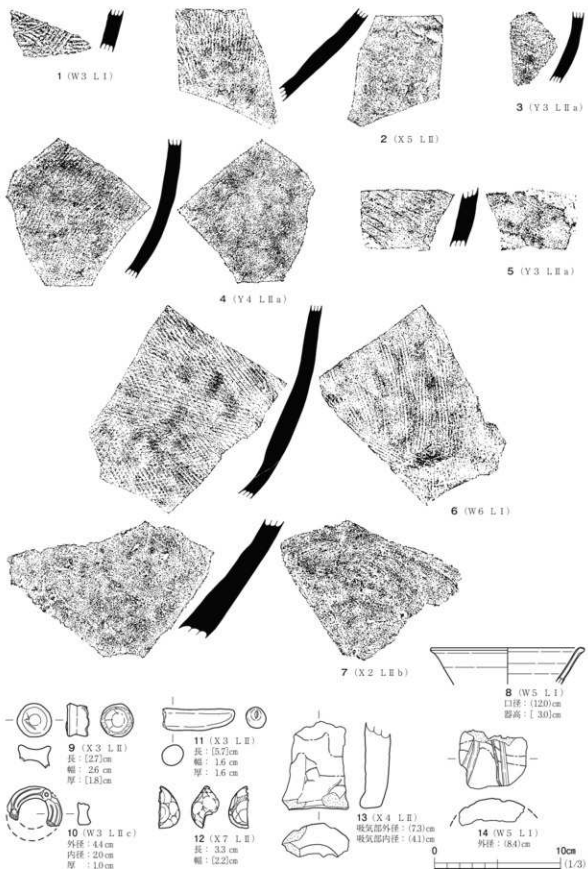


図62 調査⑧区遺物包含層出土遺物(6)

を測る。14は肉厚で、外面に縦方向の圧痕を持つものである。外面は被熱により先端部側から褐色、浅黄色に変化している。外径は8.4cmと推定される。

石 器 (図63・64, 写真59)

図63-1は珪質頁岩製の凹基無茎鏃で、両面に調整剥離が施されているが、節理面があることから、きれいに剥離していない。

2は珪質頁岩製の両面調整石器で、剥離末端はステップエンド気味である。左側縁はランダムに潰れている。背面右上縁の調整が一番新しいため、再加工品の可能性もある。

3は珪質頁岩製の孫削器で、背面のみに調整剥離が施されている。末端に急斜の整形剥離を加え、両側縁には鋸歯状に調整剥離を加えている。基部には素材剥片を取り出した際の打面が残存し、背面下部には凹面が残存する。

4は大型の縦長剥片で、基部には打面および自然面が残存し、先端側は折損している。石質は珪質頁岩である。

5は分銅型の打製石斧で、刃部は弧状を呈している。背面には自然面が残存し、刃縁と両側縁の抉れ部は磨耗している。石質は安山岩である。

6は撥型の打製石斧で、基部は長方形、刃部は弧状を呈している。片面のみからの押圧により刃部が作り出されている。石質は安山岩である。

7は剥片素材の打製石斧で、基部を折損している。側縁には自然面が残存し、刃部にバルブの形状を残している。刃部の作り出しは主要剥離面のみからの押圧による。石質は安山岩である。

8は輝石安山岩製の礫器で、扁平な方形の礫の2側縁に両面から加工を施している。

図64-1は断面三角形の礫を素材とした磨石で、長い3辺の稜の部分は磨耗した狭い平坦面となっている。石質は安山岩である。

2・3・5は凹石である。2はやや厚みのある楕円形の礫を素材とし、両面の中央部には敲打による窪みがある。3は扁平な楕円形の礫を素材としている。片面に敲打による径5～10mmの窪みが線状に並んでいる。5は球形の礫を素材とし、径2cmの窪みが2個と径5mm前後の窪みが認められる。いずれも石質は安山岩である。

4は変質流紋岩製の砥石である。断面方形で、4面とも使用されている。古代以降の資料である。

6は扁平な大型礫を利用した石皿で、広く磨耗面が認められる。石質は安山岩である。

以上の石器の内、図63-6・7、図64-2・3・5はL IまたはL IIから出土していることから、概ね、縄文時代後期～晩期に帰属するものと推測され、図63-5、図64-6はL IVから出土していることから縄文時代前期～中期末葉、図63-1～4、図64-1はL VIから出土していることから縄文時代早期中葉に帰属するものと推測される。なお、図63-8は調査区北部のL II下部から出土したが、縄文時代早期中葉に帰属するものと推測される。

(能登谷)

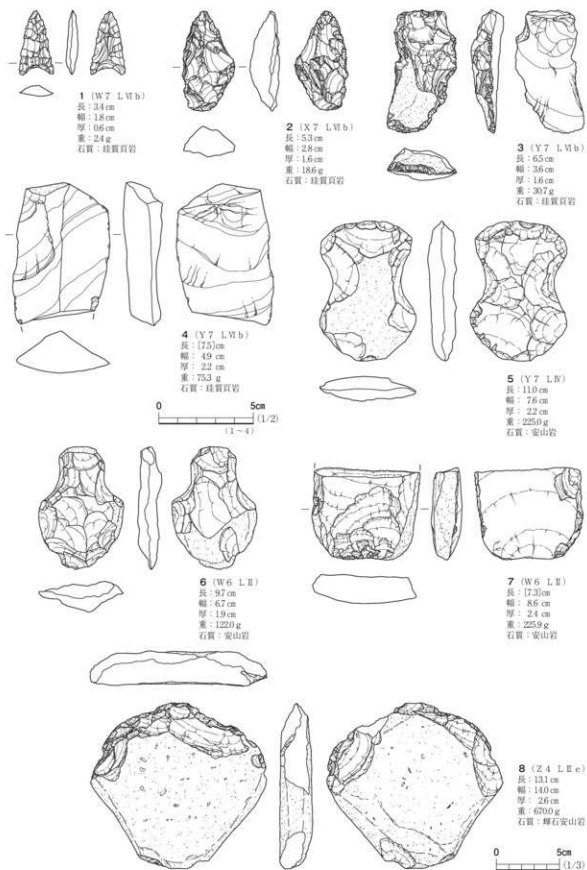


図63 調査⑧区遺物包含層出土遺物 (7)

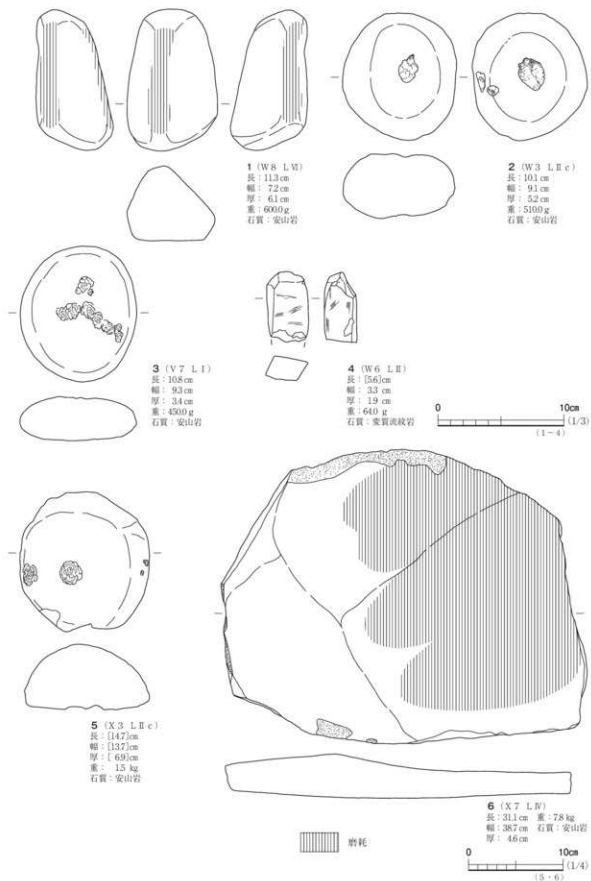


图64 調査⑧区遺物包含層出土遺物 (8)

第5章 ま と め

本章では、前章までにおいて詳述してきたトロミ遺跡における各調査区の調査成果を受けて、現段階におけるまとめを記すことにする。

本遺跡は、阿武隈川東岸に形成された自然堤防上に存在する南北に長い遺跡で、築堤工事は本遺跡のはは中央部を南北に縦貫する形で計画された。その内、今回、調査・報告したのは、遺跡北部の調査⑦・⑧区、中央部の調査⑤上区、南部の調査②区である。各調査区とも遺構面が上下に重なって複数確認され、調査区内の堆積土の状況や検出された遺構・遺物の時期・種類等は一律とは言えない状況であった。

まず始めに、各調査区の概要を見てみると、調査②区では縄文時代の堅穴住居跡・土坑・遺物包含層、奈良～平安時代の堅穴住居跡・土坑・溝跡が検出され、調査⑤上区では縄文時代の土坑、奈良～平安時代の溝跡が検出された。また、調査⑦区では縄文時代の遺物包含層、奈良～平安時代の溝跡が検出され、調査⑧区では縄文時代および奈良時代の堅穴住居跡、平安時代の溝跡、縄文時代の遺物包含層が検出された。

次に、時期を追って詳細に見てみると、本遺跡における人間の営みの痕跡は、縄文時代早期中葉まで遡る。出土点数は少ないものの、遺跡北部の調査⑦・⑧区から田戸下層式土器が出土しており、大形の石皿が出土した調査⑧区南部を中心とした辺りに居住域が存在したことが推測される。なお、調査⑧区北東部から出土した礫器もこの時期のものと推測される。

その後、期間は空くが、調査⑦区では縄文時代前期前葉の大木2 a 式土器が出土しており、調査②区では縄文時代前期後葉以前の落し穴が4基並んで検出されていることから、縄文時代前期前葉には遺跡北部に居住域がある一方で、遺跡南部は前期後葉以前のある時期には狩猟の場であったことが推測される。さらに時期が下り前期後葉～末葉になると、遺跡南部にも居住域が存在するようになる。調査②区からは当期の土器が多く出土し、堅穴住居跡・土坑も検出されている。出土土器は、大木6式土器が主体的で、次に大木4式土器が多く、大木5式土器は少なく、他に、東関東系の浮島・興津式土器も少量出土している。なお、当期の土器は、次年度報告予定の調査⑥区からも出土しており、関東系の土器には諸磯式土器も認められるが、調査②区からは諸磯式土器は確認されていない。

その後、縄文時代中期末葉～後期前葉にかけて、遺跡の南部および北部に居住域が存在したことが調査②・⑦・⑧区から出土した土器からうかがえるが、今回の調査区は当期の居住域の縁辺部に当たるのであろうか。

縄文時代後期中葉～晩期前葉にかけても、遺跡の南北に居住域が存在したようであるが、南部(調査②区)は貼瘤手法が盛行する後期後葉の瘤付土器第Ⅱ段階(小林2008)の時期に限定され、土器の

出土量も少ない。それに対し、北部(調査⑧区)では当期の土器が多く出土し、宿付土器第Ⅱ段階の他、刻み・刺突が盛行する宿付土器第Ⅲ段階、後期最終末の宿付土器第Ⅳ段階(小林2008)、それに続く大洞B式土器が出土し、後期最終末の竪穴住居跡も1軒検出された。この地区では、ある程度の期間、継続的に人が住んでいたことが推測され、隣接地にも当期の竪穴住居跡が存在する可能性がある。

縄文時代晩期中葉の遺物は、調査②区および調査⑦区で少量出土しており、その後、縄文時代晩期後葉には遺跡中央部に居住域が存在したことが、調査⑤上区から検出された土坑や土器から推測される。

さらに、弥生時代中期にも北部に居住域が存在していた事が推測されるが、土器の出土量は少ない。

その後、本遺跡が再び利用されるようになったのは、奈良時代になってからである。遺跡南部(調査②区)および北部(調査⑧区)からは竪穴住居跡が検出されている。また、調査②区の11号土坑から出土した円面硯は、本遺跡の性格を考える上で特筆されよう。

さらに、各調査区からは9世紀後半頃の土師器や奈良～平安時代のものと推測される溝跡が見つかっており、平安時代には遺跡内の広い地域に居住域が展開していたことがうかがえる。特に、北端部においては、方形区画をなす溝跡が見つかっており、その区画内の性格は不明であるが、遺跡内は方形区画をはじめ、溝によって区画されていたのではないかと推測する。なお、当期については、次年度報告予定の調査⑤下・⑥区からも、奈良・平安時代の竪穴住居跡・須恵器・土師器の他、石鈔が見つかっており、調査②区の円面硯も含めて、本遺跡の南西に所在する当時の安達郡衛と推定される郡山台遺跡との関係を暗示する。本遺跡の東方に所在する生産遺跡の赤井沢窟跡との関係も含め、今後言及していく必要がある。

最後に、今回の調査では、鎌倉時代(13世紀前半頃)の青磁や手づくねかわらけなどの遺物が調査⑤上・⑦・⑧区で数点出土した。遺跡中央部に位置し、次年度報告の調査⑤下・⑥区からは、当期の掘立柱建物跡14棟をはじめとして、井戸跡などが検出され、多量の手づくねかわらけや中国陶磁、国産陶器が出土しており、当期の中心域はこの調査⑤下・⑥区にあったことがわかっている。

また、調査⑧区からは、古代および中世以降の羽口も出土しており、遺跡内に鍛冶関連遺構が存在していたことを示唆する。当期に関しては、未調査の調査⑤中区の調査後に言及したい。(能登谷)

参考文献

- 二本松市 1981 『二本松市史 第3巻 原始・古代・中世 資料編1』
戸田有二編 1981 『油王田遺跡発掘調査報告書』 安達町教育委員会
福島県 1984 『土地分類基本調査 二本松』
二本松市 1999 『二本松市史 第1巻 原始・古代・中世・近世 通史編1』
安藤公男他 2001 『図説 二本松・安達の歴史』 株式会社郷土出版社
小林圭一 2008 『宿付土器』『総覧 縄文土器』 株式会社アム・プロモーション

写 真 图 版



1 遺跡全景（北東上空から）



2 遺跡全景（南西上空から）



3 調査②区全景（南上空から）



4 調査②区近景（南から）



5 調査②区基本土層A-A' (北西から)



6 調査②区基本土層B-B' (東から)



7 11号住居跡全景（東から）



8 11号住居跡細部

a 検出（南東から）
 b 断面（東から）
 c カマド断面（南から）
 d カマド全景（東から）



9 12号住居跡全景（東から）

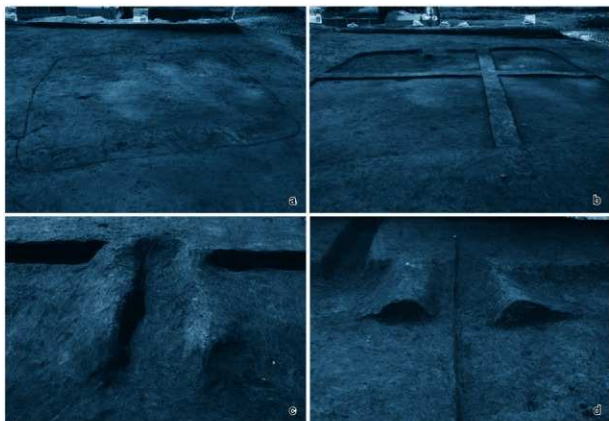


10 12号住居跡細部

a 検出（東から）
b 断面（東から）
c カマド断面（南東から）
d カマド全景（東から）



11 13号住居跡全景（東から）



12 13号住居跡細部

a 検出（東から）
b 断面（東から）
c カマド全景（東から）
d カマド断面（東から）

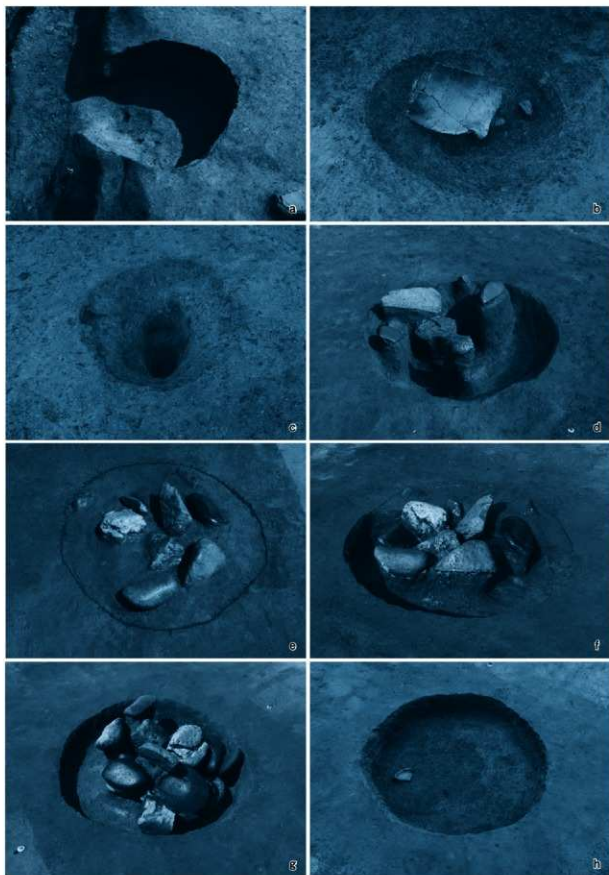


13 14号住居跡全景（南から）



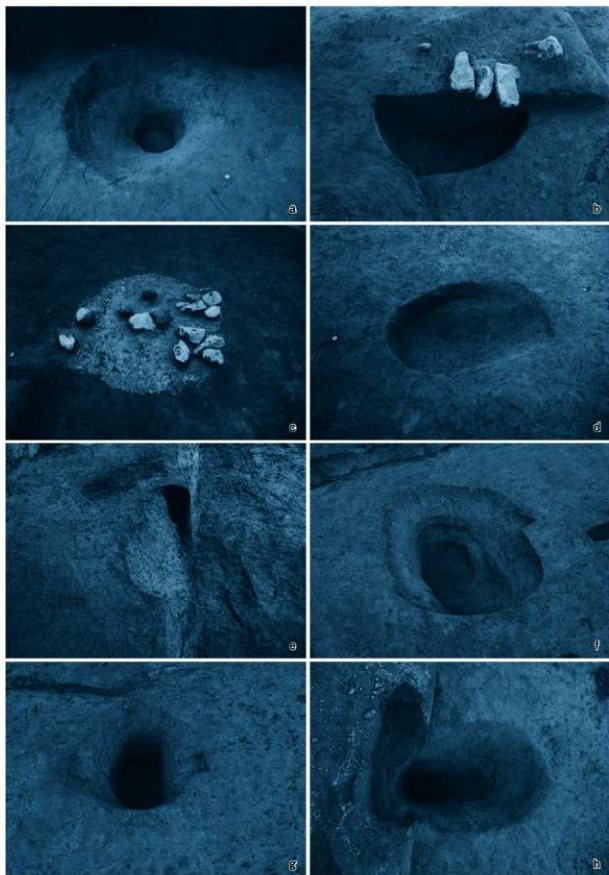
14 14号住居跡細部・遺物出土状況・遺物包含層

a 検出（西から）
 b 断面（東から）
 c 断面（南から）
 d V51グリッド遺物出土状況（北から）



15 8～12号土坑

- a 8号土坑全景 (西から) b 9号土坑全景 (東から)
 c 10号土坑全景 (東から) d 12号土坑全景 (西から)
 e 11号土坑横出 (西から) f 11号土坑断面 (西から)
 g 11号土坑全景 (東から) h 11号土坑遺物出土状況 (北から)



16 13～20号土坑

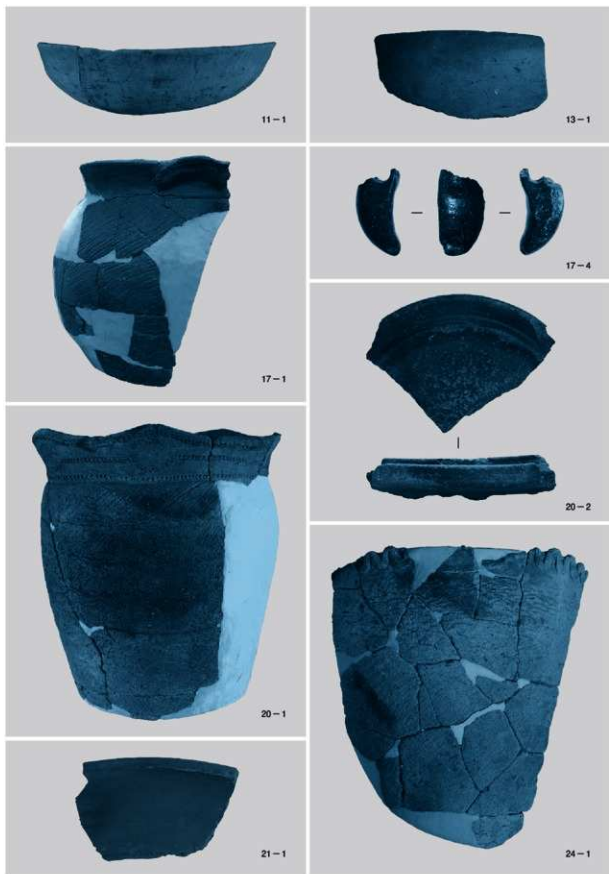
- a 13号土坑全景 (北から) b 14号土坑断面 (南から)
 c 15号土坑横面 (西から) d 16号土坑全景 (南から)
 e 17号土坑全景 (北から) f 18号土坑全景 (南東から)
 g 19号土坑全景 (東から) h 20号土坑全景 (南から)



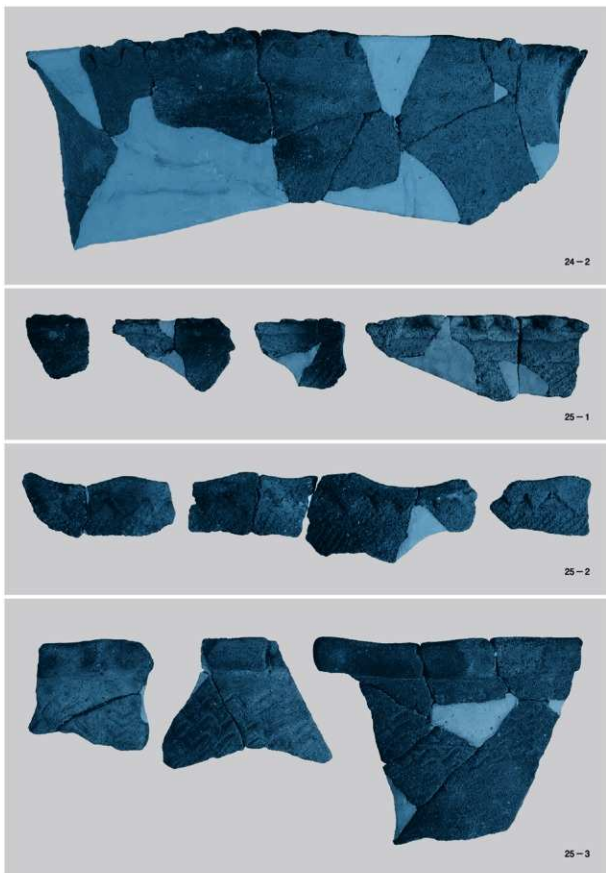
17 7号溝跡全景（東から）



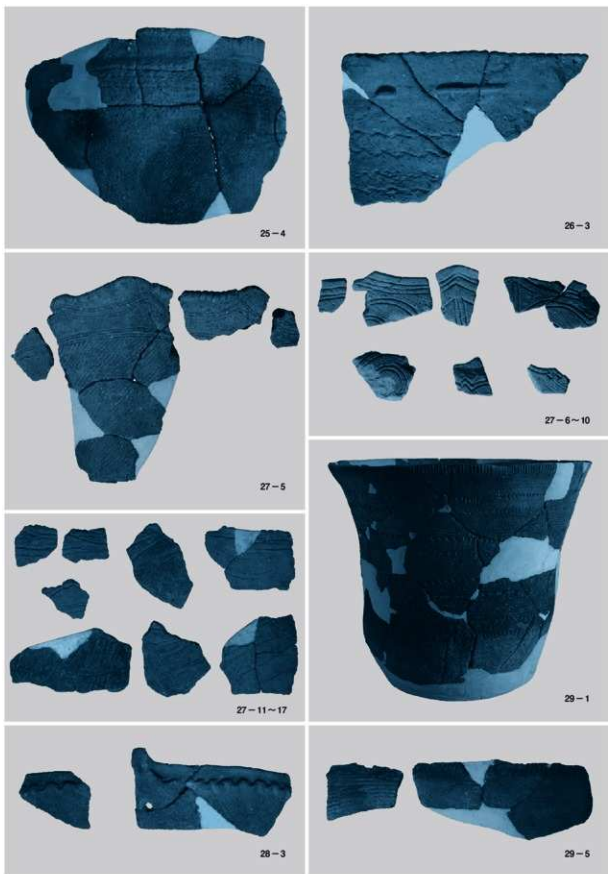
18 8号溝跡全景（北西から）



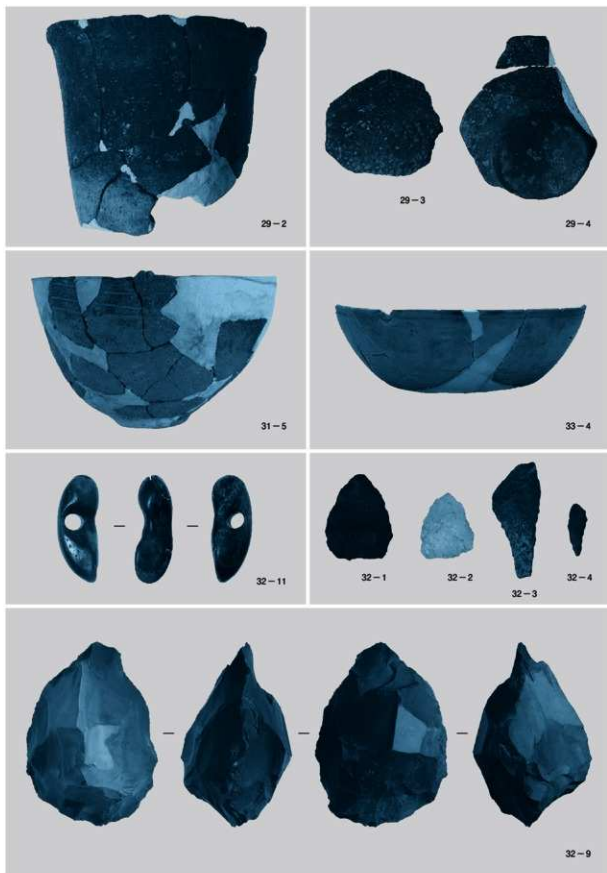
19 調査②区遺構内・遺物包含層出土遺物



20 調査②区遺物包含層出土遺物（1）



21 調査②区遺物包含層出土遺物（2）



22 調査②区遺物包含層出土遺物（3）



23 調査⑤上区全景（東から）



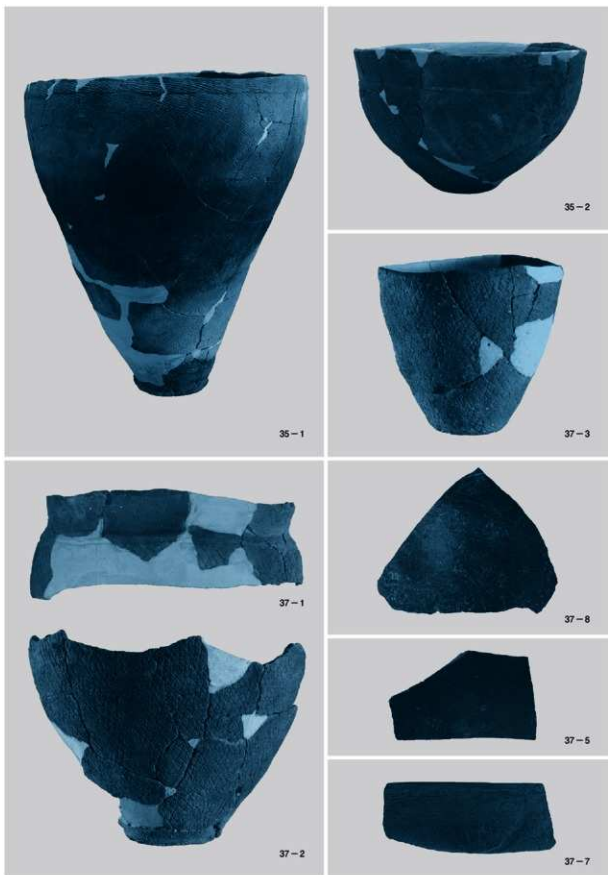
24 調査⑤上区基本土層（南西から）



25 21号土坑全景（南東から）



26 12・13号溝跡全景（南から）



27 21号土坑・調査⑤上区遺物包含層出土遺物



28 調査⑦区全景（西から）



29 調査⑦区基本土層（西から）



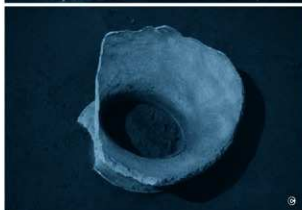
30 1号溝跡全景（南から）



a



b



c



d

31 1号溝跡細部・調査⑦区全景

a 1号溝跡検出（南から）

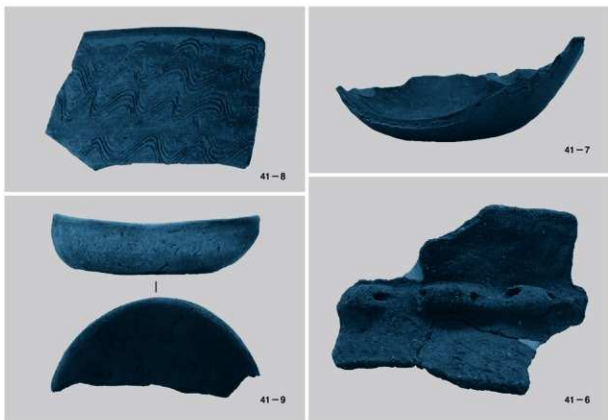
b 1号溝跡断面（南西から）

c 1号溝跡遺物出土状況（南東から）

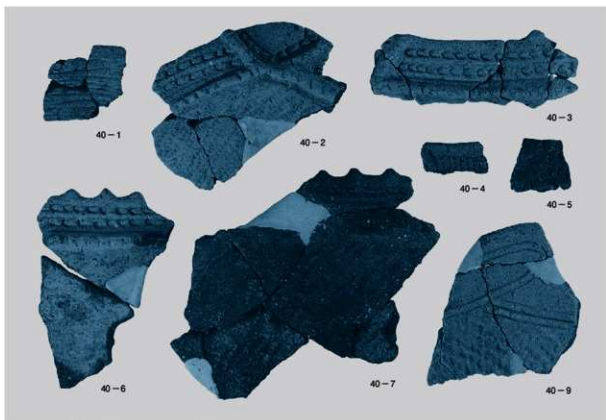
d 調査⑦区全景（南から）



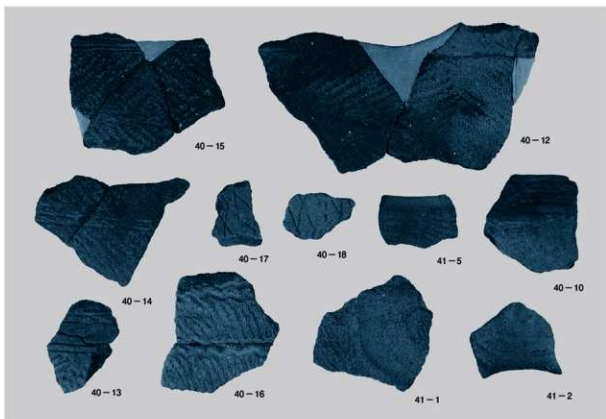
32 1号溝跡出土遺物



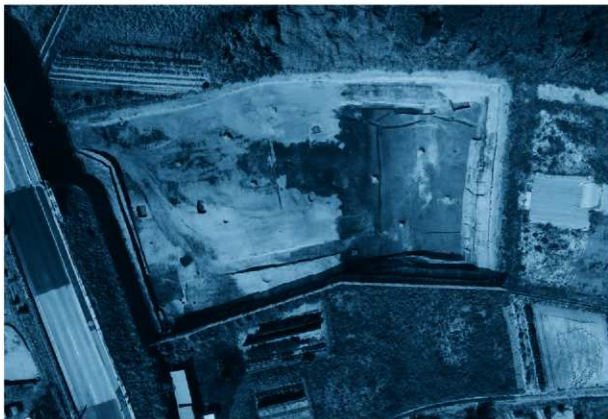
33 調査⑦区遺物包含層出土遺物 (1)



34 調査⑦区遺物包含層出土遺物 (2)



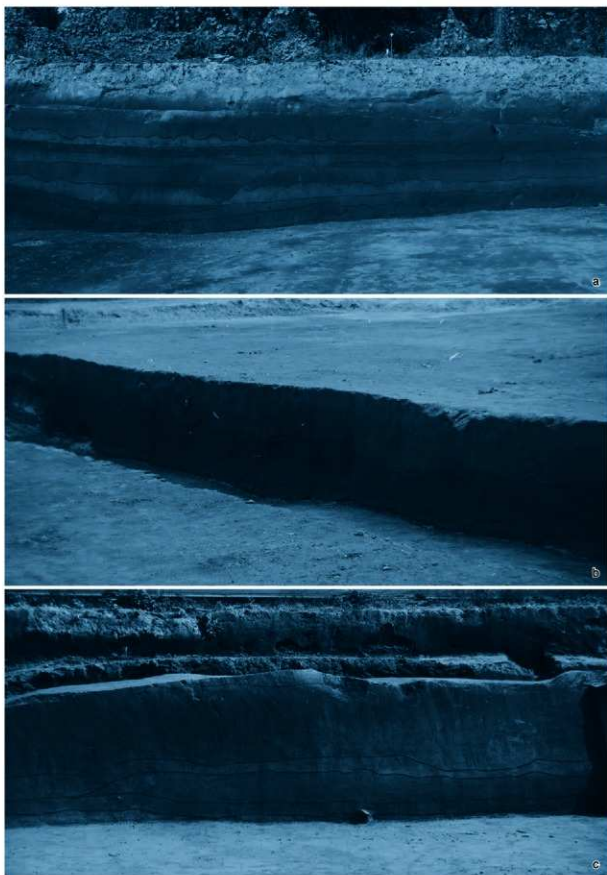
35 調査⑦区遺物包含層出土遺物 (3)



36 調査⑧区全景（真上から）



37 調査⑧区全景（北東から）

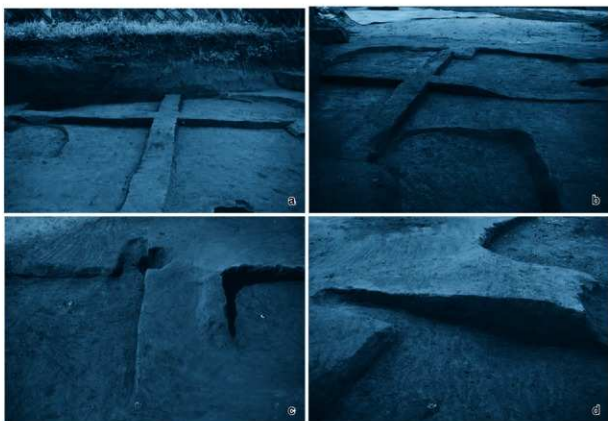


38 調査⑧区基本土層

- a 北部基本土層A-A' (東から)
 b 中央部基本土層B-B' (南東から)
 c 南部基本土層C-C' (西から)



39 1号住居跡全景 (北東から)



40 1号住居跡細部

a 断面 (北東から) b 断面 (東から)
 c カマド全景 (南東から) d カマド断面 (南から)



41 2号住居跡全景（北西から）



a



b



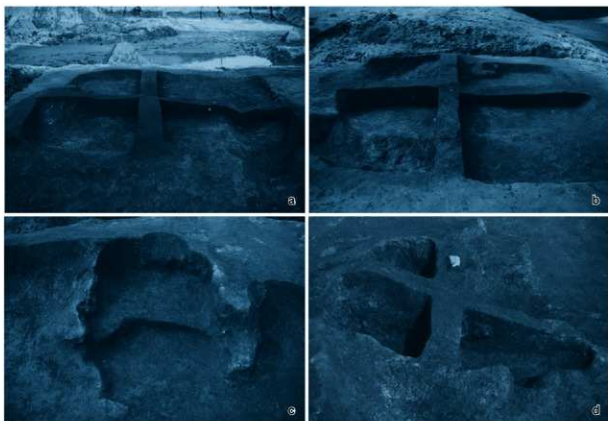
d

42 2号住居跡細部

a 検出（北東から） b 断面（南西から）
c 断面（南東から） d 遺物出土状況（北西から）

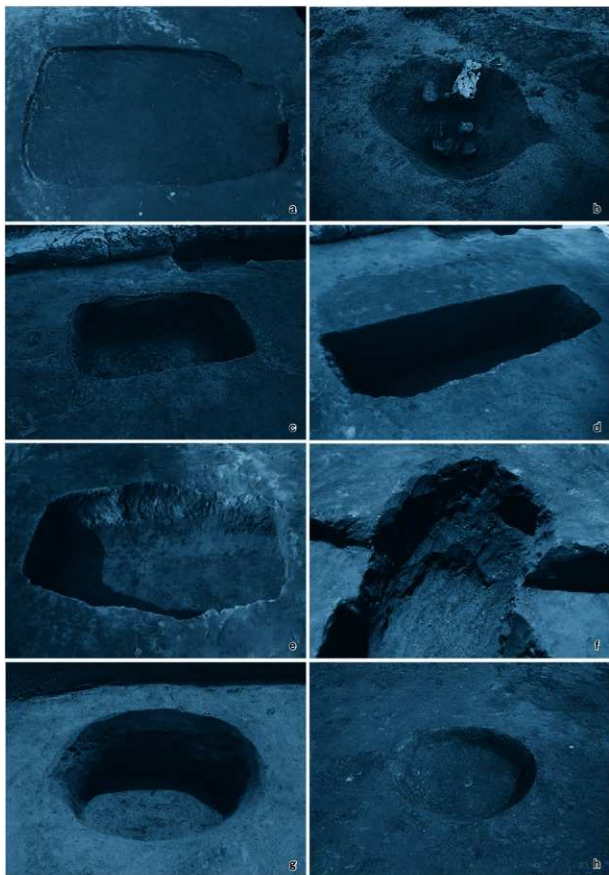


43 7号住居跡全景（南東から）



44 7号住居跡細部

a 断面（南西から）
b 断面（南東から）
c カマド全景（南東から）
d カマド断面（南西から）



45 1~7号土坑

- | | |
|----------------|-----------------|
| a 1号土坑全景 (南から) | b 2号土坑全景 (西から) |
| c 3号土坑全景 (北から) | d 3号土坑断面 (北から) |
| e 4号土坑全景 (南から) | f 5号土坑全景 (北から) |
| g 6号土坑全景 (西から) | h 7号土坑全景 (南西から) |



46 2～6号溝跡全景（南上空から）



47 2・3号溝跡



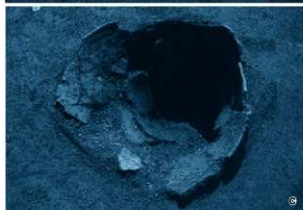
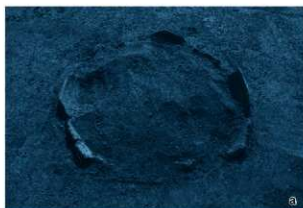
a 2号溝跡全景（南西から） b 3号溝跡全景（北東から）



48 4～6号溝跡



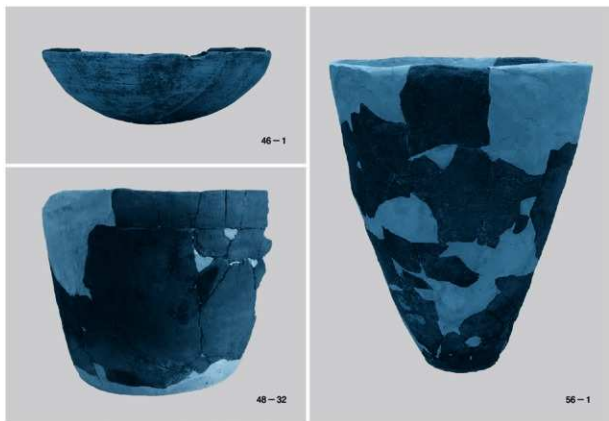
a 4・6号溝跡全景（南西から） b 5号溝跡全景（南東から）



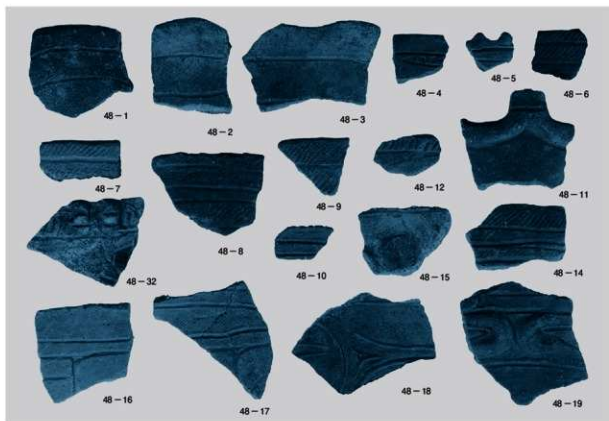
49 1号土器埋設遺構



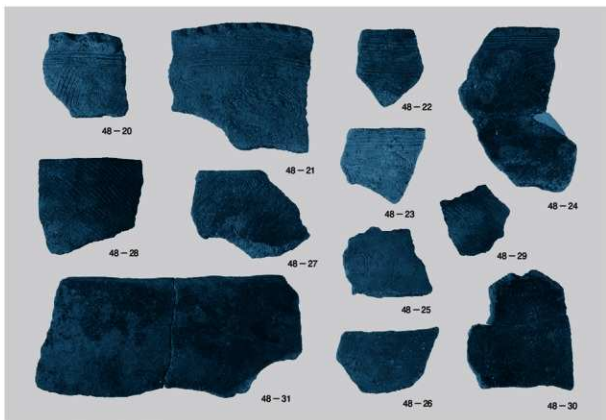
a 検出（北東から） b 断面（南西から）
c 全景（北から） d 掘形全景（南西から）



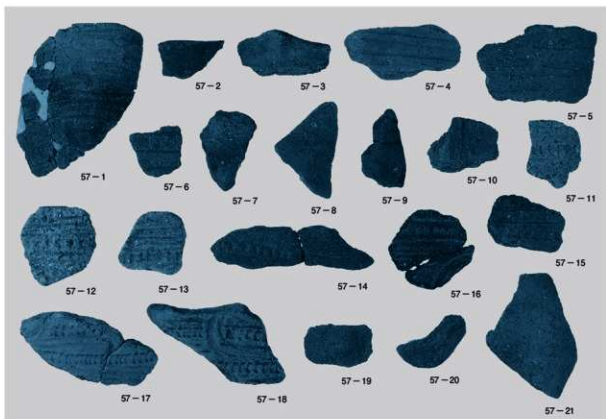
50 1・2号住居跡・1号埋設遺構出土遺物



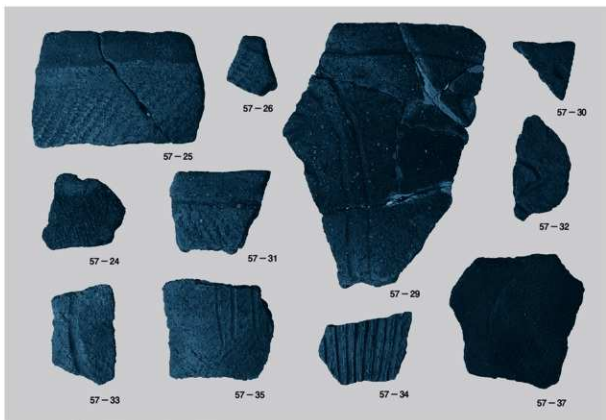
51 2号住居跡出土遺物(1)



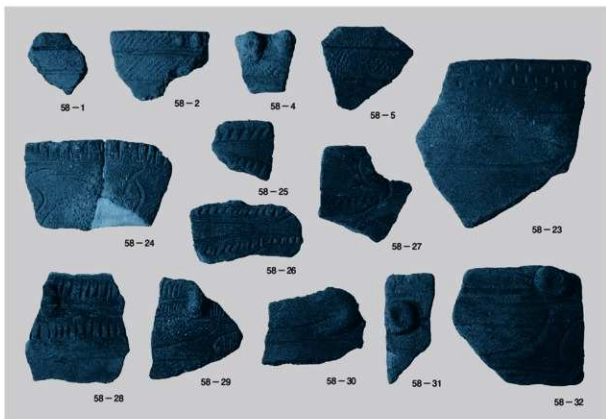
52 2号住居跡出土遺物(2)



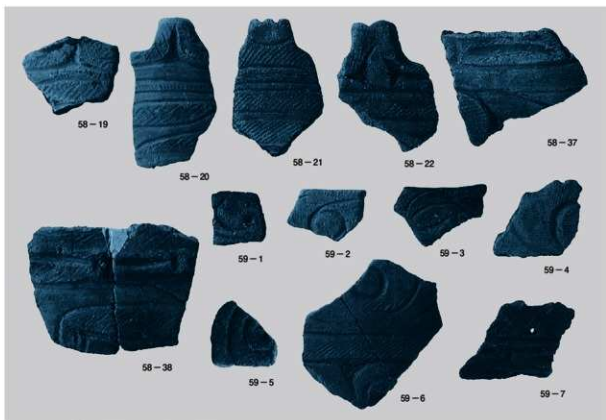
53 調査⑧区遺物包含層出土遺物(1)



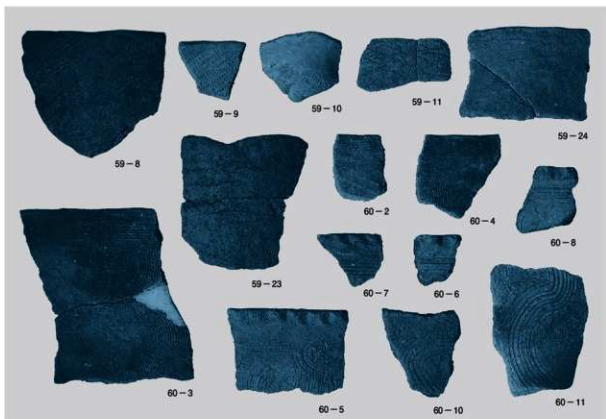
54 調査⑧区遺物包含層出土遺物 (2)



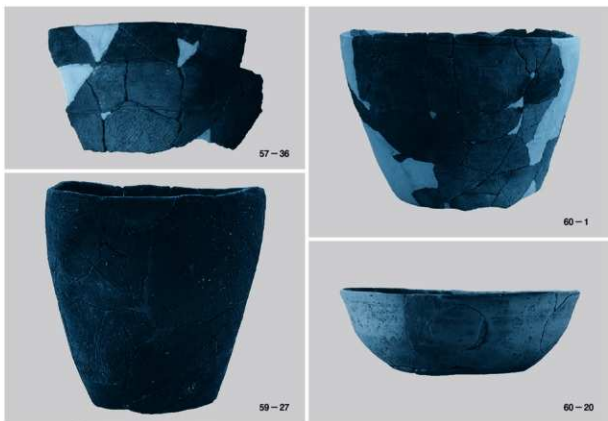
55 調査⑧区遺物包含層出土遺物 (3)



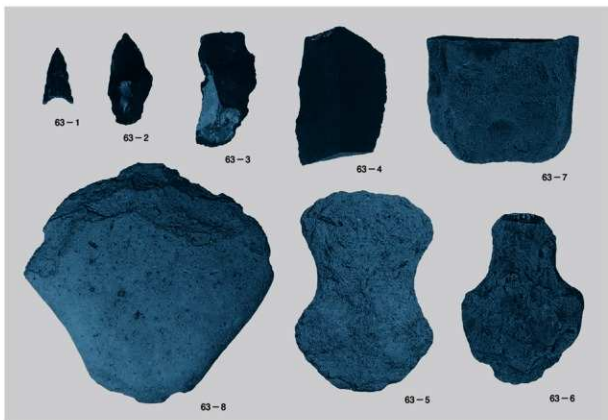
56 調査⑧区遺物包含層出土遺物（4）



57 調査⑧区遺物包含層出土遺物（5）



58 調査⑧区遺物包含層出土遺物 (6)



59 調査⑧区遺物包含層出土遺物 (7)

報告書抄録

ふりがな	あぶくまがわじょうりゅうかせんかいしゅうじぎょうとろみちくいせきしょうさほうこく1							
書名	阿武隈川上流河川改修事業トロミ地区遺跡調査報告1							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第487集							
編著者名	吉田 功 能登谷宜康 大河原勉 三浦武司							
編集機関	財団法人福島県文化振興財団 遺跡調査部 遺跡調査課 〒960-8115 福島県福島市山下町1-25 TEL.024-534-2733							
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL.024-521-1111							
発行年月日	2012年12月21日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
トロミ (1次調査)	福島県二本松市 北トロミ・南トロミ	210	00138	37° 34' 58"	140° 26' 28"	2011年5月23日 ～ 2011年12月20日	13,100㎡	阿武隈川上流河川改修に伴う事前調査
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
トロミ (1次調査)	集落跡	縄文時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代	竪穴住居跡 土坑 溝跡 土器埋設遺構 小穴	7軒 21基 10条 1基 5基	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 かわらけ 石器	上層からは縄文時代後・晩期および奈良・平安時代・鎌倉時代の遺構・遺物が検出され、下層からは縄文時代早・前期の遺構・遺物が検出されたが、遺跡内では地区によって様相が異なる。		
要約	<p>・トロミ遺跡は阿武隈川東岸に形成された自然堤防上に存在する。縄文時代早期～鎌倉時代にわたる複合遺跡である。</p> <p>・調査2区では、上層から奈良・平安時代の竪穴住居跡・土坑・溝跡が検出され、下層からは縄文時代の遺物包含層および竪穴住居跡・土坑を検出している。下層の遺物包含層は縄文時代前期中期～後葉の土器が主体をなしている。</p> <p>・調査3上区からは、奈良・平安時代の溝跡、縄文時代晩期の土坑を検出した。</p> <p>・調査7区では、上層から奈良ないしは平安時代の溝跡が検出され、下層からは縄文時代の遺物包含層が検出された。下層の遺物包含層からは縄文時代早～中期の土器が出土しているが、前期の土器が主体をなす。</p> <p>・調査8区では、上層から竪穴住居跡や土坑が調査区南部から中央部にかけて検出され、北部からは方形に区画する溝跡が検出された。下層からは南部および北部で遺物包含層が検出され、縄文時代早～晩期の土器が出土している。</p>							

*経緯度数値は世界測地系(平成14年4月1日から適用)による。

福島県文化財調査報告書第487集

阿武隈川上流河川改修事業トロミ地区遺跡調査報告1

トロミ遺跡(1次調査)

平成24年12月21日発行

編集	財団法人福島県文化振興財団 遺跡調査部 遺跡調査課	
発行	福島県教育委員会	(〒960-8688) 福島市杉妻町2-16
	財団法人福島県文化振興財団	(〒960-8116) 福島市春日町5-54
	国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所	(〒960-8584) 福島市黒岩字榎平36
印刷	八幡印刷株式会社	(〒970-8026) いわき市平字田町82-13

